西下遺跡

—高松市立十河小学校校舎建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

２００８年３月

高松市教育委員会

第２遺構面検出状況（北から）

掘立柱建物跡SB101完掘状況（北から）

SD103完掘状況（東から）

鳥形木製品出土状況（南から）

例　　言

1　本書は高松市立十河小学校の校舎建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書である。

2　発掘調査地ならびに調査期間は次のとおりである。
調査地：　香川県高松市十川西町366番地５
試掘調査：平成18年７月28日
発掘調査：平成19年６月４日～平成19年７月27日
整理作業：平成19年７月30日～平成20年１月31日

3　発掘調査及び整理作業は高松市教育委員会が担当した。

4　発掘調査は高松市教育委員会文化部文化振興課文化財専門員 山元敏裕が担当し，中西克也・中村茂央（同課非常勤嘱託職員）ならびに大朝利和が補佐した。整理作業は山元総括のもと中村が行なった。

5　本報告書の執筆，第１章第１・２節を山元が，第４章を（株）吉田生物研究所が執筆し，それら以外を中村が行なった。編集は中村が担当した。

6　土壌及び土器観察の色調表現は、新版 標準土色帖農林水産省技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色表監修を基本としている。

7　以下の業務については、委託業務として行った。
基準点打設：　株式会社　イビソク
遺物保存処理：株式会社　吉田生物研究所
遺物写真撮影：西大寺フォト

8　本書で用いる遺構の略号は次の通りである。
SB：掘立柱建物跡　SP：ピット　SD：溝状遺構　SK：土坑　SX：性格不明遺構

9　本報告の高度地は海抜高を表し，方位は座標北を示す。

10　発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

11　発掘調査，整理作業，報告書の執筆にあたって下記の関係機関ならびに方々に御教示・御協力を得た。
香川県教育委員会，高松市立十河小学校，光谷拓実（奈良文化財研究所）

目　　次

第１章　調査の経緯と経過
　第１節　調査の経緯…… 1
　第２節　調査の経過…… 3
　第３節　整理作業の経過…… 4
第２章　地理的・歴史的環境
　第１節　地理的環境…… 5
　第２節　歴史的環境…… 5
第３章　調査の成果
　第１節　調査の概要…… 9
　第２節　基本層序…… 9
　第３節　遺構と遺物…… 9
第４章　自然科学分析…… 32
第５章　まとめ
　第１節　遺構の変遷…… 34
　第２節　鳥形木製品…… 34
第３節　第２遺構面検出遺構について…… 35

挿　図　目　次

第１図　試掘調査位置図（縮尺１/800）
第２図　試掘調査位置図（縮尺１/400）
第３図　第２トレンチ平面図（縮尺１/80）
第４図　第２トレンチ柱状断面図
第５図　第２トレンチ出土遺物実測図（縮尺１/４）
第６図　西下遺跡周辺微地形図（Ｓ＝１/10,000）
第７図　西下遺跡周辺の字界線図（Ｓ＝１/5,000）
第８図　周辺の遺跡位置図（Ｓ＝１/2,500）
第９図　東壁面土層図（Ｓ＝１/80）
第10図　南壁面土層図（Ｓ＝１/80）
第11図　西壁面土層図（Ｓ＝１/80）
第12図　第１遺構面　遺構配置図（Ｓ＝１/100）
第13図　第１遺構面検出SP
　平面図・断面図（Ｓ＝１/80）
第14図　第１遺構面検出SP出土遺物（Ｓ＝１/４）
第15図　SD1土層断面図（Ｓ＝１/40）
第16図　SD1出土遺物（Ｓ＝１/４，１/２）
第17図　SD2土層断面図（Ｓ＝１/40）
第18図　SD2出土遺物（Ｓ＝１/４）
第19図　SD3土層断面図（Ｓ＝１/40）
第20図　SD3出土遺物（Ｓ＝１/４）
第21図　SD4土層断面図（Ｓ＝１/40）
第22図　SD5土層断面図（Ｓ＝１/40）
第23図　SK1土層断面図（右）と埋土除去後断面図（左）
　（Ｓ＝１/40）
第24図　SK1出土遺物（Ｓ＝１/４）
第25図　最下層出土遺物（Ｓ＝１/４）
第26図　攪乱層出土遺物（Ｓ＝１/４）
第27図　第１遺構面直上出土遺物（Ｓ＝１/４）
第28図　第１遺構面形成層上部出土遺物（Ｓ＝１/４）
第29図　第１遺構面上層出土遺物（Ｓ＝１/４）
第30図　第２遺構面　遺構配置図（Ｓ＝１/100）
第31図　SB101上面検出状況（左）と完掘状況（右）
　平面図・断面図（Ｓ＝１/80）
第32図　第２遺構面検出SB・SP出土遺物（Ｓ＝１/４）
第33図　SB102上面検出状況（上）と完掘状況（下）
　平面図・断面図（Ｓ＝１/80）
第34図　SB103完掘状況平面図・断面図（Ｓ＝１/80）
第35図　SB101－４・SB101－５出土柱材（Ｓ＝１/４）
第36図　SB101－７・SB102－１出土柱材（Ｓ＝１/４）
第37図　SD101土層断面図（Ｓ＝１/40）
第38図　SD101出土遺物（Ｓ＝１/４）
第39図　SD102土層断面図（Ｓ＝１/40）
第40図　SD102出土遺物（Ｓ＝１/４）
第41図　SD103土層断面図（Ｓ＝１/40）
第42図　SD103出土遺物（Ｓ＝１/４）
第43図　SD103出土鳥形木製品（Ｓ＝１/２）
第44図　第２遺構面上部堆積層出土遺物（Ｓ＝１/４）

挿　表　目　次

第１表　発掘調査工程
第２表　高松市西下遺跡出土木製品同定表
第３表　遺構変遷表（第２遺構面）
第４表　出土遺物観察表（土器）
第５表　遺物観察表（石製品）
第６表　遺物観察表（木製品）

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

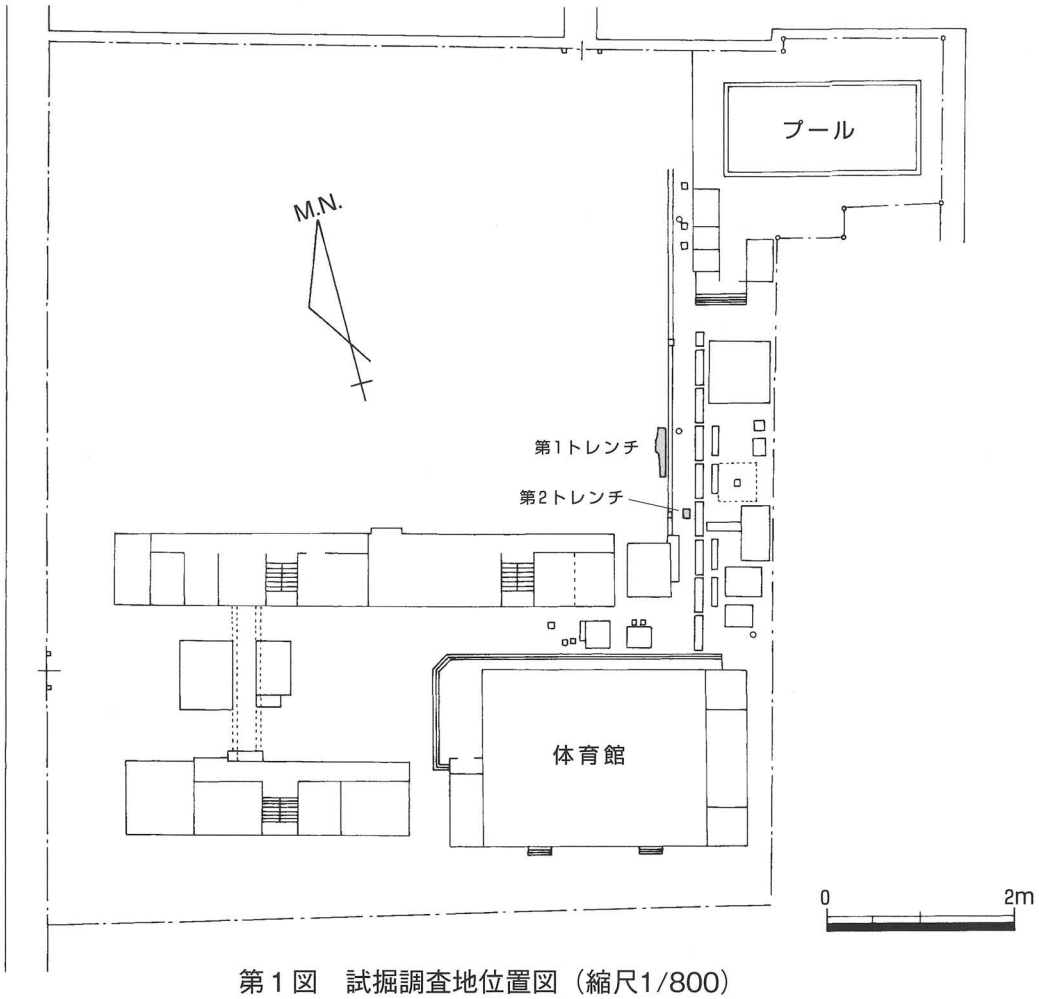
高松市教育委員会文化振興課では，文化財に影響を及ぼす可能性のある公共工事について，年度末に次年度以降の事業内容を把握するため関係各所属長宛に照会を行い，対応を協議している。

今回報告を行う十河小学校校舎増築工事に伴い発掘調査を実施した西下遺跡については，平成17年１月に行った照会に対して教育委員会総務課（以下，総務課とする）からの回答で，校舎増築の工事予定を把握した。これまで十河小学校内における周知の埋蔵文化財包蔵地は確認されていないものの，小学校南側にある東西方向の市道が古代の官道である南海道を踏襲するものと考えられている。さらにその南の尾根上には古墳時代中期後半頃と考えられる西尾天神社古墳が単独で所在している。小学校の東側では県道長尾大内バイパス建設工事に伴い奈良時代の遺跡である露尾遺跡(旧西尾遺跡)が確認されるなど，周辺部には遺跡が近接しており，当該地においても埋蔵文化財包蔵地が確認される可能性が高いことが想定された。このため事業実施にあたっては文化振興課と協議をもつように回答した。

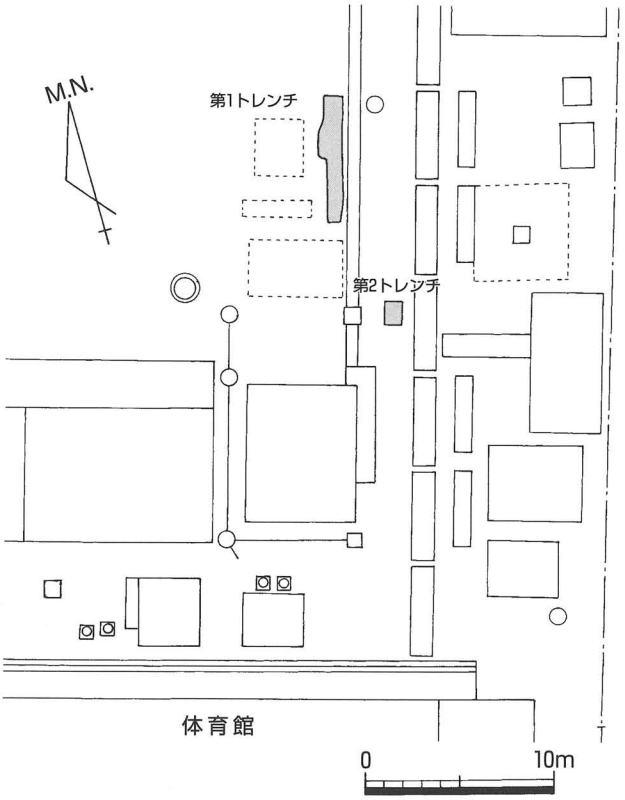
その後の教育委員会総務課との協議では，当該事業は平成19年度に実施予定であり，平成17年度では校舎増築内容が未確定であることから，試掘調査については増築箇所の範囲等事業内容が詳細になる平成18年度に実施することで調整を行った。

平成18年度に入り，校舎増築予定地の範囲等がおおよそ固まり，予定地内の試掘調査を実施するため学校側と協議を行った。その結果，試掘調査では重機等を使用するため，小学校であるという状況から児童の安全面を考慮し，影響の少ない小学校の夏期休暇中に行うこととし，試掘調査を７月28日に実施した。試掘調査の詳細については，以下のとおりである。

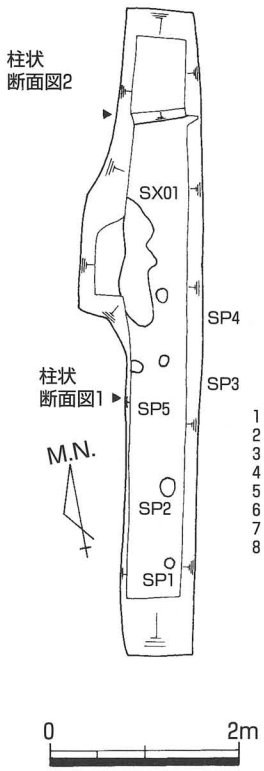
校舎増築予定地については，事前に総務課より取り寄せた過去の工事図面から昭和38年に造られたプールがかつて存在していた場所であることが判明していた。このことから試掘調査前からプールの基礎によって地下の状況が大きく改変されていることが想定された。予定地の現況は第１図に示すとおり北校舎の東，体育館の北側にあたり倉庫，温室，飼育小屋，花壇，コンクリート製渡り廊下，遊具等が存在するなど制約の多い場所である。これらの構造物を避けるように２箇所にトレンチを設定し，試掘調査を実施した。南側に設定した幅１ｍの第１トレンチは表土から20㎝程下げた段階で水道管と考えられる塩化ビニール製管を確認したことから，それ以上の掘削は行わず埋め戻しを行った。北側に設定した第２トレンチでは地表面から25㎝の厚さで第１層である花崗土が，その下には第２層である30㎝の厚さでプール解体時に発生したコンクリート塊を多量に含む花崗土が存在し，その直下で遺構面である明褐灰色砂を確認した。第２トレンチにおける大部分の土層状況は同じであるが，後述するSX01の北側部分から北への傾斜がみられ，第８層である遺構面までに第３層から第７層までの間層が見られる。第３層は旧耕作土と考えられる褐灰色シルト，第４層は床土と考えられるにぶい黄橙色シルト，第５層は明褐色砂質シルト，第６層は灰黄褐色砂，第7層は明黄褐色粘質シルト，第８層は遺構面である明褐灰色砂となる。土層堆積が異なる北側部分以外で性格不明遺構SX01及び柱穴と考えられるSP01～05などの遺構を確認した。第２トレンチで確認した遺構は発掘調査が予定されていたため，上面検出に止め掘削を行わなかった。その後，増築予定校舎の位置が当初の計画から変更されたことにより，調査対象から外れた。このことから，今回の試掘調査で確認した遺構の状況は平面検出時の成果によるものである。



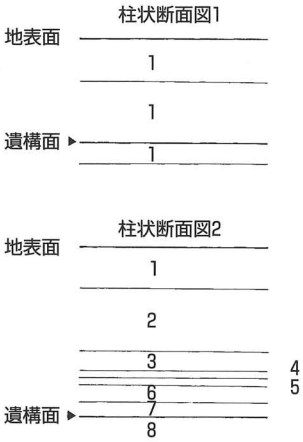
第１図　試掘調査地位置図（縮尺1/800）



第２図　試掘調査位置図（縮尺1/400）

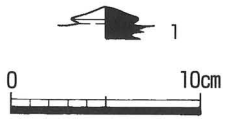


第３図　第２トレンチ
平面図
（縮尺1/80）



1　小学校敷地造成土（花崗岩）
2　旧プール解体コンクリート（塊を含む造成土）
3　褐灰色シルト　10YR 5/1
4　にぶい黄橙色シルト　10YR 6/3
5　明褐色砂質シルト　7.5YR 5/5
6　灰黄褐色砂　10YR 5/2
7　明黄褐色粘質シルト　2.5YR 7/6
8　明褐灰色砂　5YR 7/1

第４図　第２トレンチ
柱状断面図



第５図　第２トレンチ出
土遺物実測図
（縮尺1/４）

SX01

第２トレンチ中央より北側で確認した南北に長い不整形の遺構である。遺構の平面規模は南北1.3m，東西30cmであるが，東西方向は一定ではない。遺構埋土は灰褐色シルトと暗赤褐色シルトが混在し，炭化材・土師器細片を多量に含む。下部の調査を行っていないが，遺構平面検出作業において遺構の平面規模が縮小したことから，それほどの厚みを持つ遺構ではないと考えられる。埋土には炭化材を多量に含むものの，埋土周辺の遺構面には，赤変・硬化した部分は認められないことから，この部分での火の使用によってできたものではないと考えられる。出土遺物は土師器片が出土しているが，細片のため時期を特定できない。

SP１～５

南北に４穴並ぶピットを南からSP１～４，SP3の西側で確認したピットをSP５と呼称する。いずれのピットも平面は円形を呈し，上面での土層の色調はにぶい黄橙色シルトである。SP１～５のうち，SP５を除く各ピットの位置関係にまとまりがみられる。南北１列に並んでいることから，４つのピットが一連のものであるように見えるが，以下に述べるような違いが認められる。SP１・３の平面規模は直径10cm，SP２・４の規模は18cm及び15cmと規模が同じか似通っている上に，それぞれのピット間の距離は前者が2.15m，後者が2.05mと同じような距離間隔で穿たれていることがわかる。確認した範囲は南北方向の一部に限られた遺構検出であり，東西方向の広がりは全く不明であるが，確認範囲でのピットの位置関係には企画性が認められ，試掘調査で検出したこれらのピット列は重複する２つの掘立柱建物跡を構成する柱穴の一部である可能性が考えられる。

試掘調査出土遺物（第５図）

遺構検出時に出土した土器の多くが細片となっており，表面が摩滅しているものが多く認められた。土器の形状のわかるものはほとんど認められなかったが，唯一図化できたのが，第５図に示す須恵器杯蓋のつまみである。つまみの形態が扁平な菱形を呈していることから８世紀頃のものであると考えられる。

試掘調査の結果について

確認した５つのピットはいずれも小規模であり，土層埋土も新しい時期の遺構埋土と共通する様相を呈していた。それを裏付けるように出土遺物中に古代より以前と考えられる出土遺物は前述の須恵器つまみ１点のみであり，中世後半頃と考えられる土器片が大半を占めていた。古代以降の土器では，染付などの近世陶磁器や中世前半の瓦器や黒色土器も認められなかったことから，確認した遺構は中世後半頃の時期のものと想定できる。前述の唯一図化できた扁平な須恵器杯蓋のつまみであるが，土器表面の摩滅が顕著であることから，今回の試掘調査で検出したピットに伴うものではないと判断でき，南に存在すると考えられる古代の遺跡から移動してきたものと考えられる。

第２節　調査の経過

試掘調査の成果を受け，校舎増築予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地であることが判明したことから，総務課と協議を行った。８月から校舎増築工事にかかる予定であることから，工事実施前の６月から７月末までの２ヶ月間で本調査を実施することで合意した。発掘調査の工程については次の調査

日誌抄を参照されたい。

6月　1日　調査用機材搬入

4日　重機による機械掘削および遺構検出。

6日　重機による機械掘削終了。遺構検出継続。第1遺構面上に撹乱が多く遺構検出に手間取る。

12日　調査区基準点測量。

19日　平板による遺構図作成。

20日　第1遺構面検出終了。

21日　遺構掘削開始。適宜，各遺構写真撮影，土層実測を継続する。

7月　2日

～ 11日　梅雨特有の天候不良が続くものの，遺構掘削作業を継続する。

12日　第1遺構面完掘。

18日　完掘写真撮影のための清掃作業。

19日　完掘状況写真撮影。平面実測用割付作業。

20日　調査区遺構平面図作成開始。

23日　調査区遺構平面図作成終了。

24日　調査区遺構平面図レベル注記作業終了。

25日　重機による下層遺構確認作業。第2遺構面確認。掘立柱建物跡3棟，溝3条確認。

26日　第2遺構面遺構掘削。遺構平面図作成開始。土層断面図追加実測。

27日　第2遺構面遺構完掘。遺構平面図作成終了。第2遺構面完掘状況写真撮影。調査区埋め戻し。現場での作業終了。調査機材撤収。

第3節　整理作業の経過

整理作業は，調査と並行して6月から開始した。各工程は以下の表に記した。

第1表　整理作業工程表

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
洗浄								
接合・復元								
実測								
トレース								
写真撮影								
レイアウト								
執筆・編集								

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

高松市は，香川県の中央やや東側に位置する。市域の大部分は香東川をはじめ，本津川，御坊川，春日川，詰田川，新川などによる堆積作用によって形成された扇状地にあたる。北東部には屋島，東には立石山塊，北に石清尾山と浄願寺山，北西には五色台，西に堂山，南は讃岐山脈が連なる。また台形状の山頂に急な崖を持つメサと，山頂まで急な斜面が続き尖った形状をしたビュートといった軟質の岩盤の上に硬い岩盤がのった溶岩台地が特徴的である。北は瀬戸内海に面しており，海を挟んで岡山県と向かい合う。

西下遺跡は，高松市南部に位置する。東には吉田川，西には春日川が北流しており，２本の川に挟まれている。南には讃岐山脈から続く丘陵が北へ伸び，その先には春日川や丘陵の谷部からの沖積作用によって形成された高松平野が広がる。本調査地は讃岐山脈から北へ伸びる丘陵先端のやや東側に位置する。等高線は18mのラインにかかり，南西から北東へ緩やかに降る地形である。（第６図参照）

第２節　歴史的環境

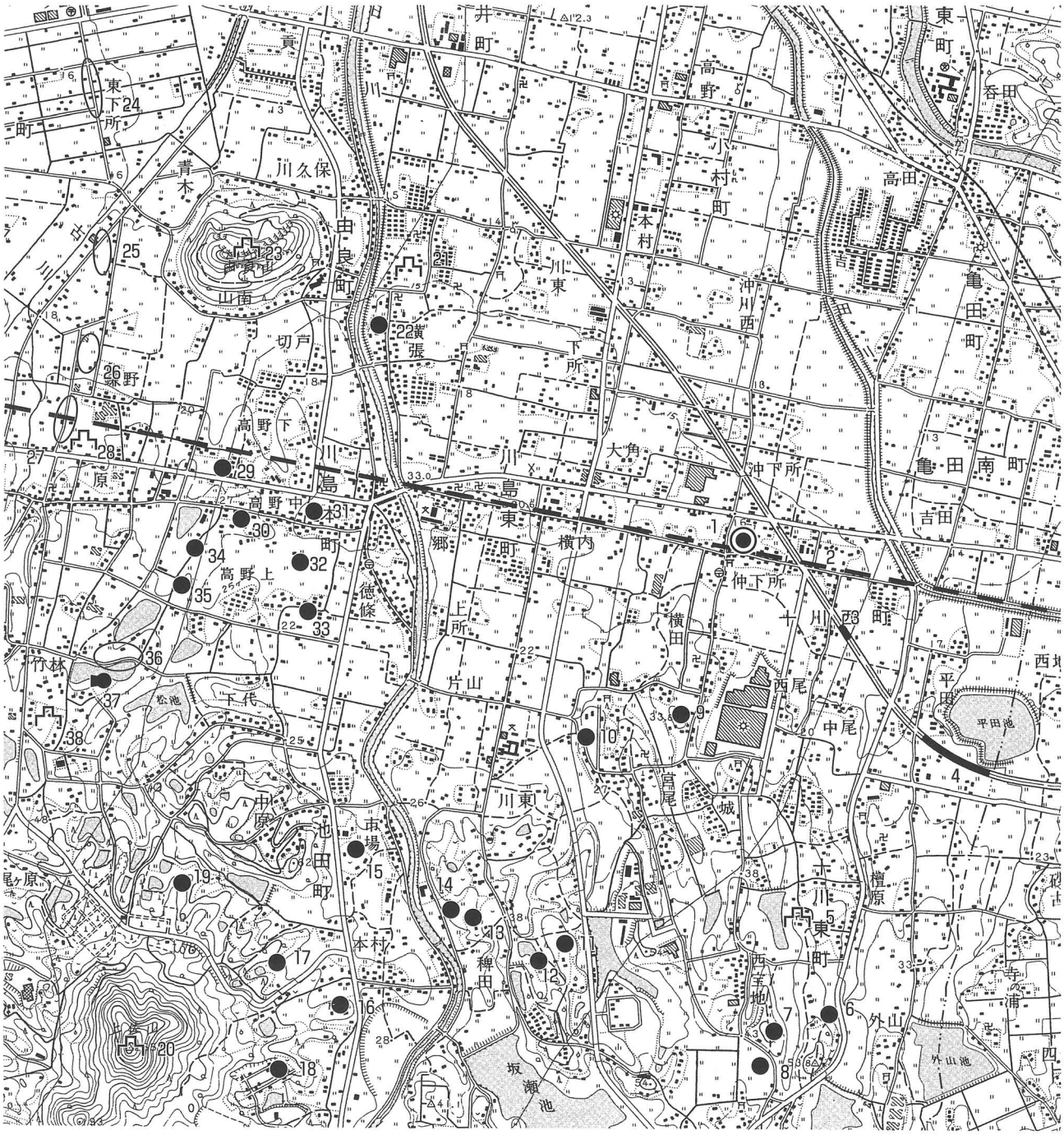
今回の調査地周辺は，南部の丘陵を中心に古墳や中世城館等の遺跡が確認されている地域である。西は春日川を越えれば，主な遺跡として弥生時代では北野遺跡や光専寺山遺跡が知られる。古墳時代では刳抜式石棺を内部主体に納めた前方後円墳の三谷石舟古墳や大型円墳の高野丸山古墳が知られる。古代では官道である南海道が東西に走り，三谿駅の設置が推定されているなど歴史的に重要な地域であり，遺跡が多く存在する。それに比べ，東は調査事例が少なく，現在のところ遺跡の存在がまばらな地域でもある。以下，西下遺跡周辺の遺跡を概観していく。

旧石器時代の遺跡は現在確認されていない。縄文時代では，十川東・平田遺跡から草創期と考えられる有舌尖頭器が出土している。川島本町遺跡からは後期の落ち込み状遺構や土器が出土している。弥生時代では，前期の遺構と遺物を検出した北野遺跡や，弥生土器が多量に出土した光専寺山遺跡，後期の河川や溝を検出した鎌野西遺跡，分銅形土製品の出土と住居跡を検出した中山田遺跡が知られている。また西尾天神社古墳や西下遺跡でも弥生土器が確認されており，十川周辺にも弥生時代の遺跡があるものと推測される。古墳時代では，西尾天神社古墳，松宇八幡馬場古墳，川東１号墳・２号墳等の盛土円墳が造営される。また、６世紀末には弥生時代の竪穴式住居を切り込み，造営した中山田３号墳が確認されている。古代では，南海道が木田郡三木町白山の南麓と高松市御厩町の六つ目山と伽藍山の間を結んで想定されている。この南海道に関連したものには，８～９世紀代の集落遺跡とされる露尾遺跡があり，建物跡が条里地割に合致し，地割の起源が８世紀に遡る可能性を示す。また三谷中原遺跡では官道の推定ラインにあたるとして調査されている。確認には至っていないが自然河川と条里地割に沿った溝を検出した。中世に入ると居城が築かれはじめ，三谷氏の上佐山城や三谷城，鎌野氏の鎌野城，由良氏の由良山城と由良城が築城されるほか、建物跡を検出した由良南原遺跡が確認されている。西下遺跡の周辺では現在の称念寺を中心に，十河氏の居城であった十河城跡が確認されている。近世では上林遺跡から条里地割に則った掘立柱建物群や溝が確認されている。

今回調査した西下遺跡は，南海道跡の北に隣接する。南東方向には露尾遺跡があり，平野部の北には条里地割が確認でき，古代の遺跡や制度に囲まれた環境にある。春日川以東では数少ない遺跡であり，十川西町の歴史を推察する一つの手がかりとなる遺跡でと考えられる。

第６図　西下遺跡周辺微地形図（S=1/10,000）

第７図　西下遺跡周辺の字界線（S=1/5,000）



1.西下遺跡	2.旧南海道跡	3.露尾（西尾）遺跡	4.十川東・平田遺跡	5.十河城跡
6.出之山北塚	7.出之山古墳	8.出之山南古墳	9.西尾天神社古墳	10.松宇八幡馬場古墳
11.金法寺古墳	12.天親墳	13.川東１号墳	14.川東２号墳	15.光専寺山遺跡
16.池田合子神社御旅所古墳		17.上佐山東麓古墳	18.中山田遺跡，中山田３・４号墳	
19.通谷遺跡	20.上佐山城跡	21.由良城跡	22.由良南原遺跡	23.由良山城跡
24.上林遺跡	25.北野遺跡	26.鎌野西遺跡	27.三谷中原遺跡	28.鎌野城跡
29.高野丸山古墳	30.高野廃寺	31.川島本町山田遺跡	32.川島本町遺跡	33.川島本町南遺跡
34.高野南１号墳	35.高野南２号墳	36.石舟池古墳群	37.三谷石舟古墳	38.三谷城跡

第８図　周辺の遺跡位置図（S＝1/2,500）

第３章　調査の成果

第１節　調査の概要

十河小学校北校舎の東に東西17m，南北13m，約221㎡の調査区を設定した。遺構面は上層（第１遺構面）と下層（第２遺構面）の２面を検出した。調査当初はプール施設が過去にあったため，遺構面の残存状況は悪いものと想定されていた。実際に上層は近現代の攪乱が激しく，全体的に第１遺構面の残りは悪かった。調査区西側は校舎や飼育小屋の造成時に遺構面の直上まで掘り起こされている状態であったが，残った遺構面から柱穴や溝の跡を検出した。東側は焼却場やプールの造成により遺構面まで掘り起こされているほか，コンクリート暗渠の残存もあり，南壁面際に柱穴と溝を検出したにとどまる。時期は遺物から古代から中世にあたるものと考えられる。須恵器，土師器が多量に出土したほか，瓦，石製品が見られる。第１遺構面を完掘後，下層遺構面の有無を確認するため南壁面に沿って，東西約1.4m，南北１ｍのトレンチを設定し重機で掘削を行なった。地上から約1.3m下で第２遺構面を確認した。調査範囲は，第１遺構面で遺構の残りが比較的良かった調査区西半分を対象にし，東半分は土置き場とした。東西約６ｍ，南北９ｍ，面積54㎡と面積は狭いながら，遺構面からは掘立柱建物跡３棟と溝３本を検出することができた。掘立柱建物跡の内，１棟は隅丸方形の柱穴に東西３間以上，南北５間以上の規模をもち，いくつかの柱穴には柱材が残っているものもあった。また溝からは祭祀具と考えられる鳥形木製品が出土した。

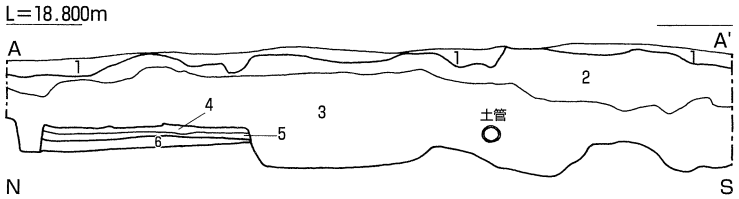
第２節　基本層序

土層は北壁を除く３壁を図化した。本調査区の土層については４つに大別することができる。一つは第１層から第３層までの層で，主に十河小学校校舎建築に伴う造成土である。およそ80㎝の厚い層であり，花崗土を用いて造成している。また，東壁面と南壁面の東側では焼却されたゴミの層が1.2m以上埋め立てられており，遺構面まで及んでいる。２つ目は第１遺構面直上までの第４・５層の水田層である。Ｎ６/灰色砂質シルトの薄い層が広がっている状態が確認できる。３つ目は第６層から第13層までの遺構・遺物を含む層である。この内，第６層10YR 7/1灰色砂質シルトと第７層10YR 6/1褐灰色砂質シルトが第１遺構面を形成している層である。両層からは須恵器・土師器片が出土しており，これらの遺物から第１遺構面は中世の遺構面と考えられる。この第１遺構面の下には，第９層から第13層の遺物を含む層が堆積している。

さて第２遺構面は，第１遺構面の40㎝下に確認することができた。第16層10YR6/1褐灰色粘質シルトを示し，掘立柱建物跡，溝状遺構を検出した。最後は、第２遺構面の下に17層10YR5/1褐灰色粘土の地山を確認した。

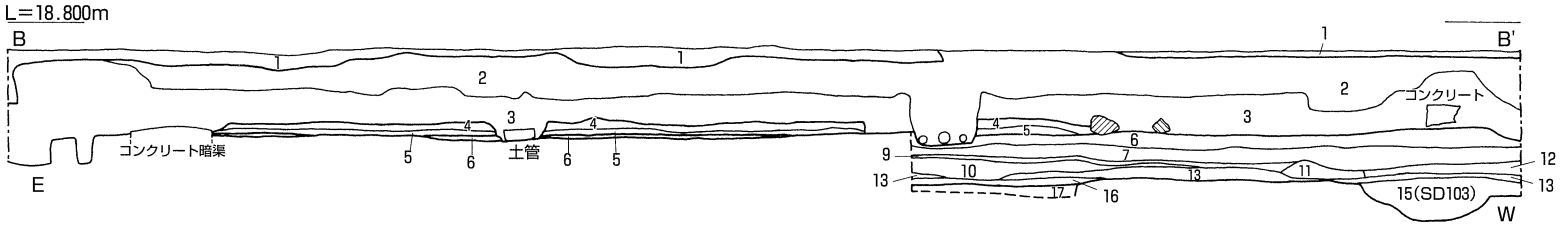
第３節　遺構と遺物

遺構は第６層直上と第16層直上から確認できた。以下，検出された遺構と遺物の状況について述べていく。また，遺物については小片が多く，器種・種類を把握するために，なるべく遺物の部位と調整等の情報を記していくこととする。

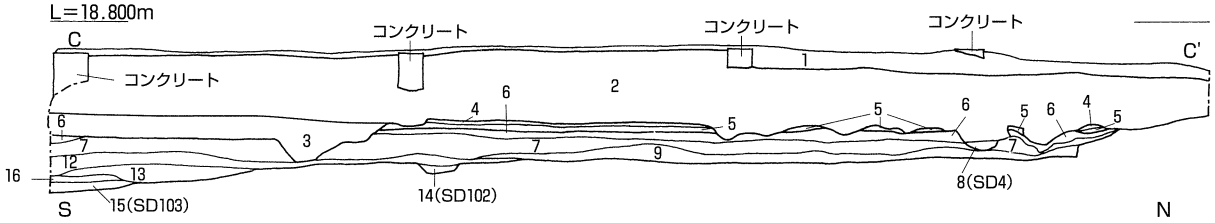


第９図　東壁面土層図（S=1/80）

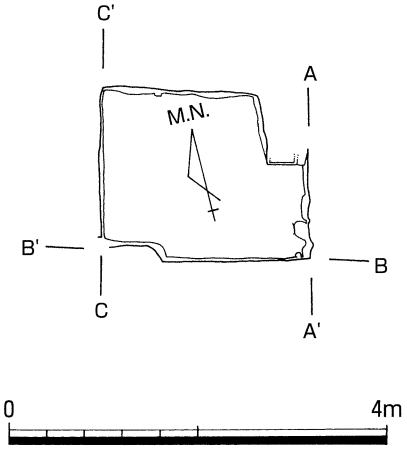
1　10YR 6/2 灰黄褐色 砂～10YR 5/1 褐灰色 砂
2　7.5YR 6/8 橙色 砂利　（花崗土）
3　ゴミ焼却場，プール，飼育小屋造成時による攪乱層
4　N 6/ 灰色 砂質シルト
5　N 6/ 灰色 砂質シルト　（5YR 5/8 明赤褐色の褐鉄鋼が入る。）
6　10YR 7/1 灰色 砂質シルト　（マンガンを含む。）
7　10YR 6/1 褐灰色 砂質シルト　（マンガンを含む。）
8　SD4埋土
9　10YR 6/2 灰黄褐色 粗砂シルト　（微量にマンガンを含む。）
10　10YR 7/1 灰白色 砂質シルト　（微量に褐鉄鋼を含む。）
11　2.5YR 7/3 浅黄色 砂
12　7.5YR 5/1 褐灰色 砂質シルト　（微量にマンガン・褐鉄鋼を含む。）
13　10YR 7/1 灰白色 砂混粘質シルト　（微量に褐鉄鋼を含む。）
14　SD102埋土
15　SD103埋土
16　10YR 6/1 褐灰色 粘質シルト　（褐鉄鋼を多量に含む。）
17　10YR 5/1 褐灰色 粘土　（微量に褐鉄鋼を含む。）



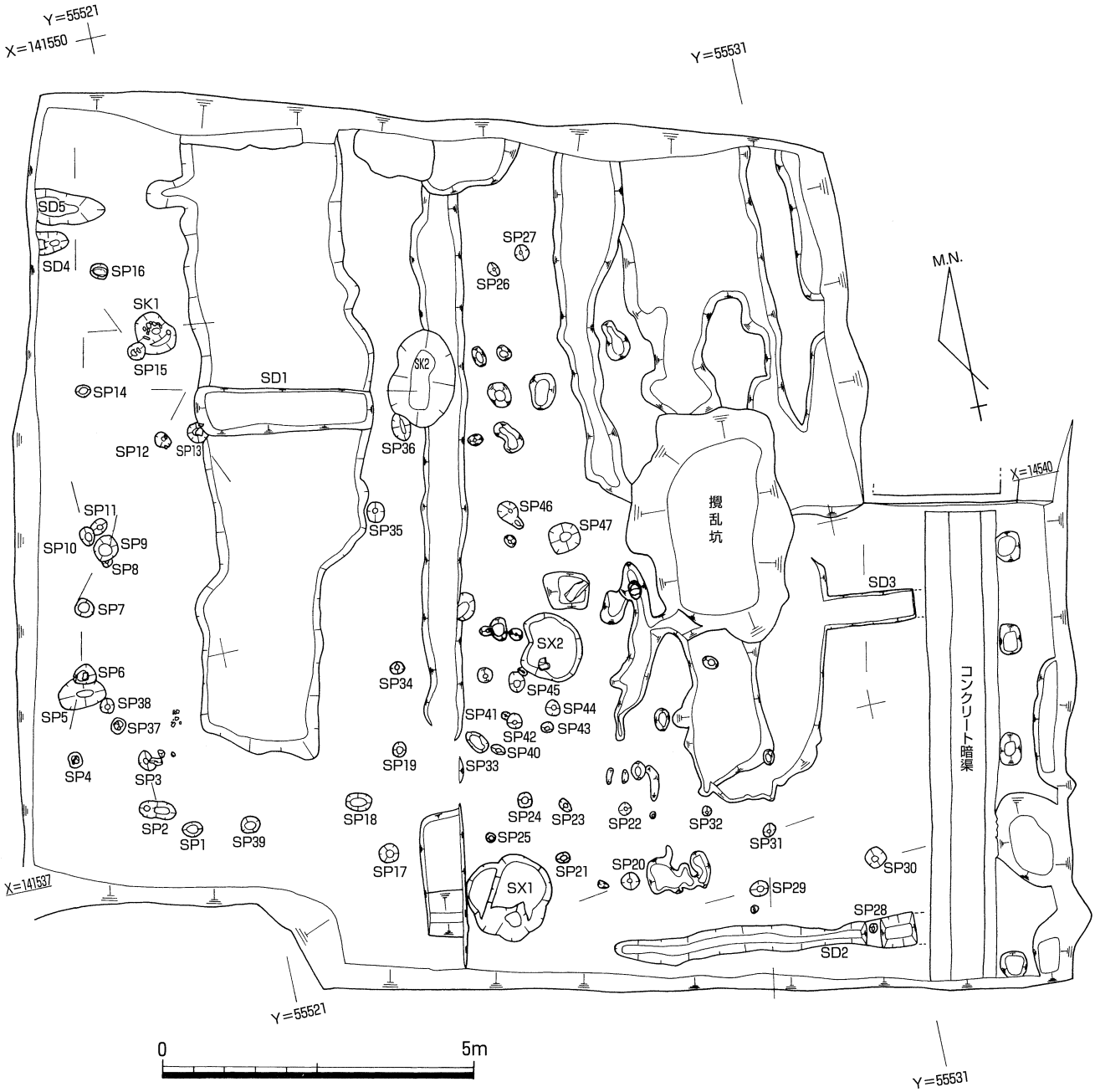
第10図　南壁面土層図（S=1/80）



第11図　西壁面土層図（S=1/80）



［第１遺構面］



第12図　第１遺構面遺構配置図（S=1/100）

柱穴群

第１遺構面で，柱穴を47基検出した。多くは単層で浅く，規模は20cm前後である。ここでは，その内，土質から対応関係にあると考えられる柱穴を中心に説明をしていく。

SP３・10（第13図）

調査区西部南寄りで検出した柱穴である。両柱穴とも褐灰色砂質シルトの埋土である。マンガンと３mm以下の石を含む。SP３は直径35cm，深さ５cm。SP10は直径25cm，深さ28cmを測る。柱穴間は3.3mと長い。このSP３・10に繋がる柱穴が東側から検出されないことから，掘立柱建物跡とした場合，調査範囲外の西側に続くものと考えられる。遺物は，SP10から土師器編が出土している。

SP６・８（第13図）

調査区西部南寄りで検出した柱穴である。両柱穴とも単層であり，褐灰色砂質シルトにマンガンと３㎜以下の石を含んでいる。SP６は直径25㎝，深さ10㎝であり，底には根石と考えられる10㎝程の石が据えられている。SP８は検出幅10㎝，深さ８㎝を測る。しかし北側にはSP９が存在し，柱穴の半分以上を掘り切られているため，本来は直径20㎝以上はあったものと考えられる。柱穴間の距離は1.51ｍを測る。SP６・８に繋がる柱穴が東側で検出されていないことから，掘立柱建物跡とした場合，調査範囲外の西側に続くものと考えられる。遺物はSP６から須恵器片が出土しているが時期の特定には至らない。しかし柱穴の切り合い関係からSP８がSP９よりも古いものであると考えられる。

SP７・14（第13図）

調査区西部中央で検出した柱穴である。SP７は灰黄褐色砂質シルトの埋土で，直径20㎝，深さ10㎝を測る。SP14はにぶい黄褐色砂質シルトの埋土で，規模は直径20㎝，深さ10㎝を測る。両柱穴とも単層であり，マンガンと５㎜以下の石を含む。柱穴間の距離は，3.3ｍと本遺跡の中では一番長い。このSP７・10に繋がる柱穴が東側で確認できなかったことから，掘立柱建物跡とした場合，調査範囲外の西側へ続くものと考えられる。時期についてはSP７から須恵器と土師器が出土しているが，小片のため時期は特定できない。

SP9・12（第13・14図）

調査区西部中央で検出した柱穴である。両柱穴とも単層で，にぶい褐色砂質シルトにマンガンと３㎜以下の石を含んでいる。SP９は直径40㎝，深さ33㎝を測り，SP８を掘り切っている。第１遺構面検出SPの中で一番深い。SP12は直径20㎝，深さ15㎝と浅く，詰め石と思われる10㎝程の石を柱穴の上部から検出している。柱穴間の距離は1.7ｍを測る。このSP９・12に繋がる柱穴が東側に確認できなかったことから，掘立柱建物跡とした場合，調査範囲外の西側へ続くものと考えられる。遺物はSP９から須恵器片が出土しており，第14図に掲載した，２は杯蓋の口縁部と考えられる。調整は，内外面にナデが見られる。小片のため時期の特定はできない。

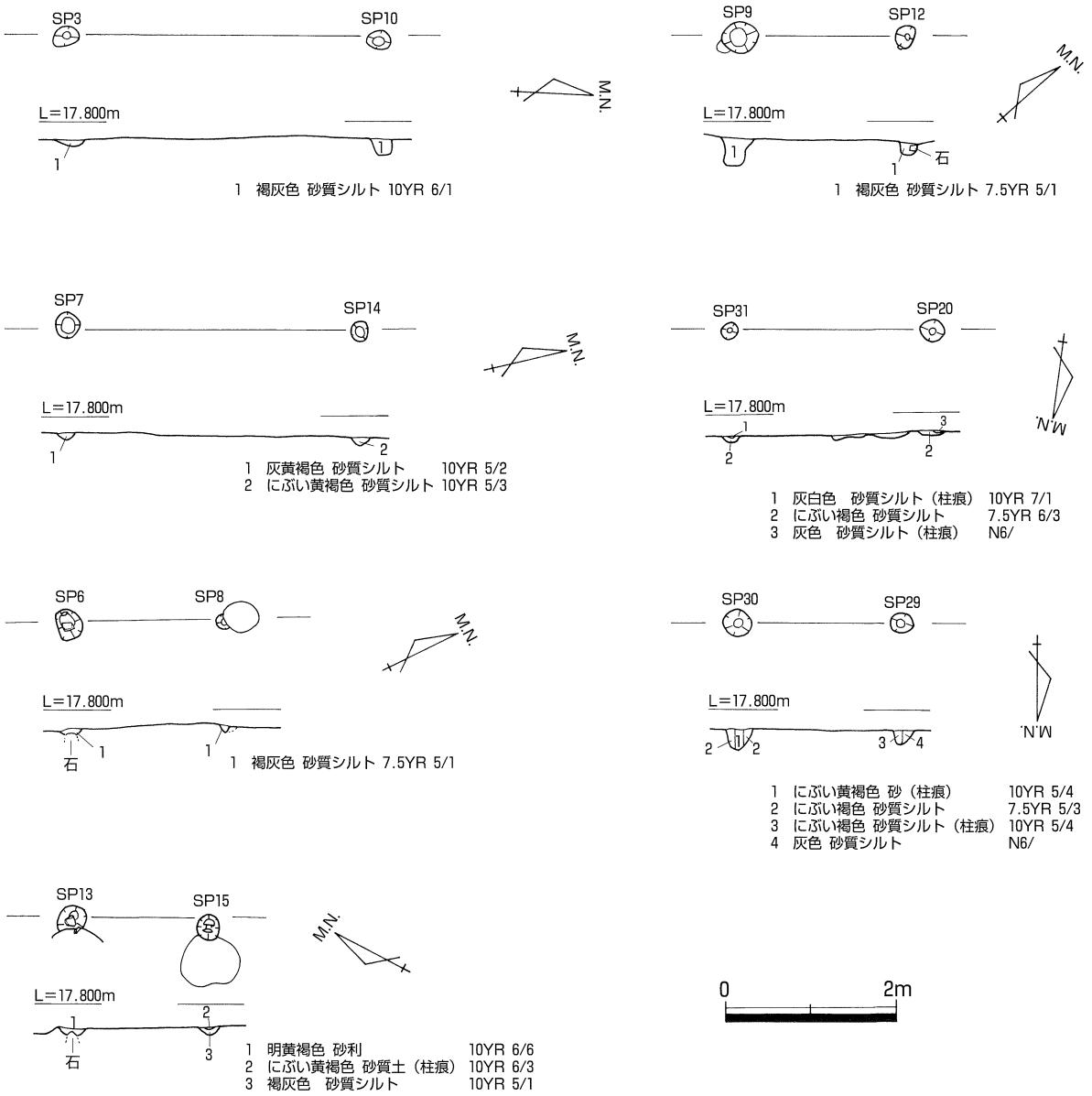
SP13・15（第13図）

調査区西部北側で検出した柱穴である。SP13は単層で，明黄褐色砂利の埋土であった。直径30㎝，深さ10㎝を測り，柱穴の底からは10㎝程度の根石を確認した。SP15は柱穴の中央に柱根が残っており，直径25㎝，柱根直径14㎝，深さ0.9㎝を測る。２層に分けられ，第１層（柱根）はにぶい黄褐色砂質土，第２層は褐灰色砂質シルトである。柱穴間の距離は1.4ｍを測る。このSP13・15に繋がる柱穴が東側のSD１により確認できないことから，掘立柱建物とした場合，東側へ続くものと考えられる。遺物はSP15から須恵器片が出土しているが，時期の特定できない。

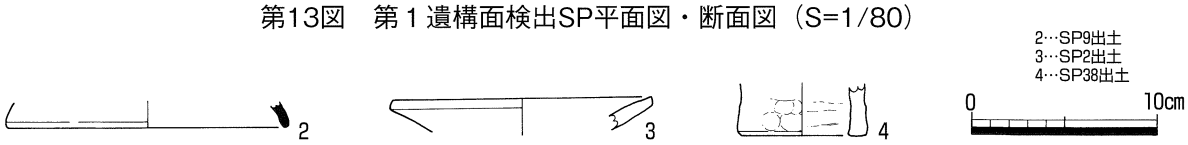
SP20・31（第13図）

調査区南部で検出した柱穴である。両柱穴とも柱根が残っており，SP20は直径30㎝，柱根直径15㎝，深さ５㎝を測る。第１層（柱根）が灰色砂質シルト，第２層はにぶい褐色砂質シルトである。SP31は直径20㎝，柱穴直径10㎝，深さ５㎝を測る。第１層（柱根）が灰白色砂質シルト，第２層はにぶい褐色砂質シルトである。柱穴間の距離は2.1ｍを測り，北側には対応する柱穴が確認できない

ことから調査範囲外の南側へ続くものと考えられる。遺物は出土しておらず，時期は不明である。



第13図　第１遺構面検出SP平面図・断面図（S=1/80）



第14図　第１遺構面検出SP出土遺物（S=1/4）

SP29・30（第13図）

調査区南部で検出した柱穴である。両柱穴とも柱根が残っており，SP29は直径25cm，柱根直径10cm，深さ15cmを測る。SP30は直径30cm，柱根直径10cm，深さ24cmを測る。SP29の第１層（柱根）はにぶい黄褐色砂質シルト，第２層は灰色シルトの埋土であり，SP30の第１層（柱根）はにぶい黄褐色砂，第２層はにぶい褐色砂質シルトである。柱穴間の距離は1.65mを測り，北側には対応する柱穴が検出されないことから調査範囲外の南側へ続くものと考えられる。遺物は出土しておらず，時期は不明である。

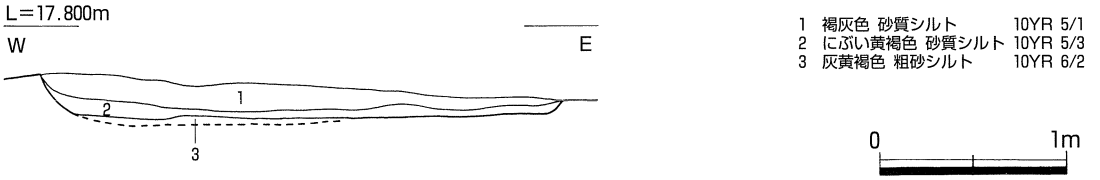
第１遺構面検出柱穴出土遺物（第14図）

その他の柱穴からも遺物が出土している。３は土師器の甕口縁部で，SP２から出土している。４は土師器の蛸壺の底部であり，外面は指頭圧痕が良く残り，内面はナデが見られる。SP38から出土している。

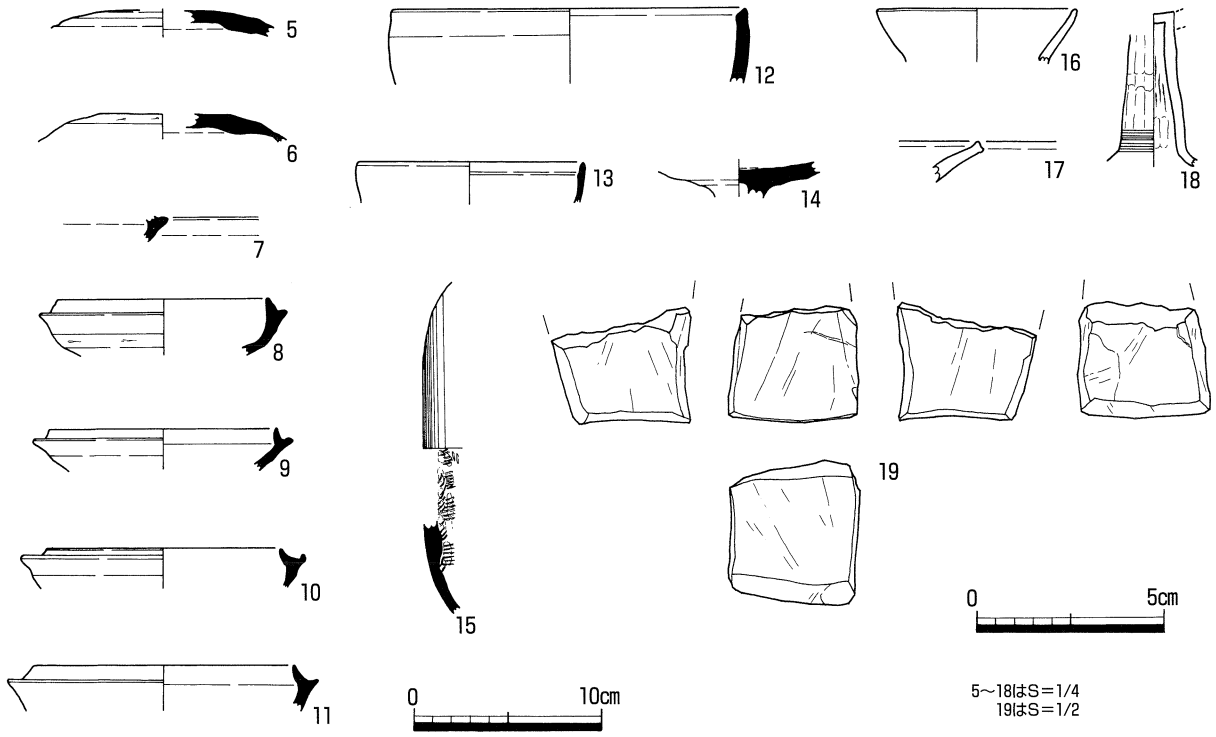
SD１（第15・16図）

調査区北西部で検出した南北溝である。南側では溝の端が確認で，北側は調査区外に続いているものと考えられる。検出した長さは9.8m，幅2.8m，深さ0.22mを測り，断面形状は逆台形である。埋土は２層に分けられ，第１層は褐灰色砂質シルトで土は固くマンガンを多く含んでいる。第２層はにぶい黄褐色砂質シルトで，土は柔らかく，微量にマンガンを含んでいる。第１層は厚く，下の第２層は薄い。また西側は堆積層が厚く，東に向かうに連れ薄く堆積している。また、第２層の下には灰黄褐色砂質シルトの遺物を含む堆積層が見られる。

５～15は須恵器である。５・６は杯蓋の天井部である。どちらも外面は回転篦削り，内部は回転ナデである。５は回転ナデの前に整形時の指頭圧痕がわずかに残っている。７～11・13は杯身である。



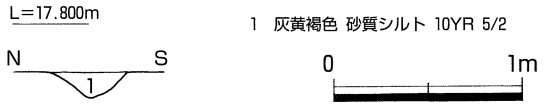
第15図　SD１土層断面図（S=1/40）



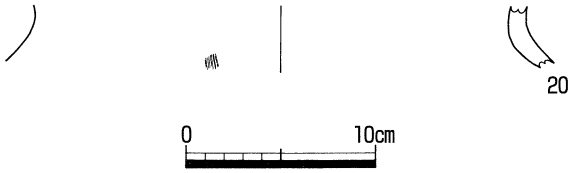
第16図　SD１出土遺物（S=1/4・1/2）

7は立ち上がりを欠損しており受け部のみが残る。8は口縁部から体部付近まで残っており，外面には口縁部から受け部までは回転ナデ，体部には回転篦削りが見られる。9～11は口縁部から体部近くまで残存する。10は焼成があまく軟質で，白色である。どれも内外面に回転ナデが施されている。またいずれも立ち上がりは内傾し短く，退化した様相を示す。13は立ち上がりと受け部をもたない杯である。内外面は回転ナデが施されている。12は鉢の口縁部である。外面は摩滅が激しく分かりにくいが，ナデであると考えられる。内面は回転ナデである。14は高杯の杯と脚部の接合部である。調整は内外面に回転ナデが見られる。15は横瓶の体部と考えられる。外面は浅いカキ目が施され，内面は叩きを加えた後，指頭圧痕により整え，更にその後ナデ調整が施されている。16・17・18は土師器である。16は甕の口縁部である。摩滅が著しいが，内外面にナデと内面口縁部にわずかに形成時の指頭圧痕が観察できる。17も甕の口縁部である。内外面ともに調整は摩滅のため不明である。18は高杯の脚部である。摩滅が著しいが，外面は縦方向の指ナデと下部に横方向の刷毛目状の痕跡が観察できる。内面は，指ナデと杯部との接合近くにはシボリ目が観察できる。19は砥石である。面の中央は緩く凹んでおり，使用痕が認められる。

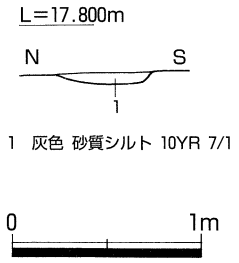
遺構からは8世紀代の遺物が出土しているが，遺構面は中世の遺物を多量に含んだ層であることから，下層の遺物を巻き込んだものと考えられ，SD1の時期は特定できない。



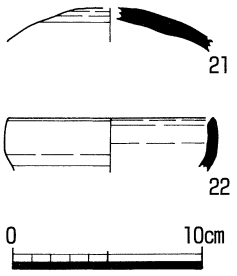
第17図　SD2土層断面図（S=1/40）



第18図　SD2出土遺物（S=1/4）



第19図　SD3土層断面図（S=1/40）



第20図　SD3出土遺物（S=1/4）

SD2（第17・18図）

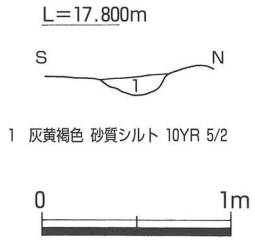
調査区南東部で検出した東西溝である。東西に伸びており，東側はコンクリート暗渠と攪乱により破壊されていたが，西側では溝の端を確認できた。検出した長さは5m，幅0.4mと細長く，深さは0.12mを測り、断面形状はV字形である。埋土は単層で灰黄褐色砂質シルトにマンガンを多量に含んだ柔らかい土である。

遺物は土師器が出土している。小片が多く，図化できたものは1点のみである。20は甕の頸部であり，外面には縦方向の刷毛目とナデが確認できる。内面はナデが観察できる。時期の特定はできない。

SD3（第19・20図）

調査区東部中央で検出した東西溝である。東はコンクリート暗渠により破壊され，西は攪乱土坑により破壊されている。検出した長さは1.4m，幅0.5m，深さ0.05mを測り，断面形状は薄い逆台形を示す。埋土は単層で灰色砂質シルトにマンガンを微量に含む柔らかい土である。

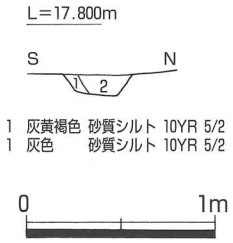
遺物は須恵器・土師器片が出土しており，その内図化できたものは２点である。21は須恵器の杯蓋である。外面は天井部に回転篦削り，下部には回転ナデ，内面は形成時の指頭圧痕がみられ，その後回転ナデが施される。22は須恵器の高杯口縁部と考えられる。調整は外面上部に回転ナデと下部に回転篦削り，内面は回転ナデが見られる。７世紀代の遺物が出土しているが，遺構面は中世の遺物を多量に含んだ層であることから，下層の遺物を巻き込んだものと考えられ，SD３の時期は特定できない。



第21図　SD４土層断面図
(S=1/40)

SD４（第21図）

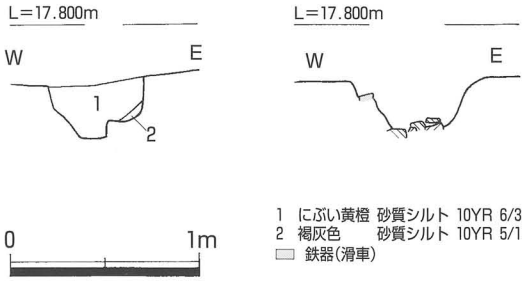
調査区北西部で検出した東西方向の溝であると考えられるが，一部確認したのみで詳細は不明である。北側にはSD５が隣接している。やや東西に長く，溝の東端を確認し，西端は調査区外へ続くものと考えられる。検出した長さは0.5m，幅0.35m，深さ0.1mを測り，断面形状は逆台形である。埋土は単層で，明緑灰色粗砂に粗く締まりのない土を確認した。遺物は出土しておらず，時期は不明である。



第22図　SD５土層断面図
(S=1/40)

SD５（第22図）

調査区北西部で検出した東西方向の溝であるが，SD４と同じく一部を確認したのみで詳細は不明である。南にはSD４が隣接している。調査区外のため確認できていないが，西に続くものと考えられる。検出した長さは1.1m，幅0.35m，深さ0.11mを測り，断面形状は逆台形である。埋土は２層に分かれ，第１層は褐灰色砂質シルトにマンガンを多量に含み，第２層は灰色砂質シルトである。遺物は出土しておらず，時期は不明である。

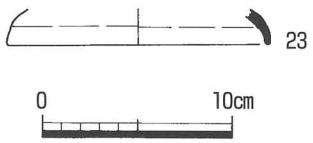


第23図　SK１土層断面図(右) 埋土除去後断面図(左)
(S=1/40)

SK１（第23・24図）

調査区北西部で検出した土坑でありSD１の西側に隣接している。平面形態はほぼ円形で，直径約0.7m，深さ0.28mを測る。須恵器，土師器片が出土している。埋土は２層分かれ，第１層はにぶい黄橙色砂質シルト，第２層は褐灰色砂質シルトである。第２層は薄く，大半は第１層が占めている。底部には拳程度の石が数個見られる。遺構面上部付近には近現代のものと思われる鉄製品(滑車)が出土している。

遺構からは須恵器，土師器片が出土している。その内比較的残りの良い須恵器１点を図化した。23は杯蓋の口縁部である。調整は内外面に回転ナデが観察できる。時期は，７世紀代の遺物が出土しているが，後世に掘り起こされ遺物が混在していることから，現代に近い遺構と考えられる。



第24図　SK1出土遺物（S=1/4）

SK２（第12図）

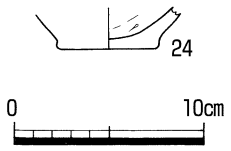
調査区北部中央で検出した土坑である。楕円形で東西1.0m，南北1.55m，深さ0.20mを測る。土坑内には拳程度の石が敷き詰められていた。遺物は出土していないため時期は不明である。

SX１（第12図）

調査区南部中央で検出した不明遺構である。平面形態は不整円形で東西1.4m，南北1.4m，深さ0.15mを測る。埋土は砂質シルトの単層である。遺物は出土していないため時期は不明である。

SX２（第12図）

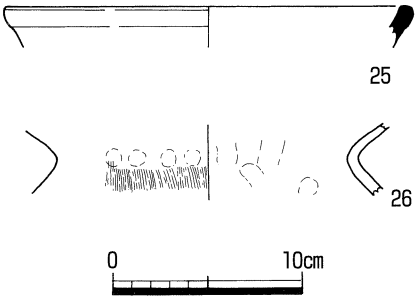
調査区中央部で検出した不明遺構である。不整円形を呈し，東西1.0m，南北1.1m，深さ0.12mを測る。遺構内の南側で人頭大の風化した凝灰岩を検出したのみで他の遺物は確認していないため，時期も不明である。



第25図　最下層出土遺物（S=1/4）

攪乱坑（第12・25図）

調査区東部中央で検出した攪乱坑である。東西2.7m，南北3.5m，深さ0.59mと広く深く掘り下げられている。土坑内からは焼け焦げた近現代の遺物が出土している以外に，最下層から弥生土器片１点が出土した。24は甕の底部で，調整は外面はナデ，内面は篦削りが見られる。遺物から近現代のゴミ焼却場と考えられる。



第26図　攪乱層出土遺物（S=1/4）

攪乱層出土遺物（第12・26図）

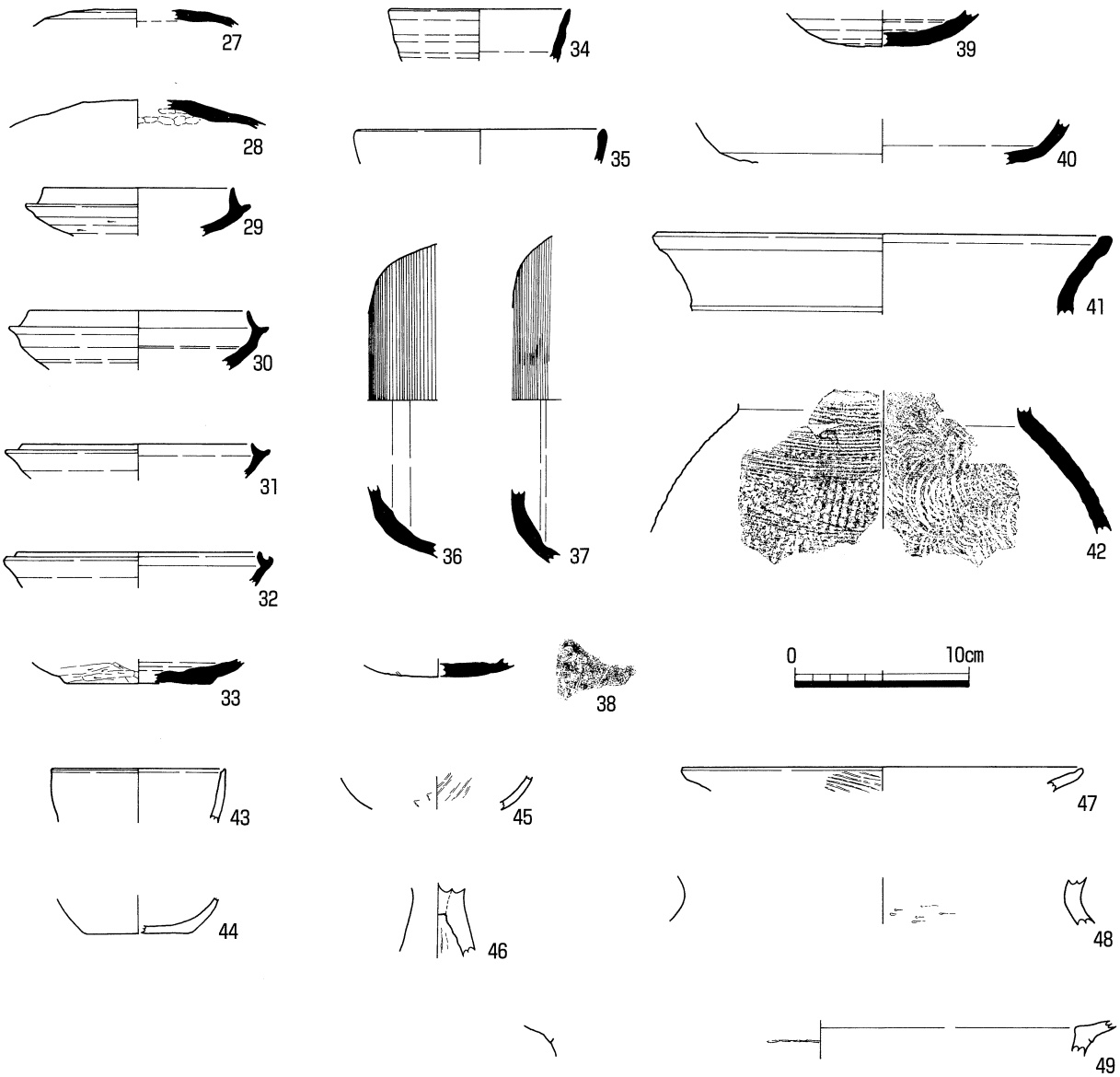
調査区東側壁面近くの攪乱層からいくつか土器が出土している。その内，図化できたものは２点である。25は須恵器の甕口縁部である。調整は内外面ともに回転ナデである。26は土師器の甕頸部である。外面は指頭圧痕による整形の後，体部は刷毛目が施され，口縁部はナデ調整をされている。内面は指ナデとシボリ目が見られ，下部には横方向に篦削りが観察できる。

第１遺構面直上出土遺物（第27図）

第１遺構面直上で出土した遺物である。27～42は須恵器である。27・28は杯蓋の天井部である。外面は回転篦削りと回転ナデ，内面は回転ナデである。28の外面は回転篦削り，内面は指頭圧痕のち回転ナデが施される。29～32は杯身の口縁部である。29・30は立ち上がりが高く，内傾する。31・32は立ち上がりは低くなり，更に内傾化が著しく，退化した様相を示す。33は杯身の底部である。外面は篦削り，内面は回転ナデである。底部は整形があまく，一部篦削りで取りきれなかったものが残り，底部は段を付けたような形をとる。34は杯の口縁部で，内外面は回転ナデが施される。35は杯の口縁部と考えられ，内外面は回転ナデ調整である。36・37は横瓶の体部である。どちらも外面にカキ目，内面には回転ナデが施される。38は壺の底部と考えられる。外面はナデ，内面は指頭圧痕の後，回転ナデが見られる。また外面底部には篦記号が見られる。39は底部片である。外面調整は回転篦削りで丁寧に整形されており。内面は指頭圧痕のち回転ナデである。壺よりも断面は薄く，底径は大きくな

らないことや，底部から体部にかけて丸みをもってあがることから，ハソウの可能性がある。40は高杯の杯部である。外面は摩滅により調整は不明だが，内面は回転ナデである。41・42は甕である。41は口縁部で内外面に回転ナデが見られる。42は頸部から体部であり，外面体部には格子状の叩きが施され，その上に横方向の刷毛目が加わる。頸部はナデ調整である。内面は体部に同心円文の当て具痕が残り，頸部にはナデが見られる。

43～49は土師器である。43は杯の口縁部である。外面はナデ，内面は指頭圧痕である。44は杯身の底部である。外面は底部に篦切り，内面は摩滅により調整は不明である。45は皿である。摩滅が著しく，外面は下部にナデもしくは篦削りの痕跡がある。内面は斜め方向に暗文が施される。46は高杯の脚部である。調整は外面に指頭圧痕のちナデ，内面はナデとシボリ目が見られる。47は甕の口縁部である。外面はナデのち斜め方向の刷毛，内面はナデである。48は甕の頸部で，内外面ともにナデである。49は鍋の頸部と考えられる。外面はナデで頸部には接合痕が見られる。内面はナデである。



第27図　第１遺構面直上出土遺物（S=1/4）

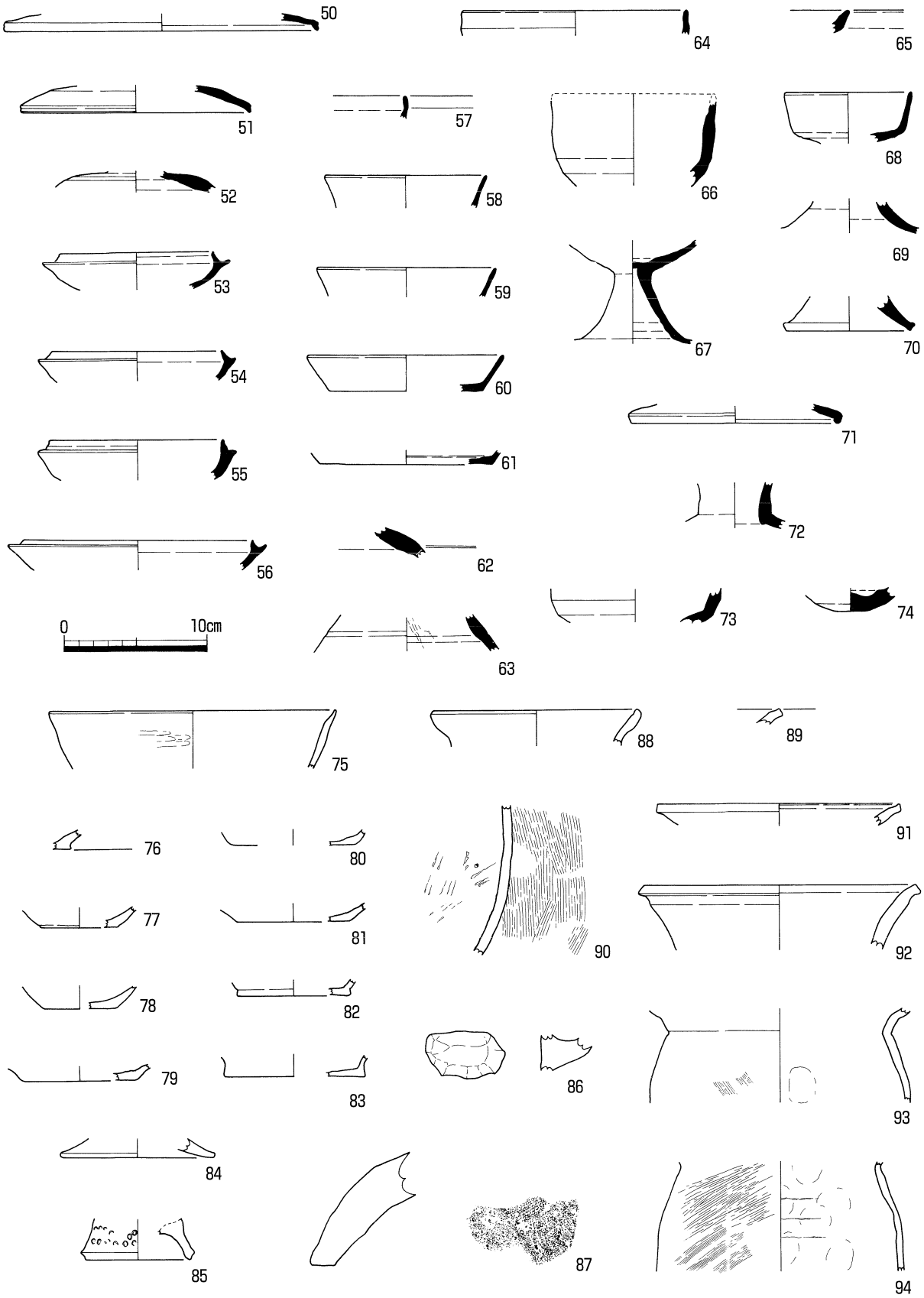
第１遺構面形成層上部出土遺物（第28図）

第１遺構面形成層上部から出土した遺物である。50～74は須恵器である。50・51・52は杯蓋である。その内50と51は器高が低く口縁部端部が垂直に曲がることから，蓋の中央につまみが付くタイプと考えられる。どちらも内外面に回転ナデが見られる。52は外面がやや摩滅しているが，内面ともに回転ナデが確認できる。53～61は杯身である。その内53～56は立ち上がりと受け部をもつもので，立ち上がりが短く内傾しており退化した様相を見せる。口径はおおよそ12cm前後であるが，53のように10.8cmと小さいものや，56のように16cmと大きいものも見られる。57～61は口縁部がまっすぐ伸びるものである。57は口縁部から下ったところに稜が付けられている。58～61は底部から口縁部にかけて斜め上方へまっすぐ伸びるタイプで，調整は内外面に回転ナデが確認できる。62はハソウの体部で，破片の下部に円孔が確認できる。内外面は回転ナデである。また外面円孔の上部には一条の凹線が見られる。63もハソウの体部片と考えられる。外面はナデ，内面はナデとシボリ目が確認できる。64は鉢の口縁部で，内外面に回転ナデが確認できる。65は口縁部片で，皿もしくは盤と考えられる。調整は内外面に回転ナデが見られる。66は高台付碗であると考えられる。外面は回転ナデと下部に回転篦削りが見られる。内面は回転ナデである。67は高杯である。外面は杯部から脚部にかけて回転ナデが施され，内面は脚部の中央まで回転ナデがおよび，その上にはシボリ目が確認できる。68は高杯の口縁部と考えられる。外面は，口縁部から体部は回転ナデ，脚部と接合する底部にはナデが確認できる。内面は，底部中央近くに指頭圧痕と全体に回転ナデが見られる。69～71は高杯の脚部である。69については端部を欠損。70・71は端部が確認できる。いずれも内外面に回転ナデ調整が見られる。72は平瓶の頸部である。内外面はナデ調整で内面には釉の付着が見られる。また，頸部と体部の接合部が残っており，頸部の粘土を体部になで付けて接合している。釉が付着している。73・74は壺の底部である。73は内外面に回転ナデ，74は外面にナデと回転篦削り，内面は成形時の指頭圧痕とナデが確認できる。

75～84・86・88～94は土師器である。75は杯で，摩滅が激しいものの外面にはナデのち篦磨き、内面にはナデが見られる。76～83は杯の底部である。78は底部片であり摩滅が激しい。その他は内外面にナデ調整が観察できる。時期も比較的新しいものと考えられる。84は高杯の脚部で，外面はナデ，内面は摩滅により調整不明である。85は弥生土器の脚部であるが，器種は特定できない。調整は外面にナデのち竹管文を二段に施すが，文様は規則正しく並ばない。内面はナデである。86は把手付鍋の耳で，成形時の指頭圧痕が良く残っている。87は丸瓦であり，凸面は摩滅が激しい。凹面には面取りが施され，中央には布目が観察できる。88～94は甕である。88・89・91・92は口縁部で，91は内外面摩滅により調整不明である。他はいずれもナデ調整が見られる。90は体部であり，外面には縦刷毛，内面には篦削りが施されている。93は頸部から体部にかけて残存しており，外面は体部に斜め方向の刷毛目と頸部にはナデが見られる。内面は指頭圧痕である。94は93と同じく頸部から体部にかけて残存している。外面は斜め方向の刷毛目と頸部にナデ，内面は成形時の指頭圧痕後に篦削りが施されている。頸部はナデのちに指頭圧痕が施されている。

第１遺構面上層出土遺物（第29図）

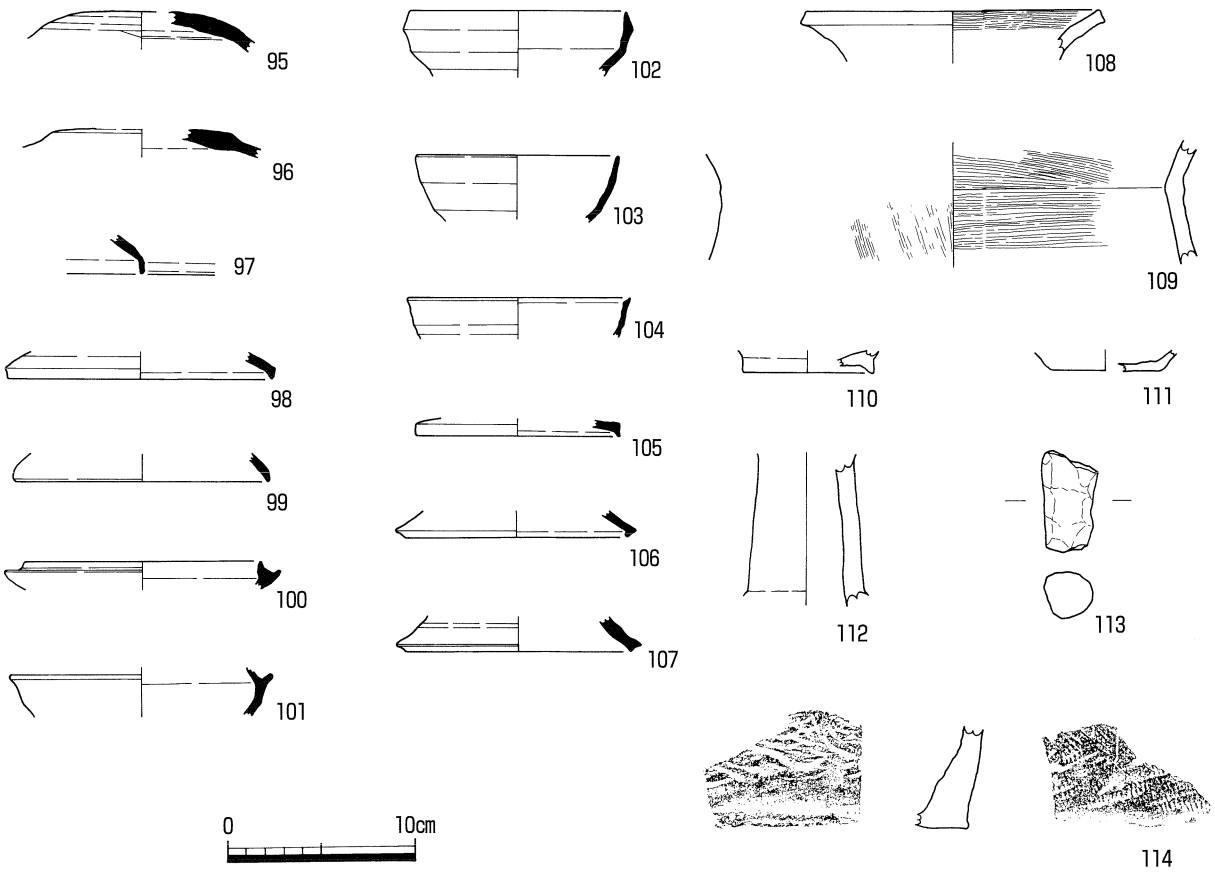
重機による掘削および第１遺構面検出までの掘削中に出土した遺物である。95～107は須恵器である。95～99は杯蓋である。95・96は，外面の天井部に回転篦削りと下部に回転ナデが，内面には回転ナデが見られる。97～99は口縁部である。97は口縁部から少し上がった部分で屈曲して上方に向



第28図　第１遺構面形成層上部出土遺物（S=1/4）

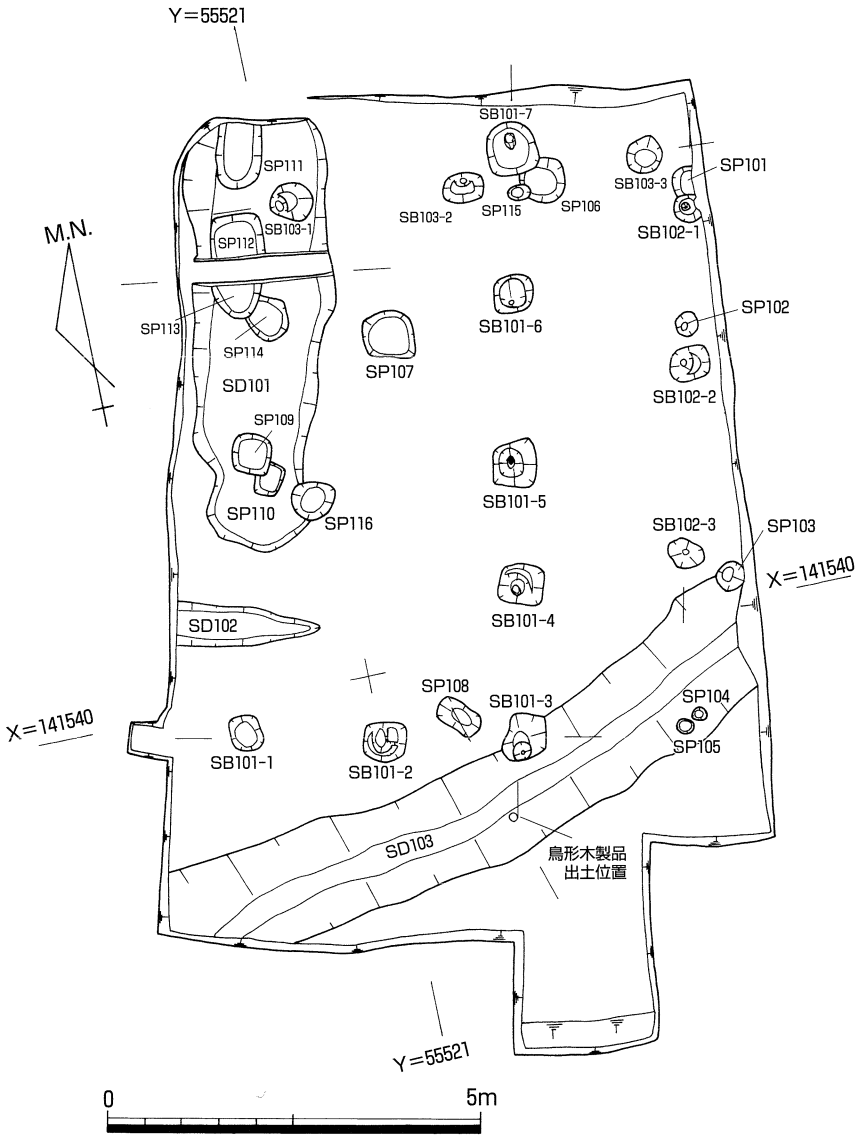
かっている。98は口縁端部が垂直に折れるもので，器高は高くならないタイプの蓋である。99は，途中で角度に変化をもたず天井部に続くものと考えられる。いずれも内外面に回転ナデが見られる。100～102は杯身の口縁部である。100・101は立ち上がりと受け部を持つもので，どちらも立ち上がりは低く，器高も高くならないとものと考えられる。調整は内外面とも回転ナデである。102は立ち上がりと受け部を持たないもので，椀形を呈する。調整は内外面に回転ナデが見られる。外面は大きく稜が張り出している。103は高台付椀の口縁部と考えられる。断面は薄く，外面は回転ナデと底部近くには回転篦削りが見られる。104は高杯の口縁部と考えられる。内外面に回転ナデが見られる。105～107は高杯の脚部である。105は脚端部が垂直に折れる。106は脚端部が内部に向かって鋭角に折れる。107は脚端部が水平に引っ張られた形をとる。いずれも内外面に回転ナデが見られる。

108～113は土師器である。108は甕の口縁部である。外面調整はナデ，内面は横方向の刷毛目が見られる。109は甕の頸部である。外面は縦刷毛が入り，その後頸部にナデが施される。内面は体部から頸部まで横刷毛が見られる。110は高台付椀である。高さ0.5cmほどの高台が付く。内外面にナデ調整が見られる。111は杯の底部で，調整は内外面にナデが見られる。112は高杯の脚部である。下部には脚端部へ続く折れが確認できる。内外面はナデ調整である。113は足付釜の脚部で，指頭圧痕が良く残る。114は備前焼の甕底部である。底部側壁は厚く，底部は薄いつくりである。外面は側壁に叩き痕が見られ，底部は調整が見られない。内部は同心円文の当て具痕と底部にナデが観察できる。



第29図　第１遺構面上層出土遺物（S=1/4）

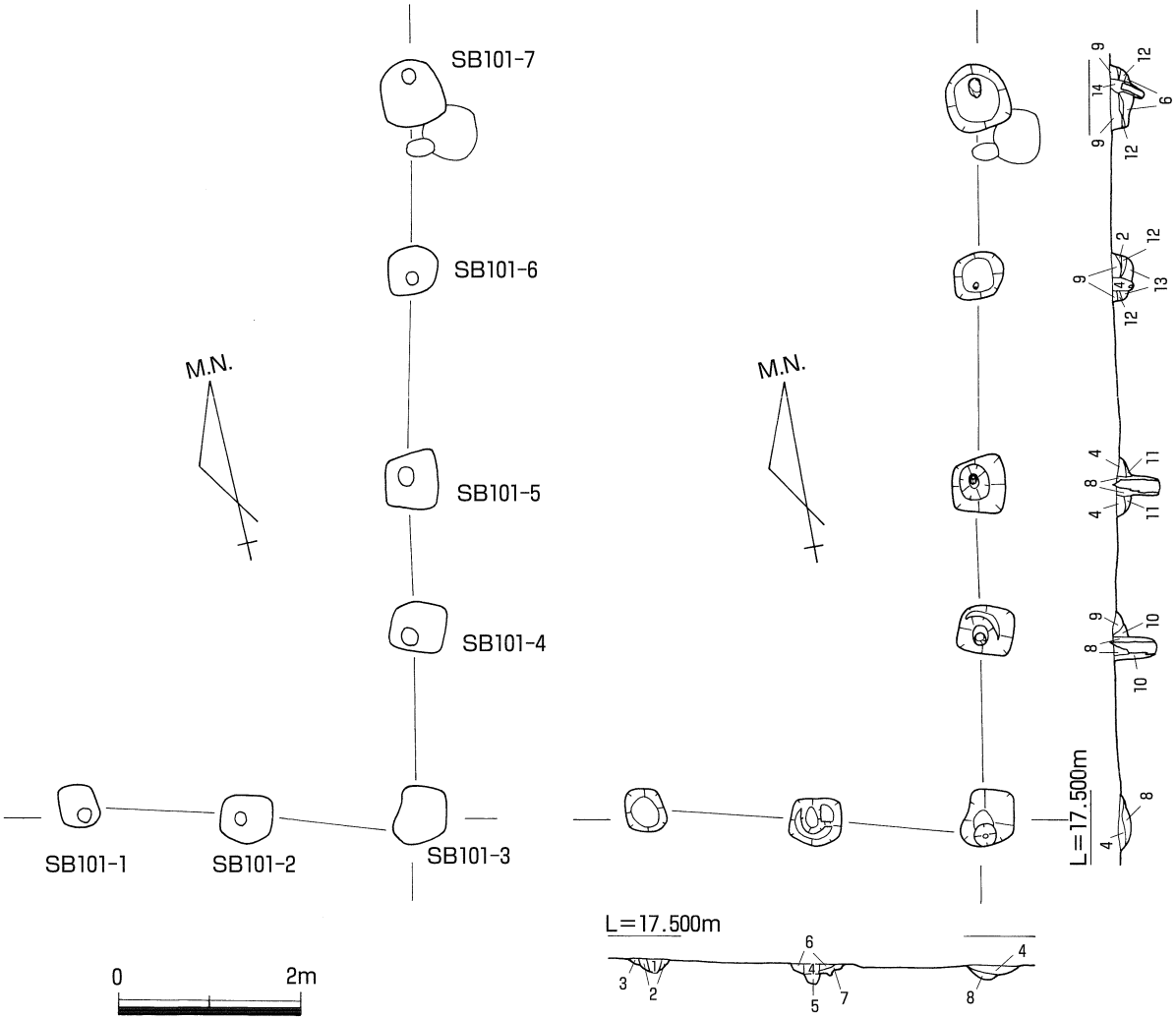
［第２遺構面］



第30図　第２遺構面遺構配置図（S=1/100）

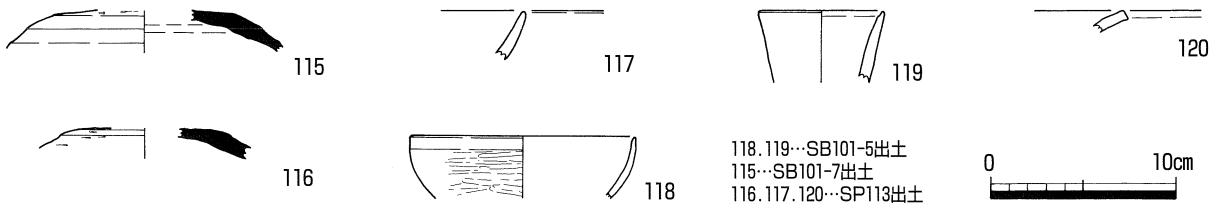
SB101（第31・32・35・36図）

調査区中央部で検出した掘立柱建物跡である。建物の規模は，南北は４間（８ｍ）以上，東西は３間（3.7ｍ）以上で，北西方向へ広がると想定され，床面積29.6㎡以上を測る大型掘立柱建物跡である。建物主軸方位はN－12°－Eで条里地割と合致する。柱穴の平面形はやや歪みはあるが隅丸方形を呈し，一辺60cm程度の規模で、柱穴内には約15～20cmの柱根が見られる。中には柱材が残っている柱穴があり，柱材からは底部の加工痕跡が観察できた（第35・36図参照）。121はSB101－4から検出されたもので，残存長51.6cm，幅16.1cm，厚さ12.4cmを測る。柱材の底部には２～３cm幅の加工痕がみられ，中央の切り残しを除けば，平らに整えられている。樹種はカヤである。122はSB101－5から検出されたもので，残存長48.8cm，幅13.0cm，厚さ11.3cmを測る。柱材の底部には３～４cm幅の加工痕がみられ，２方向から斜めに削って中央を尖らせている。樹種はイヌマキで，比較的丈夫で建築材に適した樹種である。SB101－7には123が残っており，残存長38.9cm，幅17.2cm，厚さ13.5cmを測る。底部



1	暗灰黄褐色 砂質シルト(柱痕)	2.5YR 5/2	8	灰色 砂質シルト(柱痕)	N5/
2	褐灰色 砂質シルト	10YR 5/1	9	灰黄褐色 砂質シルト	10YR 4/2
3	灰褐色 砂質シルト	7.5YR 6/2	10	灰色 粘性シルト	N6/
4	灰黄褐色 砂質シルト(柱痕)	10YR 5/2	11	褐灰色 シルト	10YR 4/1
5	褐灰色 粘性シルト(柱痕)	10YR 4/1	12	にぶい黄橙色 砂質シルト	10YR 6/4
6	褐灰色 砂質シルト	10YR 4/1	13	灰色 砂質シルト	10YR 4/1
7	黄灰色 砂質シルト	2.5YR 5/1	14	黄灰色 シルト(柱痕)	2.5YR 6/1

第31図　SB101検出状況（左）と完掘状況（右）平面図・断面図（S=1/80）



第32図　第２遺構面検出SB・SP出土遺物（S=1/4）

は平らに加工されているがSB101－4ほど整っていない。縁には面取りのような加工が施されている。樹種はイヌマキである。各柱間の距離を測ると，SB101－1からSB101－3までがそれぞれ1.6m，1.8mを測る。SB101－3からSB101－7まではそれぞれ1.8m，1.5m，2.05m，2.05mを測る。およそ1.5mから2.0mの間隔で建てられており，柱間は統一されていない。

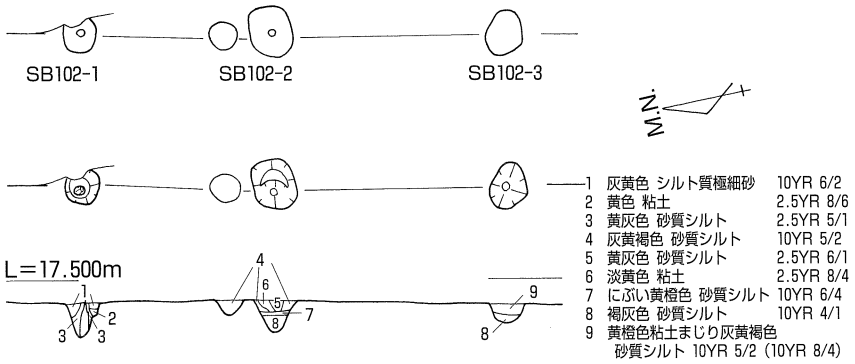
時期については，年輪年代測定による柱材からの時期判定を期待したが，測定可能な範囲に達した残存状況ではなかったため測定は不可能であった。遺構からは，SB101－3がSD103を掘り切っていることからSD103よりも新しいことが分かる。遺物は，SB101－3～SB101－7から須恵器・土師器片が出土している。その内，図化可能なものを第32図に掲載した。

115はSB101－7から出土したもので，須恵器の杯蓋天井部である。外面は上部に回転篦削り，下部に回転ナデ，内面は回転ナデが施されている。118は土師器の杯口縁部である。口径は約12cmで，外面はナデのち篦磨き調整，内面は摩滅しており調整は不明である。119は土師器の壺口縁部である。口径が6.6cmと小さく縦に伸びることから，直口壺と考えられる。内外面ともにナデ調整が見られる。118・119ともSB101－5から出土している。遺物は大阪陶邑編年のTK217型式相当（田辺1981）の遺物が含まれておりSB101は７世紀前半以降の遺構と考えられる。

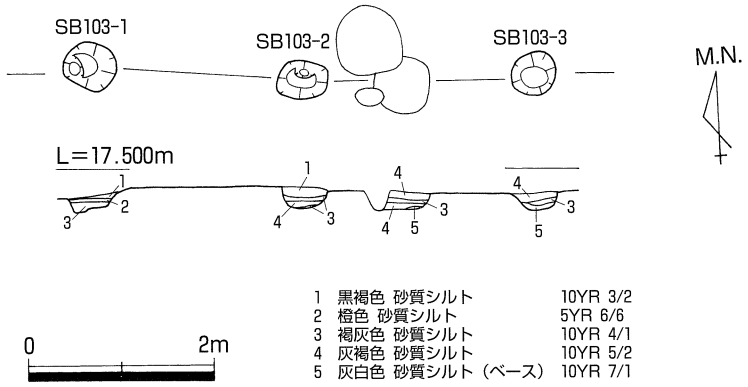
SB102（第33・36図）

調査区東部で検出した掘立柱建物跡である。検出した柱穴数は３基であるが，西側に本遺構に対応する柱穴が確認できないことから，東側に広がるものと考えられる。主軸方位はN－12°－Eであり，SB１と同方位で並列する。柱穴はおおよそ30～40cmの不整円形を示し，柱穴の中央には直径10cmほどの柱根が確認できた。またSB102－1からは残存長28.8cm，幅8.7cm，厚さ6.7cmの柱材124を検出した（第36図参照）。底部は腐食が進行しており，加工痕は確認できない。樹種鑑定の結果，カヤであることが判明し，SB101と同じ建築木材に適した樹種を使用している。柱間はSB102－1とSB102－2間が２m，SB102－2とSB102－3間が2.4mである。

時期は柱材からの時期判定が期待されたが，SB１の柱材同様に測定可能なものではなかった。また，遺物はSB102－1から土師器片が出土しているが，磨耗が激しく時期判定は不可能であった。



第33図　SB102上面検出状況（上）と完掘状況（下）平面図・断面図（S=1/80）



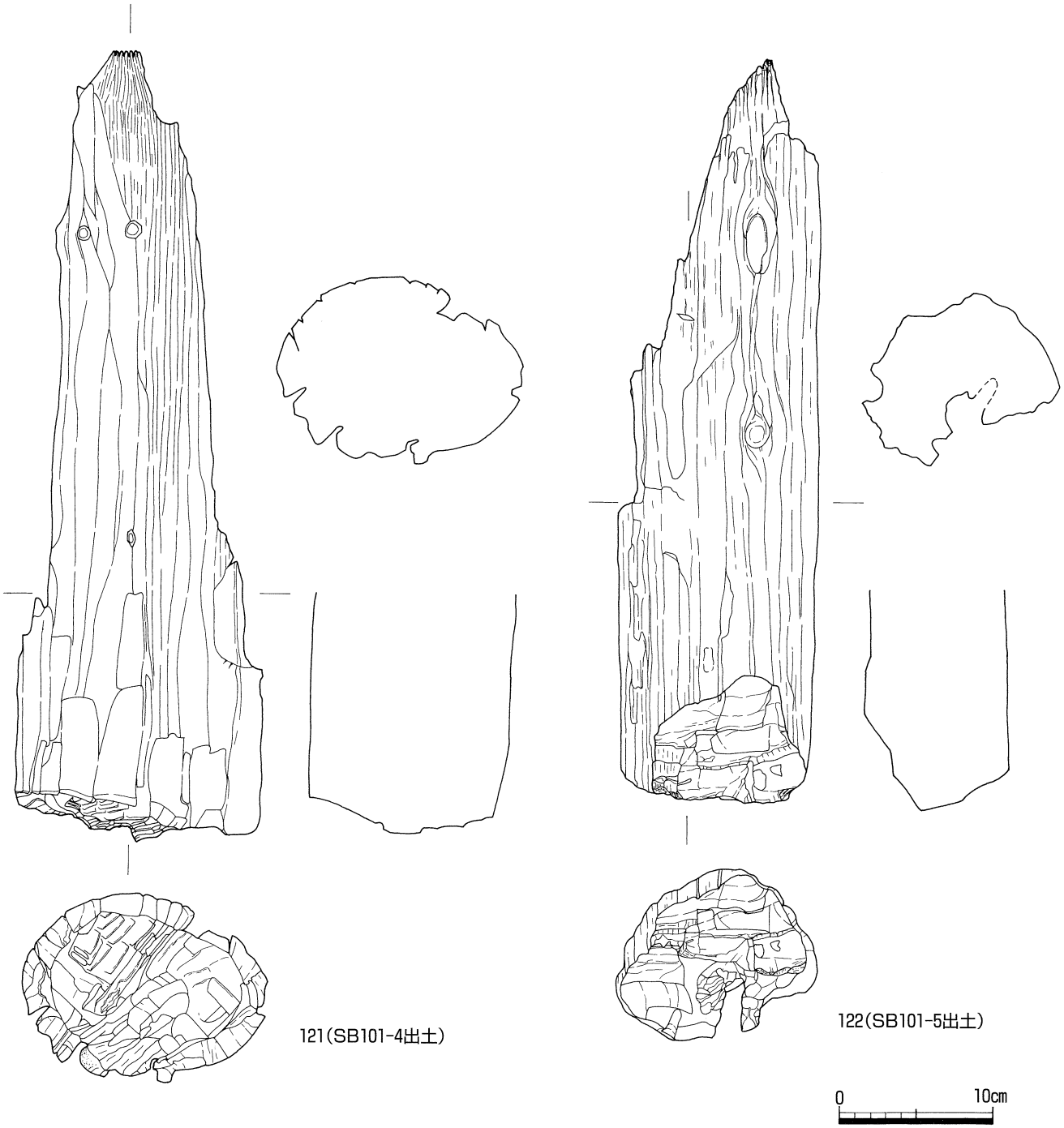
第34図　SB103完掘状況　平面図・断面図（S=1/80）

SB103（第34図）

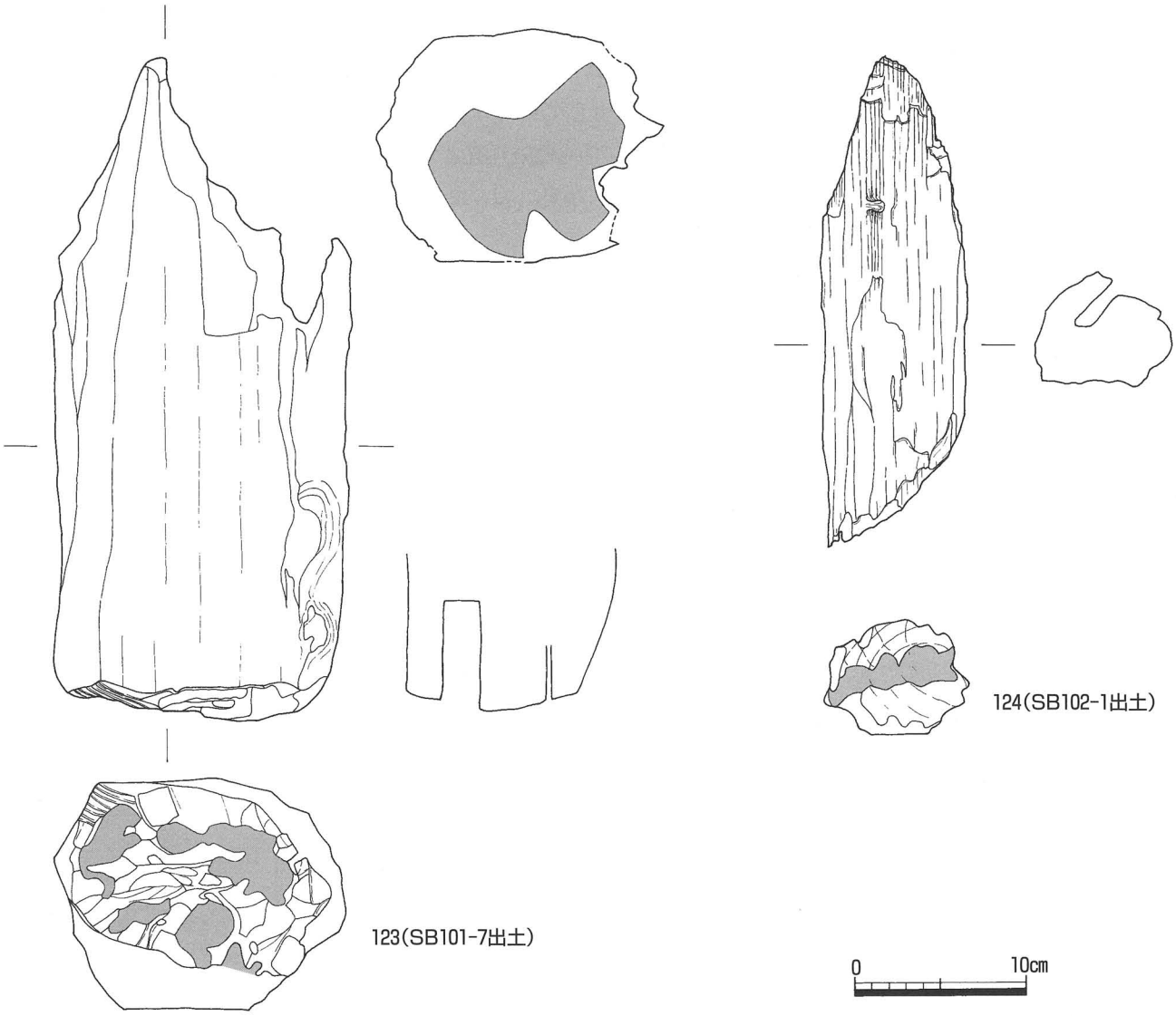
調査区北部中央で検出した掘立柱建物跡である。検出した柱穴数は３基である。南側に本遺構と対応する柱穴が確認できないことか

ら，調査範囲外の北側に続くものと考えられる。柱穴は直径約40～50cmの楕円形で，深さは約20cmである。柱根は確認していないが，SB103－2から木片が出土している。柱穴間はSB103－1とSB103－2間が2.3m，SB103－2とSB103－3間が2.4mを測る。

時期についてはSB103－1からは土師器片が出土しているが，いずれも細片もしくは磨耗が激しく時期の判定は難しい。遺構の切り合い関係からSB103はSD101よりも先行することから，７世紀代と考えられる。



第35図　SB101－４，SB101－５出土柱材（S=1/4）



第36図　SB101－7，SB102－1出土柱材（S=1/4）

SP113出土遺物（第32図）

SP113は調査区北西部に位置し，SD101内で検出した柱穴である。SP113 と組み合い建物を構成する柱穴は確認できなかった。116は須恵器の杯蓋天井部である。外面は回転ナデと回転篦削り，内面は回転ナデが観察できる。117は土師器の杯口縁部である。調整は内外面にナデが施されている。120は土師器の甕口縁部である。内外面にナデが観察できる。

遺構の時期については，遺物から推測することは難しいが，SD101 の下から検出されていることから，SD101より古いものである。

SD101（第37・38図）

調査区北西部で検出した南北方向の溝である。長さ5.7m，幅1.7m，深さ0.20mを測り，断面形状は逆台形である。須恵器，土師器片が出土している。埋土は３層に分かれ，第１層は灰黄褐色砂質シルト，第２層は第１層よりも色調が濃い灰黄褐色砂質シルト，第３層はにぶい黄橙シルト質細砂であ

る。またSD101内には柱穴がいくつか検出されており，SB103－1を掘り切っている。

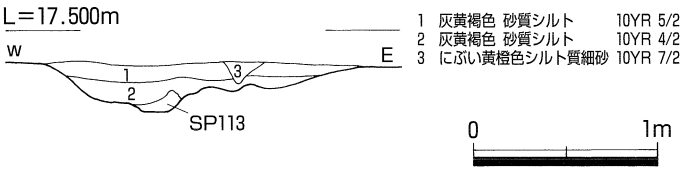
出土遺物は第38図に掲載した。125・126・127は須恵器である。125は杯底部であり，調整は外面に回転ナデと回転篦削りが見られ，底部は平らに仕上げられている。内面は回転ナデが施され，底部には成形時の指頭圧痕がわずかに残る。杯蓋の可能性もある。126は高台付椀の底部である。底部には高さ0.5cmの高台が付く。調整は内外面に回転ナデが観察できる。127は杯であり，立ち上がりが欠損している。受け部から17.9cmの口径が推測される。調整は内外面に回転ナデが見られる。128は土師器の口縁部で，口縁部の傾きから鍋もしくは鉢と考えられる。調整は摩滅が激しいが，外面は縦方向の刷毛目，内面にはナデが見られる。

遺物は，掘立柱建物跡と比べ新しい様相を示しており，SD101の時期は７世紀末から８世紀初め頃と考えられる。

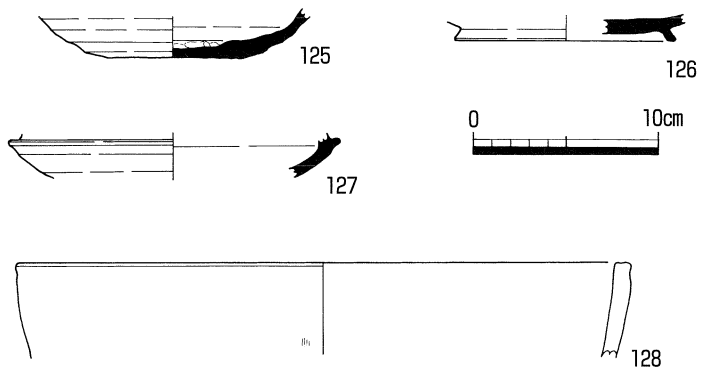
SD102（第39・40図）

調査区西部中央で検出した東西方向の溝である。極一部を検出したのみで，調査区外の西に続くものと考えられる。検出した溝は断面逆台形を呈し，長さ1.9m，幅0.4m，深さ0.08mを測る。埋土は単層で粗い褐色砂質シルトである。また主軸方向はN－12°－Eにあり，条理地割と合致している。

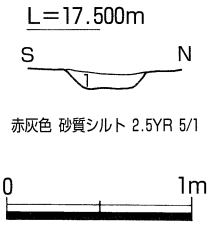
遺物は土師器が出土している。129は高杯であり，杯部から脚部にかけて残存している。調整は外面にナデ，内面は指頭圧痕とシボリ目が見られる。遺構の時期は遺物から７世紀代と推測される。また，SB101と重複して検出されているが，SB101との前後関係は不明である。



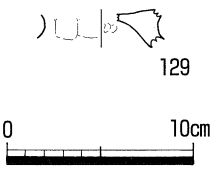
第37図　SD101土層断面図（S=1/40）



第38図　SD101出土遺物（S=1/4）



第39図　SD102土層断面図（S=1/40）

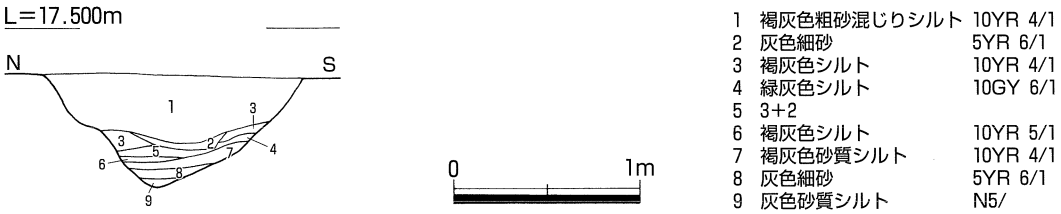


第40図　SD102出土遺物（S=1/4）

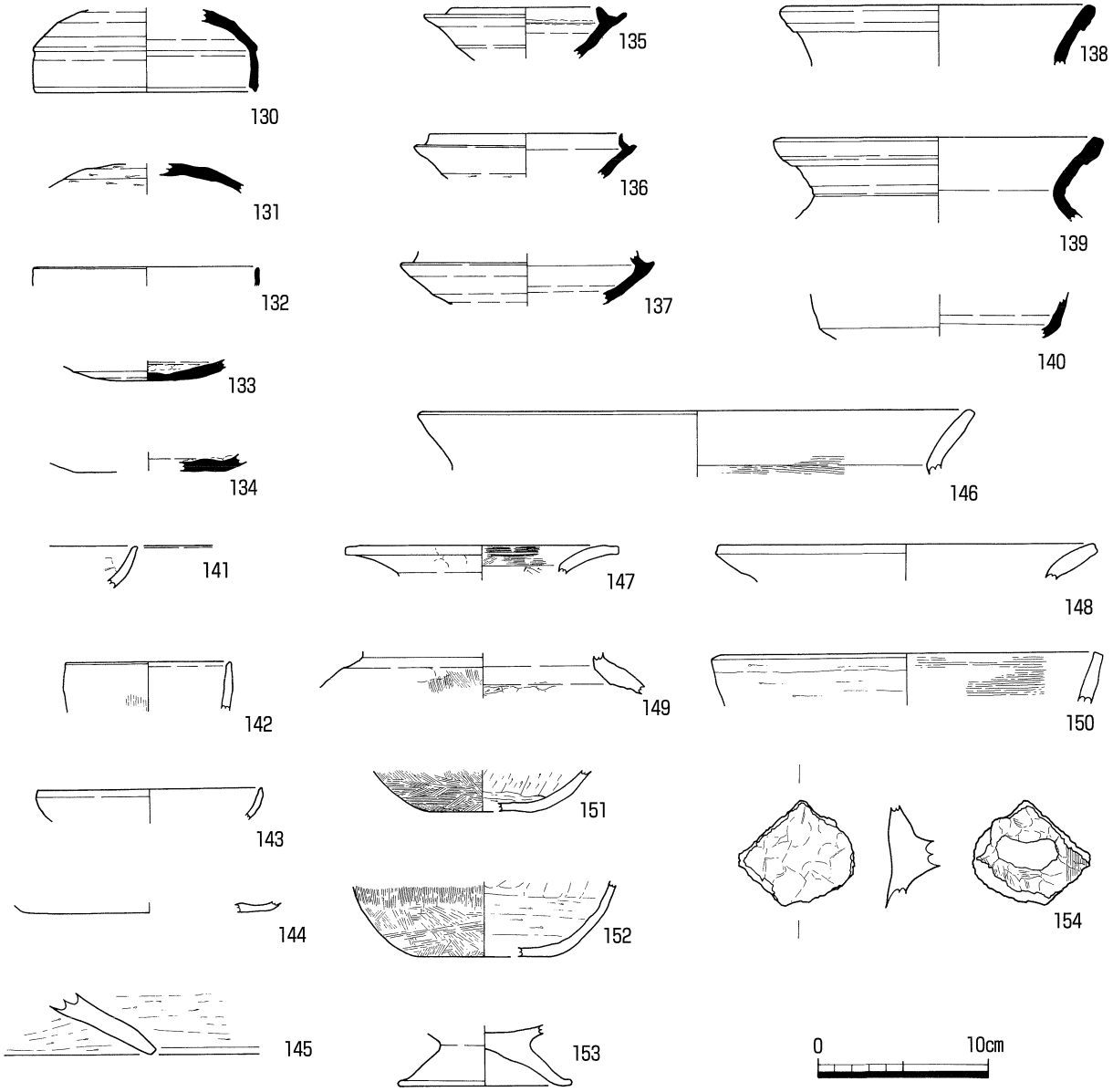
SD103（第41～43図）

調査区南部で検出した溝である。断面はU字形を呈し南西方向から北東方向へ伸びる。検出した長さ8.5m，幅1.4m，深さ0.6mを測る。主に第１層10YR1/4褐灰色粗砂シルトから遺物が出土しており，

溝内からは須恵器，土師器の他，木片と鳥形木製品が出土している。溝は９層に分層でき，第２～第９層は自然堆積層が一定の厚さで堆積していることが確認できる。しかし，第１層については30cm以上の厚さがあることから，ある時期に短期間に埋没したものと考えられる。



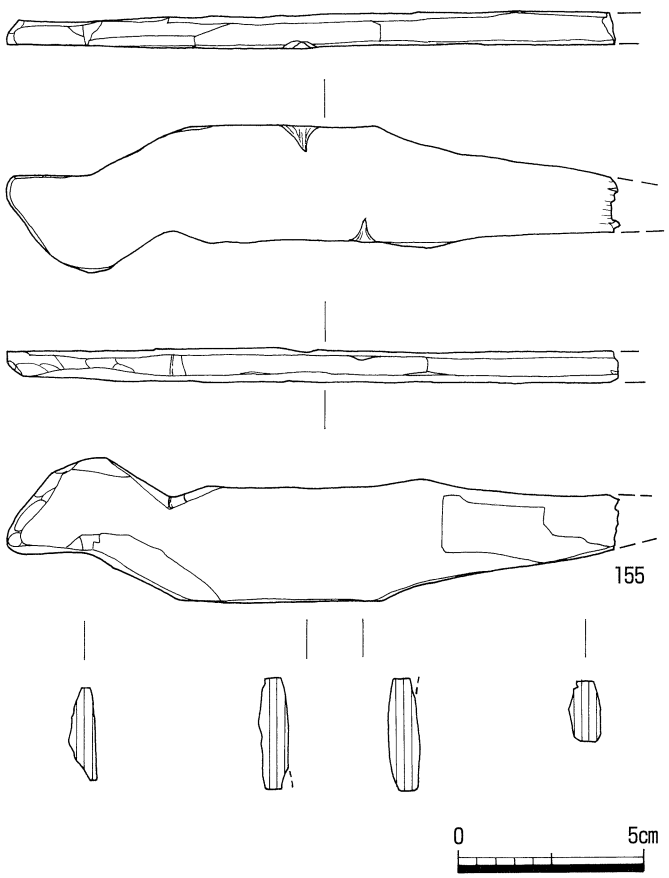
第41図　SD103土層断面図（S=1/40）



第42図　SD103出土遺物（S=1/4）

出土遺物は第42・43図に掲載した。130～140は須恵器である。130・131は杯蓋である。130は口縁部から天井部付近にかけて残存している。外面では天井部を回転篦削り，口縁部に回転ナデ，内面にも回転ナデが見られる。天井部から口縁部の途中に突出した稜があり，口縁部端部が尖るといった古い様相を示す。131は杯蓋の天井部である。上部に回転篦削りと下部に回転ナデが見られる。内面は回転ナデである。132は杯の口縁部である。内外面は回転ナデ調整である。133は杯身の底部である。外面は回転篦削り，内部には成形時の指頭圧痕が確認できる。また回転ナデの後，底部には仕上げナデが見られる。134も杯身の底部と考えられる。内外面とも指頭圧痕の後に回転ナデが施される。135～137は杯身である。いずれも立ち上がりは内傾し，器高も高くはならず，７世紀代のものと考えられる。調整は内外面に回転ナデが見られるが，135は外面下部に回転篦削りが見られる。138・139は甕の口縁部である。調整は内外面に回転ナデが施される。138の甕は，第１遺構面のSD１と第２遺構面のSD103から出土した破片が接合したことから同一個体であることが判明した。SD１から出土したものはSD103出土のものに比べ摩滅しており，第２遺構面のものが第１遺構面へ移動したものと考えられる。140は高杯の杯部であり，内外面に回転ナデが見られる。

141～154は土師器である。141・143は杯口縁部，144は杯底部である。内外面にはナデ調整が見られる。142は鉢である。調整は外面体部に縦刷毛，口縁部はナデ，内面にはナデが見られる。145は高杯の脚部と考えられ，内外面に成形時の指頭圧痕が見られ，調整として篦削りが施される。146～152は甕である。その内146・147・148・150は口縁部である。146は摩滅が著しく，内面の頸部に横刷毛がわずかに残る。147は，比較的焼成が良好で硬質である。外面の調整は指頭圧痕のち回転ナデ，内面は口縁部に刷毛目，頸部に篦削りが観察できる。148は内外面にナデと接合痕が見られる。150は外側に真直ぐ伸びる口縁部で，外面はナデが施され，内面は横刷毛が施されている。149は体部である。外面体部は縦刷毛が施されたのち，頸部にナデが見られる。内面は体部に成形時の指頭圧痕のち横方向に篦削りが施され，頸部にはナデが確認できる。151・152は底部である。151は外面全面に多方向の刷毛目が施されている。内面は全体に指頭圧痕のち底部は篦削り，体部には篦削りとナデが確認できる。152は外面底部に多方向の太いラインの刷毛目が見られ，体部には縦方向の細い刷毛が見られる。また一部に縦刷毛のち



第43図　SD103出土鳥形木製品（S=1/2）

ナデも確認できる。内部は全体に指頭圧痕のち，篦削りとナデが見られる。153は高杯の脚部で，内外面ともに摩滅が著しい。154は土鍋の把手である。把手は形成時の指頭圧痕が確認でき，その周りには縦刷毛が施される。内面は指頭圧痕による成形のち縦方向の篦削りとナデが観察できる。

第43図，155は鳥形木製品である。残存長16.4cm，幅3.0cm，厚さ0.8cmを測る。頭部は三角形の頭に嘴が水平に伸びる。体部は背と腹のラインが３cm幅で並行に走り，細長い形を示す。尾は先端にいくにつれ幅を狭め，体部の高さよりやや低い位置で伸びていく。体部や尾の輪郭は側面に対して直角に削られているが，表面の頭部から頸部にかけては何度か削った痕があり，斜めに削ることで立体的な表現が見られる。裏面には端部側面から穿たれた穴が背部と腹部に確認できる。穿孔が半分に割れていることから，この鳥形木製品は縦方向に割れたものであると考えられ，本来の厚さは２cm前後であったものと推測される。背の長さは5.5cmあり，水平な面を持つ。背に見られる穿孔は，幅0.8cm，深さは0.5cmで，穿孔は頭部から9.5cmの地点にあり，やや尾側に穿たれている。腹の穿孔については背の穿孔より大きく，幅0.9cm，深さ0.7cmを測る。尾の一部を欠損しているが，頭部から体部までは残りが良い資料である。

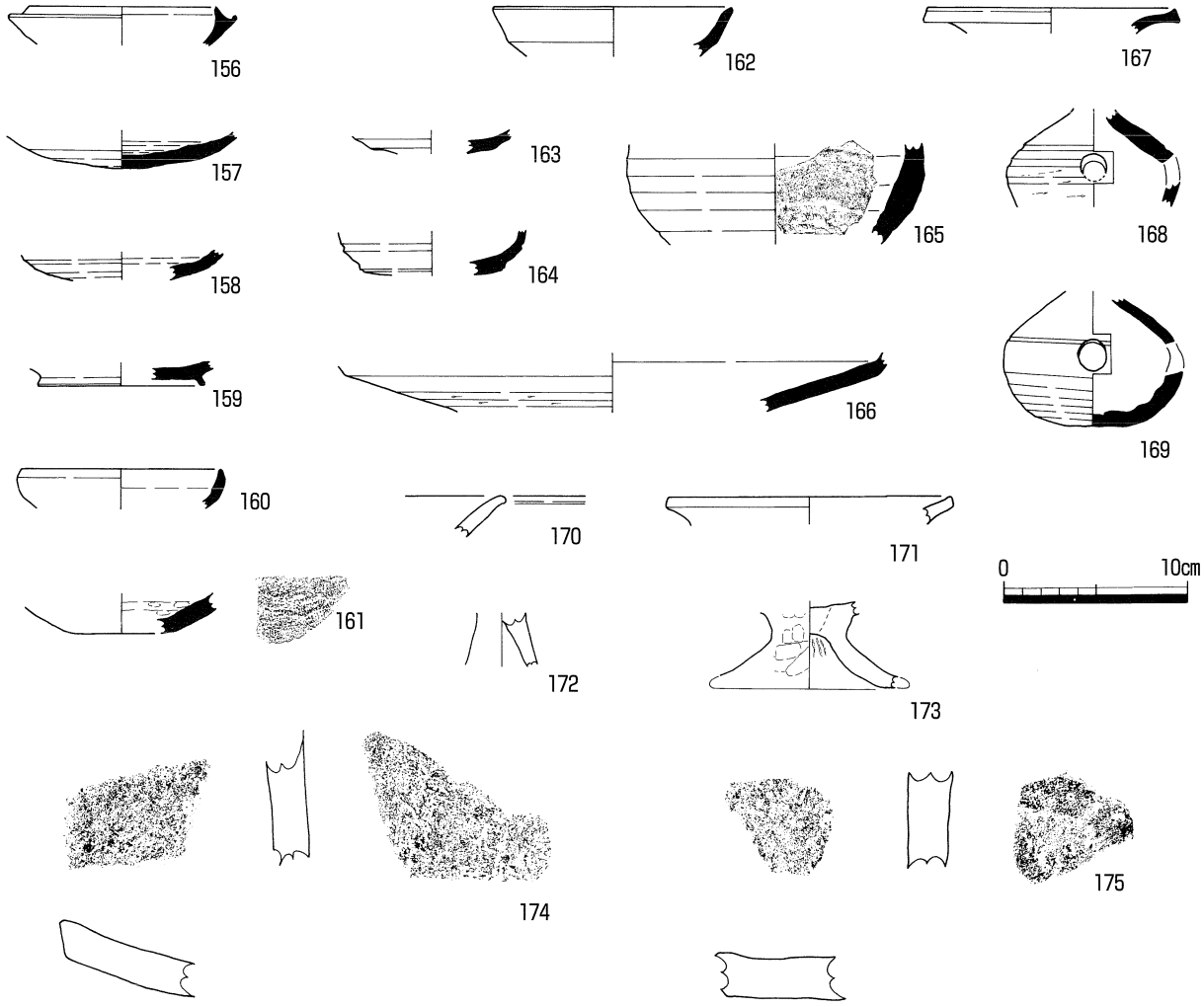
遺構の時期は，遺物から大阪陶邑編年のTK209～TK217型式相当にかけて存在したものと考えられる。130のように古い時期の遺物が見られるが，１点のみ出土していることや，出土層位が第１層であることから混入したものと考えられる。

第２遺構面上部堆積層出土遺物（第44図）

156～169は須恵器である。156～160は杯である。156は口縁部である。立ち上がりは低く，内傾が著しい。内外面は回転ナデが見られる。157は底部と考えられる。外面は摩滅しているが，回転篦削りが確認でき，内面は回転ナデが施されている。杯蓋の可能性もある。158は底部である。調整は残りがよく外面は回転篦削り，内面は回転ナデである。杯蓋の可能性もある。159は高台付椀である。底部には0.5cmの高台がやや外へ開いて伸びる。調整は外面が回転ナデ，内面は摩滅により不明である。焼成は不良で軟質である。160は口縁部で，口縁端部は丸く，体部は膨らみをもつ。内外面とも回転ナデ調整である。161は壺の底部である。外面には叩きのちナデ，内面は指頭圧痕のち回転ナデが施される。162は高杯の口縁部である。内外面とも回転ナデが施され，外面には緑色の自然釉が付いている。163・164は高杯の杯部であり，内外面ともに回転ナデが見られる。164は，外面に明瞭な段が成形されている。165は壺の底部である。断面は厚く，外面は回転篦削り，内面は体部に回転ナデを施した後に，底部に当て具痕が観察できる。166は盤もしくは皿の受け部と考えられる。外面は回転篦削りとナデが見られ，内面は回転ナデ調整で仕上げている。167は甕もしくは壺の口縁部である。口縁部は外側へ反っており，端部は上と下へ突出する。内外面ともナデ調整が見られる。168・169はハソウの体部である。168は，外面底部に回転篦削り，上部に回転ナデが見られる。中央には1.5cmほどの円孔が穿たれており，円孔の上と中央に計2本の凹線が巡る。内面は回転ナデが見られる。169は頸部から上を欠損しているのみで残りは良い。外面は体部中央より下は回転篦削りで調整され，底部中央は仕上げのナデが見られる。体部中央より上は回転ナデが見られる。体部中央には1.5cmほどの円孔が穿たれており，円孔の中央よりやや上に凹線が一条巡る。内面は回転ナデ調整が確認できる。

170～173は土師器である。170・171は甕の口縁部である。170は口縁端部が外側に反って丸くおさめている。口縁端部はどちらも内外面にナデ調整が見られる。172は高杯脚部である。外面は指頭圧

痕のちナデ調整で，内面は頸部にシボリ目が確認できる。173は高杯の杯部から脚部にかけてである。外面は成形時の指頭圧痕とナデが見られる。内面はナデとシボリ目が見られる。174・175は平瓦である。174は両面ともに摩滅が著しいが，凸面にはわずかに刷毛目状の調整が観察できる。一方は端部である。胎土は灰白色を呈する。175は凸面は摩滅が激しく調整は不明であるが，凹面にはわずかに布目が観察できる。胎土は橙色を呈し，焼成は軟質である。



第44図　第２遺構面上部堆積層出土遺物（S=1/4）

第４章　自然化学分析

樹種同定報告

高松市西下遺跡出土木製品の樹種調査結果

（株）吉田生物研究所

1 試料

試料は高松市西下遺跡から出土した祭祀具１点である。

2 観察方法

剃刀で木口（横断面），柾目（放射断面），板目（接線断面）の各切片を採取し，永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3 結果

樹種同定結果（針葉樹１種）の表と顕微鏡写真を示し，以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1）ヒノキ科アスナロ属（*Thujopsis* sp.）

（遺物No.１）

（写真No.１）

木口では仮道管を持ち，早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で１分野に２～４個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ，アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州，四国，九州に分布する。

◆参考文献◆

島地　謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）

島地　謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社（1982）

伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）

北村四郎・村田　源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）

深澤和三「樹体の解剖」海青社（1997）

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所　資料第27冊　木器集成図録　近畿古代編」（1985）

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所　資料第36冊　木器集成図録　近畿原始編」（1993）

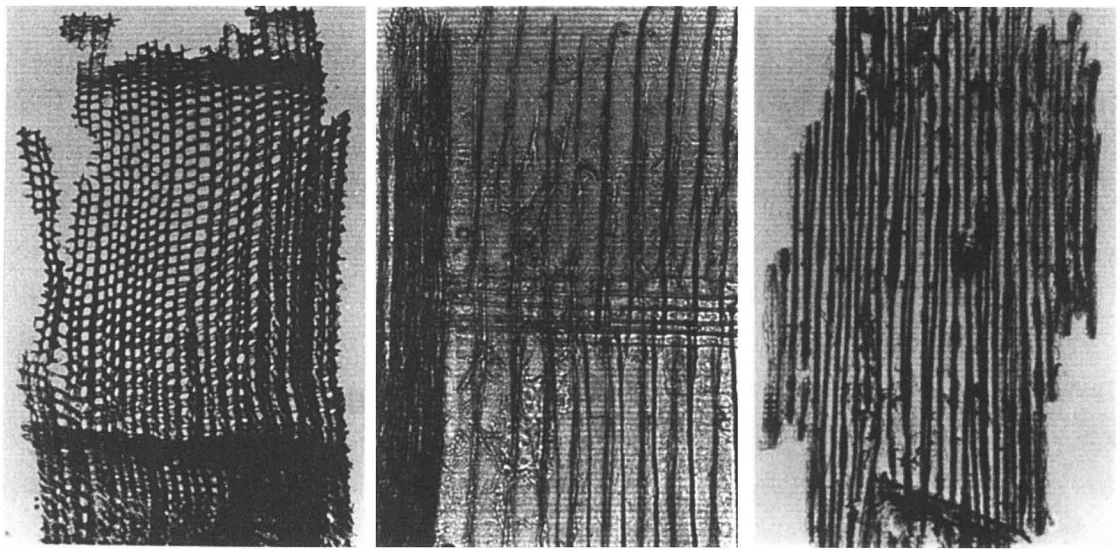
◆使用顕微鏡◆

Nikon

MICROFLEX UFX - DX Type 115

第２表　高松市西下遺跡出土木製品同定表

No.	品名	樹種
1	鳥形木製品	ヒノキ科アスナロ属



木口×40　　柾目×100　　板目×40

No－1　ヒノキ科アスナロ属

第５章　まとめ

第１節　遺構の変遷

西下遺跡では７世紀から14世紀の遺構・遺物を検出した。この内，第１遺構面では時期が確定するものがわずかであるため，遺構の残りのよかった第２遺構面を中心に遺構の変遷を概観してゆく。

第２遺構面では古墳時代後期から飛鳥時代を中心とした遺構を確認した。SD103がもっとも古い遺構であり，遺物から７世紀初め頃と考えられる。同じ時期を示す遺構は見つかっていないが，溝からは多数の土器と鳥形木製品を検出していることから，調査区周辺にSD103と同時期の遺構があるものと考えられる。またSD103は，堆積状況から短期間で埋没したものと考えられ，埋没後にSB101が建てられている。出土遺物および第２遺構面の状況から７世紀代に建てられ廃絶したものと考えられる。またSB101は７世紀では大型の掘立柱建物跡であり，主軸方向が条里地割と合致することから，７世紀代の掘立柱建物跡の中では計画的に造営された建物である可能性を指摘できる。次に時期が確定しているものにSD101がある。７世紀末から８世紀初めにかけてSD101が存在したと考えられ，幅の広い溝で，溝の下にはいくつかの柱穴が確認されている。SD101は出現時期や主軸方向が条里地割と合致することから条里制に規制された遺構である可能性が高い。SB102・SB103については出土遺物が小片のため時期の特定はできないが，SB101と同じ頃の遺構であると考えられる。同じくSD102もSB101と同じ頃のものと考えられる。

第１遺構面では土師器片が多量に出土している。須恵器も確認されているが下層の遺物が混じっているもので，遺物が示す14世紀代の時期が考えられる。また遺構から７～８世紀代の遺物を検出したSD１があるが，遺構面と同じく下層の遺物を含んだものと考えられる。そのほかの遺構については遺物が小片のため不明な点が多い。また第１遺構形成層からは少数ではあるが平安頃の瓦が出土していることから，近くに当該時期の遺構があるものと予想される。以上のことから，SD１も含めて第１遺構面の遺構は14世紀を中心とした中世の時期であると考えられる。

第３表　遺構変遷表（第２遺構面）

	６世紀	７世紀				８世紀
SB101						
SB102						
SB103						
SD101						
SD102						
SD103						

第２節　鳥形木製品

SD103から鳥形木製品が出土したことは報告した。鳥形木製品については全国的にも出土例が少なく，しばしば人形や斎串とともに祭祀具として取り上げられている。現在筆者が知り得る香川県内の

鳥形木製品出土遺跡は，坂出市川津町下川津に所在する下川津遺跡の平面形の鳥形木製品１点，高松市伏石町に所在する井手東Ｉ遺跡出土の側面観を現した平面形の鳥形木製品の体部１点，さぬき市志度鴨部に所在する鴨部・川田遺跡の立体型の鳥形木製品と翼部のみの２点で，計３遺跡４例であり西下遺跡を加え５例となる。そこでSD103にて出土した鳥形木製品はどういった形態を示すものなのか，本来の形を復元してみたい。

鳥形木製品は主に立体的か平面的であるかで分類されている。その内，立体的なものは弥生時代に多く，平面的なものは古代に多いとされている。その上で当遺跡から出土した鳥形木製品をみると，側面観を表した平面的な鳥形木製品に位置づけられる。また穿孔が確認されていることから，何かを差し込んでいたことは確かである。腹部に穿孔をもつ例はいくつか知られており，県内で似た事例として鴨部・川田遺跡の鳥形木製品が挙げられる。この遺跡からは，立体型の鳥形木製品と翼部のみの２点が確認されている。時期は出土層位から平安時代以降のものと考えられているが，立体的な形態から弥生時代の遺物の可能性も残す。立体型の鳥形木製品は腹部に１箇所，背部に２箇所穿孔が見られる一方，翼部は三日月形の板状木製品で中央に２箇所の穿孔が見られる。穿孔から本来は背部に翼部を取り付けていたものと推測される。金関恕氏の論考を参考にすれば，杆頭に差し込んだ痕跡であり，これを立て並べたと考えられている。西下遺跡の鳥形木製品についても，背部の穿孔は鴨部・川田遺跡例のように翼を模した部材があり，これを取り付けていた痕跡である可能性が高い。それは背部が水平に作られていることから，板状の翼部が取り付けられていたと推測することができる。以上，西下遺跡の鳥形木製品は，側面観を現した平面形の鳥形木製品に板状の翼部がつくものであり，腹部には鳥杆が差し込まれたものと推測される。

時期については前述したSD103の時期を参考にする。第１層から６世紀中頃の様相を示す須恵器１点が出土しているが，短期間に大量の土が堆積したもので，後に巻き上げられ混入した遺物であると考えられる。そのため層位と出土した土器の共伴関係から７世紀初頭の遺物であり，６世紀代には遡らないと考えられる。

このような鳥形木製品が出土することはどのようなことが考えられるのだろうか。それが本来どういった意味をもって作られたのかは特定することは難しい。金関恕氏は弥生時代の鳥形木製品については農耕に関連した祭祀であったとして，「鳥杆のような簡単な類については、長く続いた」と考えられている。実際に鳥杆を立てる習慣が朝鮮半島から北アジアに見られることは，この考えを裏付ける一つの理由である。そして古墳時代の鳥形木製品については「やがて、その際場、祭儀の形態は、古墳と祭りに移されていく」として穀物の豊穣という考えは死者の魂を運搬するという考えに移行していくことを指摘している。当遺跡の鳥形木製品は古墳時代後期から飛鳥時代にあたるが，平野部からの出土であり，古墳に伴うものよりも，集落に立てたものであったと考えられる。そこには豊穣と葬送という考えの他，朝鮮半島にある習俗として続く「部落の守護神」という考えもあったのではないかと考えられる。いずれにしても鳥形木製品の出土は，高松平野南部の古墳時代後期から飛鳥時代にかけての精神的な考えを推察する大きな資料と考えられる。

第３節　第２遺構面検出遺構について

西下遺跡の第２遺構面から掘立柱建物跡SB101が検出された。この掘立柱建物跡は７世紀代のものと考えられ，比較的大型であり，条里地割に合致するということが特徴である。しかし一部分の検出

のため，建物の時期や性格等を確定するには至っていない。しかし，今回の発掘調査による成果は７世紀の十川を含め高松平野南部の歴史を解明する上で大きな資料である。そこで，今一度，当遺構の整理を行なう。

1　時期について

第２遺構面で時期が確定しているものは，SD103である。時期が古い様相を示す遺物が一部に混入しているものを除き，出土須恵器からTK209～217型式相当のものと考えられる一番古い遺構である。次に確定しているものにSD101がある。126の高台付椀が出土していることから，７世紀末から８世紀初めのものと考えられる。次に遺構の切り合い関係から考えられるものとして，SB101とSB103がある。SB101はSD103を切り込んで造られているため，TK217型式以降のものと位置づけられる。また，SB101からは遺物が数点出土しており，その中で115がTK217型式の様相を示すことから７世紀初め頃から中頃の時間幅が考えられる。ただし，破片であることや出土した遺物が遺構の時期を確実に示すものなのか判断が困難なため，SD103 以降で，SD101以前の７世紀代に含まれるものと考えられる。SB103については，SD101に切られて検出されているため７世紀末以前の遺構であると考えられる。また，時期が確定しないものとしてSB102とSD102がある。これらの遺構はSB101と同じ方位を示し，並行して造られている点が特徴である。時期については，検出した遺構面から７世紀末から８世紀初めの遺物が出土していることから，確実な時期ではないが，この時間幅に含めてよいと考えられる。

2　西下遺跡と条里地割

第２遺構面ではSB103とSD103以外の遺構はN－12°－Eの方位を示し，条里地割とほぼ合致する。この条里地割に関連するものとして南海道があげられ，高松平野の条里地割は南海道を基準に施工されたことを金田章裕氏が述べられている（金田1988)。当遺跡から南50mにはこの南海道推定ラインが東西に走っている。高松平野にはN－10°－E前後の方位を示す条里地割がみられ，当遺跡が所在する旧行政区画の山田郡では地割方向がN－12°－Eの方位を示すことが知られている。西下遺跡の第２遺構面の多くの遺構は，この山田郡の条里地割にほぼ合致してくることが指摘できる。

3　掘立柱建物跡の規模

高松平野では新田本村遺跡，奥の坊遺跡群Ⅱ（奥の坊権現前遺跡)，奥の坊遺跡群Ⅴ，松縄下所遺跡において７世紀代と考えられる掘立柱建物跡がいくつか検出されている。その内，西下遺跡で検出したSB101は，東西３間以上，南北４間以上で，柱穴が一辺60cmの隅丸方形で柱穴間が約1.8mを示す。上記の遺跡では，この規模に相当するような掘立柱建物跡は確認されておらず，当遺跡の掘立柱建物跡は７世紀の高松平野において大型の掘立柱建物跡であることが指摘できる。

4　総括

西下遺跡第２遺構面で検出した遺構は７世紀のものであり，掘立柱建物跡については，①遺構の規模が大きく，②地割と方位が一致することが指摘できた。この遺構の評価については，現段階では高松平野において類例が確認されていないことや，一部のみの遺構検出であることから，西下遺跡だけでの解釈は危険であるため事実報告に留め，具体的な考察は控えたい。ただし，この検出した遺構は

前述した時期・規模・特徴を備えるものであり，当時の旧行政区画である山田郡ないし山田評が存在したであろう時期に属する可能性が十分考えられる。いずれにしても，７世紀代の高松平野の動向については，今後の南海道を含めた発掘調査の増加に期待したい。

引用・参考文献

香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター2003『平成14年度　埋蔵文化財発掘調査概報』

金関恕「神を招く鳥」『考古学論考』1982平凡社

川畑聰2001『太田第２土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告第４冊　松縄下所遺跡』高松市教育委員会

金田章裕1988「第６章　条里と村落生活」『香川県史1　原始・古代』香川県編　四国新聞社

金田章裕1992「第２節　山田郡条里と山田郡田図」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会

金田章裕1999「第２節　高松平野における条里地割の形成」『讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ』高松市教育委員会

國木健司1994「西尾遺跡」『香川県埋蔵文化財発掘調査報告』香川県教育委員会

田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

奈良国立文化財研究所1985『木器集成図録　近畿古代編』

奈良国立文化財研究所1993『木器集成図録　原始編』

藤好史郎・西村尋文編1990『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅶ　下川津遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団

森格也1997「第４節　鳥形木製品について」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第７冊　鴨部・川田遺跡Ⅰ』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局

山中敏史1994「第３章　古代地方官衛の成立と展開」『古代地方官衛遺跡の研究』塙書房

山元敏裕ほか1995『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告第４冊　井手東Ⅰ遺跡』高松市教育委員会・建設省四国地方建設局

山本英之2004「讃岐国」『日本古代道路事典』古代交通研究会編　八木書店

第4表　遺　物　観　察　表（土器）

番号	遺構名	種類	器種	部位	法量（cm）			調整	色調	胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面（上）　内面（下）	外面（上）　内面（下）			
1	試掘トレンチ	須恵器	杯蓋	天井部			1.7		N7/　灰白 N7/　灰白	1mm以下の石英・長石を含む	良	
2	SP9	須恵器	杯蓋	口縁部	15.0		1.4	回転ナデ 回転ナデ	N7/　灰白 N8/　灰白	1mm以下の石英・長石を含む	良好	
3	SP2	土師器	甕	口縁部	14.2		1.7	ナデ ナデ	2.5YR6/8　橙 5YR7/6　橙	1mm以下の石英・長石を含む	良	
4	SP38	土師器	蛸壺	底部	6.6		2.8	指頭圧痕 ナデ	7.5YR7/6　橙 5YR6/6　橙	1mm以下の石英・長石を含む	良好	
5	SD1	須恵器	杯蓋	天井部			1.4	回転篦削り 指頭圧痕→回転ナデ	N6/　灰 N7/　灰白	密	良	
6	SD1	須恵器	杯蓋	天井部			1.4	回転篦削り，ナデ 回転ナデ	N6/　灰 N7/　灰白	密	良	
7	SD1	須恵器	杯身	受け部			1.3	回転ナデ 回転ナデ	N6/　灰 N6/　灰	密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
8	SD1	須恵器	杯身	口縁部～体部	11.4		3.0	回転篦削り，回転ナデ 回転ナデ	N5/　灰 N7/　灰白	密	良好	
9	SD1	須恵器	杯身	口縁部～体部	12.2		2.2	回転ナデ 回転ナデ	N6/　灰 N6/　灰	細砂 0.5mm以下の石英・長石を含む	良	
10	SD1	須恵器	杯身	口縁部～体部	12.4		2.1	回転ナデ 回転ナデ	2.5YR8/1　灰白 2.5YR8/1　灰白	密 1mm以下の石英・長石を含む	良	
11	SD1	須恵器	杯身	口縁部～体部	14.0		2.4	回転ナデ 回転ナデ	N5/　灰 N6/　灰	1mm以下の砂粒を含む	良	
12	SD1	須恵器	鉢	口縁部	18.9		4.0	ナデ 回転ナデ	5Y5/1　灰 5Y5/1　灰	1mm以下の石英・長石を含む	良	
13	SD1	須恵器	杯身	口縁部	12.0		2.2	回転ナデ 回転ナデ	5Y6/1　灰 5Y6/1　灰	1mm以下の石英・長石を含む	良好	
14	SD1	須恵器	高杯	受部～脚部			1.8	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y8/1　灰白 2.5Y8/1　灰白～　2.5Y8/2 灰白	2mm以下の砂粒をやや多く含む	良	
15	SD1	須恵器	横瓶	体部			17.5	カキ目 叩キ→指頭圧痕→ナデ	N6/　灰 N5/　灰	1mm以下の長石を含む	良好	
16	SD1	土師器	甕	口縁部	10.6		2.8	ナデ ナデ	10YR7/3　にぶい黄橙 10YR7/3　にぶい黄橙	1mm以下の石英・長石を含む	良好	
17	SD1	土師器	甕	口縁部			2.2	摩滅 摩滅	5YR6/8　橙 7.5YR7/6　橙	1～2mm以下の石英・長石を含む	良	
18	SD1	土師器	高杯	脚部			8.2	指ナデ 指ナデ，シボリ目	7.5YR8/4　浅黄橙 7.5YR6/6　橙	1mm以下の石英・長石を含む	良	外面に文様（直線文）有り。
20	SD2	土師器	甕	頸部	(頸部径) 26.0		3.5	ナデ，刷毛目 ナデ	10YR8/2　灰白 2.5YR8/2　灰白	やや粗い	良	
21	SD3	須恵器	杯蓋	天井部			2.3	回転篦削り，回転ナデ 指頭圧痕→回転ナデ	N6/　灰 5B7/1　明青灰	密	良好	
22	SD3	須恵器	高杯か	口縁部	11.0		2.8	回転ナデ、回転篦削り 回転ナデ	N7/　灰白 N7/　灰白	密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
23	SK1	須恵器	杯蓋	口縁部	14.0		1.9	回転ナデ 回転ナデ	N4/　灰 N5/　灰	1～3mm以下の石英・長石を含む	良	
24	最下層	弥生土器	甕	底部		5.0	2.2	ナデ 篦削り	7.5YR2/1　黒 7.5YR6/1　灰	やや密 2mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	良	
25	攪乱層	須恵器	甕	口縁部	21.6		2.2	回転ナデ 回転ナデ	N8/　灰白 7.5Y8/1　灰白	1mm以下の石英・長石を含む	良	
26	攪乱層	土師器	甕	頸部	(頸部径) 16.0		4.0	指頭圧痕，刷毛目→ナデ シボリ目，指ナデ→篦削り	10YR7/4　にぶい黄橙 10YR5/2　灰黄褐	1mm以下の石英・長石を含む	良好	
27	第1遺構面直上	須恵器	杯蓋	天井部			1.0	回転篦削り，回転ナデ 回転ナデ	N5/　灰 N6/　灰	1mm以下の砂粒を含む	良好	
28	第1遺構面直上	須恵器	杯蓋	天井部			1.7	回転篦削り，回転ナデ 指頭圧痕→回転ナデ	N6/　灰 N6/　灰	1mm以下の石英・長石を含む	良	
29	第1遺構面直上	須恵器	杯身	口縁部	10.8		2.8	回転篦削り，回転ナデ 回転ナデ	N7/　灰白 N6/　灰	密	良好	
30	第1遺構面直上	須恵器	杯身	口縁部	12.6		3.4	回転ナデ 回転ナデ	N6/　灰 N6/　灰	精良	良好	
31	第1遺構面直上	須恵器	杯身	口縁部	13.2		2.0	回転ナデ 回転ナデ	N7/　灰白 N7/　灰白	密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
32	第1遺構面直上	須恵器	杯身	口縁部	14.0		2.0	回転ナデ 回転ナデ	N6/　灰～N5/　灰 N7/　灰白～N6/　灰	微細粒を含む	良	
33	第1遺構面直上	須恵器	杯身	底部		8.2	1.4	篦削り 回転ナデ	N6/　灰 N7/　灰白	密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
34	第1遺構面直上	須恵器	杯	口縁部	10.5		3.0	回転ナデ 回転ナデ	5Y7/1　灰白～　5Y7/2　灰白 5Y7/1　灰白	精良	良好	
35	第1遺構面直上	須恵器	杯	口縁部	14.0		2.0	回転ナデ 回転ナデ	5B5/1　青灰 5B6/1　青灰	密 1mm以下の石英・長石を含む	良	
36	第1遺構面直上	須恵器	横瓶	体部			4.0	カキ目 回転ナデ	N6/　灰 N7/　灰白	1mm以下の石英・長石を含む	良好	
37	第1遺構面直上	須恵器	横瓶	体部			18.8	カキ目 回転ナデ	N6/　灰 N7/　灰白	1mm以下の石英・長石を含む	良好	
38	第1遺構面直上	須恵器	壺か	底部		4.0	1.0	ナデ 回転ナデ　指押え	N7/　灰白～N6/　灰 N6/　灰・2.5YR6/3　にぶい橙	微細粒を含む	良好	底部片に篦記号が入る。
39	第1遺構面直上	須恵器	ハソウ	底部			2.0	回転篦削り 指頭圧痕→回転ナデ	N6/　灰 N7/　灰白	砂粒をやや多く含む	良好	
40	第1遺構面直上	須恵器	高杯	杯部			2.6	摩滅 回転ナデ	2.5Y7/2　灰黄 5Y7/1　灰白	1mm以下の石英・長石を含む	良	
41	第1遺構面直上	須恵器	甕	口縁部	26.0		4.6	回転ナデ 回転ナデ	N7/　灰白 N7/　灰白	密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
42	第1遺構面直上	須恵器	甕	体部			7.3	ナデ，横刷毛，叩き 当て具痕（同心円文）→ナデ	7.5Y6/　灰 7.5Y6/1　灰	5mm以下の石英・長石等を含む	良好	
43	第1遺構面直上	土師器	杯	口縁部	10.0		3.1	ナデ 指頭圧痕→ナデ	7.5YR5/3　にぶい褐 7.5YR5/4　にぶい褐	1mm以下の石英・長石を含む	良	
44	第1遺構面直上	土師器	杯	底部		5.8	2.1	篦切り 摩滅	10YR8/3　浅黄橙 10YR7/4　にぶい黄橙	1mm以下の石英・長石を含む	良好	
45	第1遺構面直上	土師器	皿	体部			2.0	篦削り 篦磨き（暗文）	5YR6/8　橙～　7.5YR7/6　橙 5YR6/8　橙	微細粒を含む	良	内面に文様（暗文）有り。
46	第1遺構面直上	土師器	高杯	脚部			4.3	指頭圧痕→ナデ ナデ　シボリ目	7.5YR7/4　にぶい橙 5YR7/6　橙	1mm以下の石英・長石を含む	良好	
47	第1遺構面直上	土師器	甕	口縁部	23.0		1.3	ナデ，刷毛目 ナデ	10Y5/6　赤 7.5YR6/4　にぶい橙	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	
48	第1遺構面直上	土師器	甕	頸部	(頸部径) 23.0		2.7	ナデ ナデ	7.5YR7/6　橙 7.5YR7/6　橙	2mm以下の石英・長石を含む	良	
49	第1遺構面直上	土師器	鍋	頸部	(頸部径) 35.0		2.8	ナデ，接合痕 ナデ	5YR7/6　橙 2.5YR6/8　橙	1～2mm以下の石英・長石を含む	良	
50	第1遺構面形成層上部	須恵器	杯蓋	口縁部	22.0		1.3	回転ナデ 回転ナデ	5Y7/1　灰白 5Y6/1　灰	密	良	
51	第1遺構面形成層上部	須恵器	杯蓋	口縁部	16.0		1.9	回転ナデ 回転ナデ	N8/　灰白 N8/　灰白	1mm以下の石英・長石を含む	良好	
52	第1遺構面形成層上部	須恵器	杯蓋	天井部			1.5	回転ナデ 回転ナデ	N7/　灰白 N7/　灰白	1mm以下の石英・長石を含む	良	
53	第1遺構面形成層上部	須恵器	杯身	口縁部	10.8		2.6	回転ナデ 回転ナデ	N5/　灰 N7/　灰白	密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
54	第1遺構面形成層上部	須恵器	杯身	口縁部	12.0		2.1	回転ナデ 回転ナデ	N6/　灰 N6/　灰	1mm以下の石英・長石を含む	良	
55	第1遺構面形成層上部	須恵器	杯身	口縁部	12.2		2.8	回転ナデ 回転ナデ	N7/　灰白 N7/　灰白	1mm以下の石英・長石を含む	良	
56	第1遺構面形成層上部	須恵器	杯身	口縁部	16.0		2.1	回転ナデ 回転ナデ	5Y5/1　灰 5Y6/1　灰	1mm以下の石英・長石を含む	良	
57	第1遺構面形成層上部	須恵器	杯	口縁部			1.6	回転ナデ 回転ナデ	N5/　灰 N5/　灰	1mm以下の石英・長石を含む	良好	坏蓋の可能性もある。
58	第1遺構面形成層上部	須恵器	杯	口縁部	11.2		2.3	ナデ ナデ	7.5YR6/1　灰 7.5YR6/1　灰	密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
59	第1遺構面形成層上部	須恵器	杯	口縁部	12.4		2.0	ナデ ナデ	5Y7/1　灰白 5Y7/1　灰白	密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
60	第1遺構面形成層上部	須恵器	杯	口縁部	13.7	10.6	2.5	ナデ ナデ	2.5YR6/1　黄灰 N7/　灰白	密 1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	
61	第1遺構面形成層上部	須恵器	杯身	底部		12.0	1.0	回転ナデ 回転ナデ	5Y6/1　灰 5Y7/1　灰白	微細粒を含む	良	

番号	遺構名	種類	器種	部位	法量（cm）			調整	色調	胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面（上） 内面（下）	外面（上） 内面（下）			
62	第1遺構面形成層上部	須恵器	ハソウ	体部			2.5	回転ナデ ナデ	N6/ 灰 N6/ 灰	密	良好	円孔有り。 円孔の上に沈線一条有り。
63	第1遺構面形成層上部	須恵器	ハソウ	体部			2.8	ナデ ナデ，シボリ目	N6/ 灰 N7/ 灰白	やや精良	良好	
64	第1遺構面形成層上部	須恵器	鉢	口縁部	16.0		1.7	回転ナデ 回転ナデ	N5/ 灰 N6/ 灰	精良	良好	
65	第1遺構面形成層上部	須恵器	皿もしくは鉢	口縁部			1.5	回転ナデ 回転ナデ	N6/ 灰 N7/ 灰白	1mm以下の石英・長石を含む	良	
66	第1遺構面形成層上部	須恵器	高台付碗	体部	(体部径) 11.6		5.9	回転ナデ 回転ナデ	N6/ 灰 N5/ 灰	やや密	良	
67	第1遺構面形成層上部	須恵器	高杯	脚部			7.2	回転ナデ 回転ナデ	N6/ 灰 N6/ 灰	1mm以下の石英・長石を含む	良好	
68	第1遺構面形成層上部	須恵器	高杯か	口縁部	9.0		3.5	回転ナデ 回転ナデ	N7/ 灰白 N7/ 灰白	密	良	
69	第1遺構面形成層上部	須恵器	高杯	脚部			2.3	回転ナデ 回転ナデ	N6/ 灰 N5/ 灰	1mm以下の微細粒を含む	良好	
70	第1遺構面形成層上部	須恵器	高杯	脚部	8.8		2.4	回転ナデ 回転ナデ	N6/ 灰 N8/ 灰白	1mm以下の石英・長石を含む	良	
71	第1遺構面形成層上部	須恵器	高杯	脚部		14.6	1.3	摩滅 回転ナデ	N5/ 灰 N5/ 灰	1mm以下の砂粒を含む	良	
72	第1遺構面形成層上部	須恵器	平瓶	頸部	(頸部径) 5.1		3.2	ナデ ナデ	5Y6/1 灰 5Y4/1 灰	1mm以下の石英・長石を含む	良	
73	第1遺構面形成層上部	須恵器	壺	底部			2.6	回転ナデ 回転ナデ，ナデ	N6/ 灰 N7/ 灰白	密	良	
74	第1遺構面形成層上部	須恵器	壺	底部		2.4	1.6	回転篦削り 回転ナデ	N6/ 灰 N7/ 灰白	密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
75	第1遺構面形成層上部	土師器	杯	口縁部	19.9		4.0	ナデ→篦磨き ナデ	2.5YR6/6 橙 2.5YR5/6 明赤褐	密	良	
76	第1遺構面形成層上部	土師器	杯	底部			1.4	ナデ ナデ	10YR8/3 浅黄橙 7.5YR6/4 にぶい橙	1mm以下の石英・長石を含む	良好	
77	第1遺構面形成層上部	土師器	杯	底部		5.4	1.4	ナデ ナデ	5YR6/6 橙 5YR5/4 にぶい赤褐	1mm以下の石英・長石・金雲母を含む	良	
78	第1遺構面形成層上部	土師器	杯	底部		5.0	1.6	摩滅 摩滅	10YR7/6 明黄褐 10YR7/3 にぶい黄橙	密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
79	第1遺構面形成層上部	土師器	杯	底部		7.8	1.1	ナデ ナデ	7.5YR6/6 橙 7.5YR7/4 にぶい橙	やや密	良	
80	第1遺構面形成層上部	土師器	杯	底部		8.6	1.1	ナデ ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐 10YR5/2 灰黄褐	1mm以下の石英・長石を含む	良	
81	第1遺構面形成層上部	土師器	杯	底部		8.0	1.3	ナデ ナデ	5YR4/6 赤褐 5YR4/6 赤褐	1mm以下の石英・長石を含む	良	
82	第1遺構面形成層上部	土師器	杯	底部		7.8	1.2	ナデ ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙 7.5YR4/2 灰褐	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	良	
83	第1遺構面形成層上部	土師器	杯	底部		9.8	1.5	ナデ ナデ	5YR7/3 にぶい橙 5YR5/6 明赤褐	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	
84	第1遺構面形成層上部	土師器	高杯	脚部	10.6		1.3	ナデ ナデ	7.5YR7/8 黄橙 10YR8/4 浅黄橙	2mm以下の石英・長石を含む	良	
85	第1遺構面形成層上部	弥生土器	不明	脚部		7.4	2.8	摩滅 摩滅	7.5YR7/6 橙 7.5YR7/6 橙	1mm以下の石英・長石を含む	良	外面に文様（竹管文）有り。
86	第1遺構面形成層上部	土師器	把手付鍋	把手部			2.5	指頭圧痕	5YR7/3 にぶい橙 5YR7/6 橙	石粒を含む 3mm以下の石英・長石を含む	良	
87	第1遺構面形成層上部	瓦	丸瓦				6.2	（凹面）布目	10YR8/3 浅黄橙 10YR8/2 灰白	1～2mm以下の砂粒を含む	良	
88	第1遺構面形成層上部	土師器	甕	口縁部	14.4		2.5	ナデ ナデ	7.5YR7/6 橙 7.5YR8/4 浅黄橙	1mm以下の石英・長石を含む	良好	
89	第1遺構面形成層上部	土師器	甕	口縁部			1.1	ナデ ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙 7.5YR7/6 橙	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	
90	第1遺構面形成層上部	土師器	甕	体部			10.3	縦刷毛 篦削り	2.5YR5/6 明赤褐 7.5YR6/6 橙	3mm以下の石英・長石を含む	良	
91	第1遺構面形成層上部	土師器	甕	口縁部		17.0	1.4	摩滅 摩滅	7.5YR7/4 にぶい橙 7.5YR7/6 橙	1mm以下の石英・長石を含む	良好	
92	第1遺構面形成層上部	土師器	甕	口縁部	19.0		4.5	ナデ ナデ	7.5YR7.6 橙 10YR8/4 浅黄橙	1mm以下の石英・長石を含む	良	
93	第1遺構面形成層上部	土師器	甕	頸部～体部	(頸部径) 15.5		6.5	刷毛目 指頭圧痕→ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙 7.5YR6/4 にぶい橙	1～3mm以下の石英・長石を含む	良	
94	第1遺構面形成層上部	土師器	甕	頸部～体部			7.5	刷毛目，ナデ 指頭圧痕→篦削り，ナデ	5YR6/6 橙 7.5YR6/4 にぶい橙	1～5mm以下の石英・長石を含む	良	
95	第Ⅱ層上部	須恵器	杯蓋	天井部			2.0	回転ナデ，回転篦削り 回転ナデ	N6/ 灰 N6/ 灰	微細粒をやや多く含む	良	
96	第Ⅱ層上部	須恵器	杯蓋	天井部			1.4	回転篦削り，ナデ 回転ナデ	N7/ 灰白 N7/ 灰白	1mm以下の石英・長石を含む	良	
97	第Ⅱ層上部	須恵器	杯蓋	口縁部			2.1	回転ナデ 回転ナデ	N6/ 灰 5B6/1 青灰	密	良	
98	第Ⅱ層上部	須恵器	杯蓋	口縁部	14.4		1.4	回転ナデ 回転ナデ	2.5Y8/3 淡黄 2.5Y8/2 灰白	密 1mm以下の石英・長石を含む	良	
99	第Ⅱ層上部	須恵器	杯蓋	口縁部	13.8		1.5	回転ナデ 回転ナデ	2.5GY7/1 明オリーブ灰 N7/ 灰白	密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
100	第Ⅱ層上部	須恵器	杯身	口縁部	12.6		1.5	回転ナデ 回転ナデ	N5/ 灰 N5/ 灰	1mm以下の石英・長石を含む	良	
101	第Ⅱ層上部	須恵器	杯身	口縁部			2.6	ナデ ナデ	N8/ 灰白 N8/ 灰白	密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
102	第Ⅱ層上部	須恵器	杯身	口縁部	11.6		3.4	回転ナデ 回転ナデ	N7/ 灰白 N6/ 灰	1mm以下の石英・長石を含む	良	
103	第Ⅱ層上部	須恵器	高台付椀か	口縁部	11.0		3.5	回転ナデ，回転篦削り ナデ	N6/ 灰 N6/ 灰	1mm以下の砂粒を含む	良	
104	第Ⅱ層上部	須恵器	高杯か	口縁部	12.0		2.2	回転ナデ 回転ナデ	N6/ 灰 N7/ 灰白	密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
105	第Ⅱ層上部	須恵器	高杯	脚部		10.8	0.9	回転ナデ 回転ナデ	N8/ 灰白 N8/ 灰白	密 1mm以下の石英・長石を含む	良好	
106	第Ⅱ層上部	須恵器	高杯	脚部		12.0	1.4	回転ナデ 回転ナデ	N6/ 灰 N6/ 灰	1mm以下の石英・長石を含む	良好	
107	第Ⅱ層上部	須恵器	高杯	脚部		12.0	1.9	回転ナデ 回転ナデ	10YR6/1 褐灰 2.5Y7/1 灰白	微細粒を含む	良好	
108	第Ⅱ層上部	土師器	甕	口縁部	15.8		2.6	ナデ 刷毛目	7.5YR7/4 にぶい橙 10YR8/3 浅黄橙	1mm以下の石英・長石を含む	良好	
109	第Ⅱ層上部	土師器	甕	頸部	(頸部径) 25.0		6.6	ナデ，縦刷毛 ナデ，横刷毛	10YR8/4 浅黄橙 7.5YR8/6 浅黄橙	1～2mm以下の石英長石を含む	良	
110	第Ⅱ層上部	土師器	高台付椀	底部		6.9	1.2	ナデ ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙 7.5YR8/4 浅黄橙	1mm以下の石英・長石を含む	良	
111	第Ⅱ層上部	土師器	杯	底部		6.0	1.1	ナデ ナデ	5YR7/4 にぶい橙 5YR2/1 黒褐	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	
112	第Ⅱ層上部	土師器	高杯	脚部			8.1	ナデ ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙 5YR3/2 暗赤褐	1～2mm以下の石英・長石を含む	良	
113	第Ⅱ層上部	土師器	足付釜	脚部	(器高)4.9，(厚み)2.5			指頭圧痕	7.5YR7/4 にぶい橙	1mm以下の石英・長石を含む	良好	
114	第Ⅱ層上部	備前焼	甕	底部		33.4	5.5	叩き 当て具痕（同心円文），ナデ	10YR6/1 灰 N6/ 灰	1mm以下の石英・長石を含む	良好	
115	SB101-7	須恵器	杯蓋	天井部			2.2	回転ナデ，回転篦削り 回転ナデ	5Y7/1 灰白 5Y7/1 灰白	1mm以下の石英・長石を含む	良	
116	SP113	須恵器	杯蓋	天井部			1.1	篦削り，ナデ ナデ	N8/ 灰白 N7/ 灰白	1mm以下の石英・長石を含む	良	
117	SP113	土師器	杯	口縁部			2.6	ナデ ナデ	5YR7/6 橙 2.5YR7/8 橙	1mm以下の石英・長石を含む	良	
118	SB101-5	土師器	杯	口縁部	12.0		3.3	ナデ→篦磨き 摩滅	10YR7/3 にぶい黄橙 2.5YR8/4 淡橙	1mm以下の石英・長石を含む	良	
119	SB101-5	土師器	壺	口縁部	6.6		3.8	ナデ ナデ	10YR8/4 浅黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙	1mm以下の石英・長石を含む	良	
120	SP113	土師器	甕	口縁部			1.1	ナデ ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙 10YR7/4 にぶい黄橙	1mm以下の石英・長石を含む	良	
125	SD101	須恵器	杯	底部		7.3	2.6	回転ナデ，回転篦削り 指頭圧痕→回転ナデ	2.5GY4/1 暗オリーブ灰 2.5GY5/1 オリーブ灰	5mm以下の石英・長石等を含む	良好	
126	SD101	須恵器	高台付椀	底部		11.8	1.4	回転ナデ 回転ナデ	7.5Y7/1 灰白 N7/ 灰白	やや密 3mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	
127	SD101	須恵器	杯身	体部			2.3	回転ナデ 回転ナデ	N5/ 灰 N6/ 灰	微細粒を含む	良好	

番号	遺構名	種類	器種	部位	法量（cm）			調整	色調	胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面（上） 内面（下）	外面（上） 内面（下）			
128	SD101	土師器	浅い鉢もしくは椀	口縁部	33.0		5.0	刷毛目 ナデ	10YR8/1 灰白 10YR7/2 にぶい黄橙	やや密 1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	良	
129	SD102	土師器	高杯	杯部～脚部			2.0	ナデ 指頭圧痕，シボリ目	5YR7/4 にぶい橙 5YR8/3 にぶい淡橙	1mm以下の石英・長石を含む	良	
130	SD103	須恵器	杯蓋	口縁部	13.0		4.8	回転ナデ，回転篦削り 回転ナデ	N5/ 灰 N5/ 灰～N4/ 灰	2mm以下の石英・長石等の砂粒を含む	良好	
131	SD103	須恵器	杯蓋	天井部			1.9	回転ナデ，回転篦削り 回転ナデ，ナデ	N3/ 暗灰 N7/ 灰白	1mm以下の石英・長石を含む	良	
132	SD103	須恵器	杯身	口縁部	8.5		3.0	回転ナデ 回転ナデ	N6/ 灰 N6/ 灰	1mm以下の砂粒を含む	良好	
133	SD103	須恵器	杯身	口縁部	11.4		2.6	回転ナデ，回転篦削り 回転ナデ	N6/ 灰 10BC5/1 青灰	密 1mm以下の石英・長石を含む	良	
134	SD103	須恵器	杯身	体部			3.1	回転ナデ 回転ナデ	N5/ 灰 N5/ 灰	2～3mm以下の砂粒を含む	良	
135	SD103	須恵器	杯身	底部		3.0	1.2	回転ナデ，回転篦削り 指頭圧痕→回転ナデ	7.5Y4/1 灰 7.5Y4/1 灰～10YR4/1 褐灰	3mm以下の砂粒を含む	良好	
136	SD103	須恵器	杯身	底部		8.8	1.0	指頭圧痕→回転ナデ 指頭圧痕→回転ナデ	N5/ 灰 N5/ 灰	1mm以下の砂粒を含む	良	
137	SP103	須恵器	杯	口縁部	13.2		1.1	回転ナデ 回転ナデ	N6/ 灰 N6/ 灰	1mm以下の石英・長石を含む	良	
138	SD103	須恵器	甕	口縁部	17.8		3.5	回転ナデ 回転ナデ，当て具痕（同心円文）	N5/ 灰 N5/ 灰	1mm以下の石英・長石を含む	良好	
139	SD103	須恵器	甕	口縁部	18.4		5.0	回転ナデ 回転ナデ	5PB5/1 青灰 N6/ 灰～ N7/ 灰白	2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	
140	SD103	須恵器	高杯	杯部			2.7	回転ナデ 回転ナデ	N6/ 灰～ N3/1 暗灰 N7/ 灰白	精良	良好	
141	SD103	土師器	杯	口縁部				回転ナデ 回転ナデ	5YR7/3 にぶい橙 5YR7/3 にぶい橙	1mm以下の石英・長石等を含む	良	
142	SD103	土師器	鉢	口縁部	9.6		2.9	ナデ，縦刷毛 ナデ	2.5YR6/8 橙 5YR6/8 橙	3mm以下の石英・長石を含む	良	
143	SD103	土師器	杯か	口縁部	13.2		1.8	ナデ ナデ	10YR8/1 灰白～ 10YR7/2 にぶい黄橙 10YR8/2 灰白	2mm以下の石英・長石等を含む	良	
144	SD103	土師器	杯	底部		14.6	0.6	ナデ ナデ	10YR5/1 褐灰 10YR5/2 灰黄褐	1mm以下の石英・長石を含む	良	
145	SD103	土師器	高杯	脚部				篦削り 篦削り	5YR4/4 にぶい赤褐 7.5YR7/4 にぶい橙	1mm以下の石英・長石を含む	良	
146	SD103	土師器	甕	口縁部	32.0		3.9	摩滅 横刷毛目	7.5YR8/3 浅黄橙 7.5YR8/2 灰白	2mm以下の石英・長石を含む	良	
147	SD103	土師器	甕	口縁部	16.0		1.7	指頭圧痕→回転ナデ 回転ナデ，横刷毛，篦削り	10YR8/2 灰白～ 2.5YR6/4 にぶい橙 10YR8/2 灰白～ 2.5YR6/4 にぶい橙	3mm以下の石英・長石等を含む	良	
148	SD103	土師器	甕	口縁部	22.0		2.1	ナデ，接合痕 ナデ	5YR7/8 橙 7.5YR7/3 にぶい橙	1mm以下の石英・長石を含む	良	
149	SD103	土師器	甕	体部			2.5	縦刷毛，ナデ 篦削り	7.5YR3/1 黒褐～ 7.5YR5/2 灰褐 7.5YR6/2 灰褐～ 7.5YR5/1 褐灰	5mm以下の石英・長石等を多く含む	良	
150	SD103	土師器	甕	口縁部	22.0		3.0	ナデ 横刷毛目	7.5YR5/1 褐灰 7.5YR6/2 灰褐	1mm以下の石英・長石を含む	良	
151	SD103	土師器	甕	底部		6.4	2.4	刷毛目 指頭圧痕→篦削り，ナデ	2.5Y7/3 浅黄 2.5Y7/2 灰黄	1mm以下の石英・長石を含む	良	
152	SD103	土師器	甕	底部		8.0	4.4	刷毛目 ナデ→篦削り	2.5YR7/1 灰白 2.5YR7/1 灰白	1mm以下の石英・長石を含む	良	
153	SD103	土師器	高杯	脚部		10.0	3.5	摩滅 摩滅	10YR6/1 褐灰 10YR8/2 灰白	2mm以下の石英・長石を含む	良	
154	SD103	土師器	土鍋	把手			6.0	指押さえ，刷毛 板ナデ，篦削り，指押さえ	2.5YR6/3 にぶい橙～ 2.5YR7/3 淡赤橙 10YR7/2 にぶい黄橙～ 7.5YR7/3 にぶい橙	4mm以下の石英・長石等を含む	良	
156	第Ⅲ層	須恵器	杯	口縁部	10.1		2.1	回転ナデ 回転ナデ	5Y6/1 灰 5Y7/1 灰白	1mm以下の石英・長石を含む	良	
157	第Ⅲ層	須恵器	杯	底部か			2.1	回転篦削り 回転ナデ	N7/ 灰白 N6/ 灰	1mm以下の石英・長石を含む	良	
158	第Ⅲ層	須恵器	杯身	底部			1.0	回転篦削り 回転ナデ	N7/ 灰白 N6/ 灰	密 2mm以下の石英・長石を含む	良	
159	第Ⅲ層	須恵器	高台付椀	底部	9.1		1.2	回転ナデ 摩滅	2.5Y8/1 灰白 2.5Y7/3 浅黄	やや密 1mm以下の石英・長石を含む	不良	
160	第Ⅲ層	須恵器	杯	口縁部	10.9		2.2	回転ナデ 回転ナデ	N7/ 灰白 N7/ 灰白	1mm以下の石英・長石を含む	良	
161	第Ⅲ層	須恵器	壺	底部		6.2	2.2	ナデ，叩き 指頭圧痕→ナデ	N4/ 灰 N4/ 灰	1mm以下の石英・長石を含む	良	
162	第Ⅲ層	須恵器	高杯	口縁部	12.8		3.2	回転ナデ 回転ナデ	5Y6/1 灰 5Y7/1 灰白	1mm以下の石英・長石を含む	良	
163	第Ⅲ層	須恵器	高杯	杯部			1.2	回転ナデ 回転ナデ	N6/ 灰 N6/ 灰	1mm以下の石英・長石を含む	良	
164	第Ⅲ層	須恵器	高杯	杯部			2.4	回転ナデ 回転ナデ	5Y6/1 灰 5Y6/1 灰	1mm以下の石英・長石を含む	良	
165	第Ⅲ層	須恵器	壺	体部			5.4	回転ナデ，回転篦削り 回転ナデ→当て具痕	N4/ 灰 N7/ 灰白	1mm以下の石英・長石を含む	良	
166	第Ⅲ層	須恵器	盤もしくは皿	体部			3.5	回転篦削り，ナデ 回転ナデ	7.5YR4/1 灰 N7/ 灰	1～2mm以下の石英・長石を含む	良好	
167	第Ⅲ層	須恵器	壺もしくは壺	口縁部	13.6		1.4	回転ナデ 回転ナデ	N5/ 灰 N4/ 灰	1mm以下の石英・長石を含む	良	
168	第Ⅲ層	須恵器	ハソウ	体部			5.3	回転ナデ，回転篦削り 回転ナデ	5Y6/1 灰 N7/ 灰白	1mm以下の石英・長石を含む	良	円孔付近に凹線2条有り。
169	第Ⅲ層	須恵器	ハソウ	体部	（体部径） 9.9	3.4	7.3	回転篦削り，回転ナデ 回転ナデ	N6/ 灰 N6/ 灰	1mm以下の砂粒を含む	良好	円孔上部に沈線一条有り。
170	第Ⅲ層	土師器	甕	口縁部			2.2	ナデ ナデ	5YR6/8 橙 5YR6/8 橙	1mm以下の石英・長石を含む	良	
171	第Ⅲ層	土師器	甕	口縁部	15.4		1.5	ナデ ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙 5YR6/6 橙	2mm以下の石英・長石を含む	良	
172	第Ⅲ層	土師器	高杯	脚部			3.1	指頭圧痕→ナデ シボリ目	5YR7/6 橙 7.5YR7/6 橙	やや粗い 2mm以下の石英・長石・雲母を含む	良	
173	第Ⅲ層	土師器	高杯	杯部～脚部			4.6	指頭圧痕→ナデ ナデ，シボリ目	5YR6/6 橙 7.5YR7/6 橙	1mm以下の石英・長石を含む	良	
174	第Ⅲ層	瓦	平瓦		6.7		2.1		N8/ 灰白 N7/ 灰白	やや粗い 2mm以下の石英・長石を含む	良	
175	第Ⅲ層	瓦	平瓦		（長さ）7.1，（厚さ）2.4				7.5YR6/4 にぶい橙 5YR6/8 橙	1～2mm以下の石英・長石を含む	良	

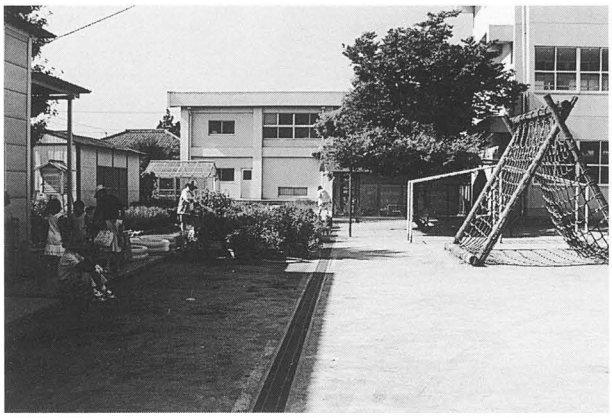
第5表 遺 物 観 察 表（石製品）

番号	遺構名	器種	法量（cm，g）				材質	備考
			長さ	幅	厚さ	重さ		
19	SD1	砥石	3.0	3.6	3.8	59.2		

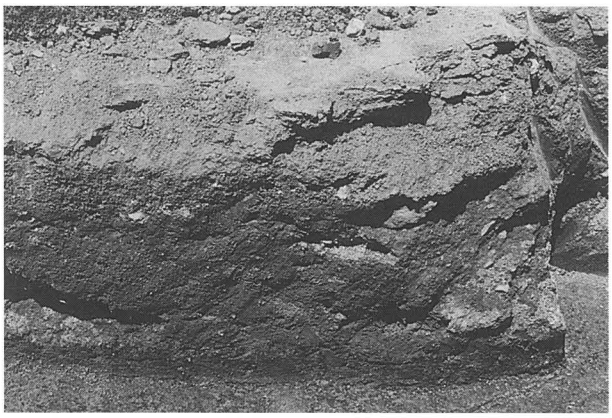
第6表 遺 物 観 察 表（木製品）

番号	遺構名	器種	法量（cm）			樹種	備考
			長さ	幅	厚さ		
121	SB1-4	柱材	51.6	16.1	12.4	カヤ	
122	SB1-5	柱材	48.8	13.0	11.3	イヌマキ	
123	SB1-7	柱材	38.9	17.2	15.5	イヌマキ	
124	SB2-1	柱材	28.8	8.7	6.7	カヤ	
155	鳥形木製品	祭祀具	16.4	3.0	0.8	ヒノキ科アスナロ属	

（註） 口径・底径は復元値，器高は残存高を示す。



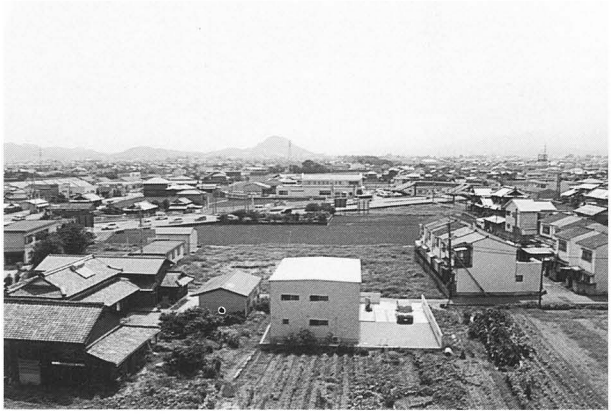
1　試掘調査前（北から）



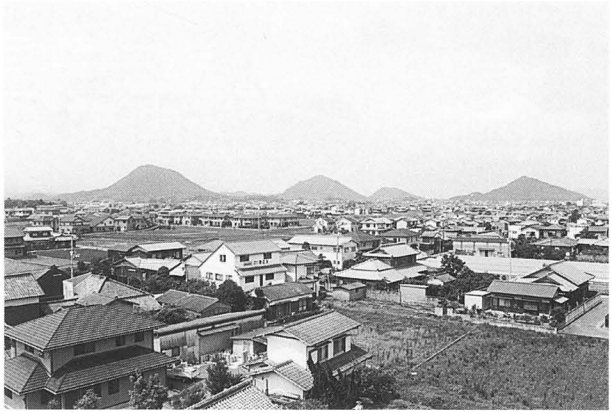
2　試掘トレンチ土層

3　試掘トレンチ（北から）

4　試掘トレンチ遺構検出状況



5　遺跡から東を望む



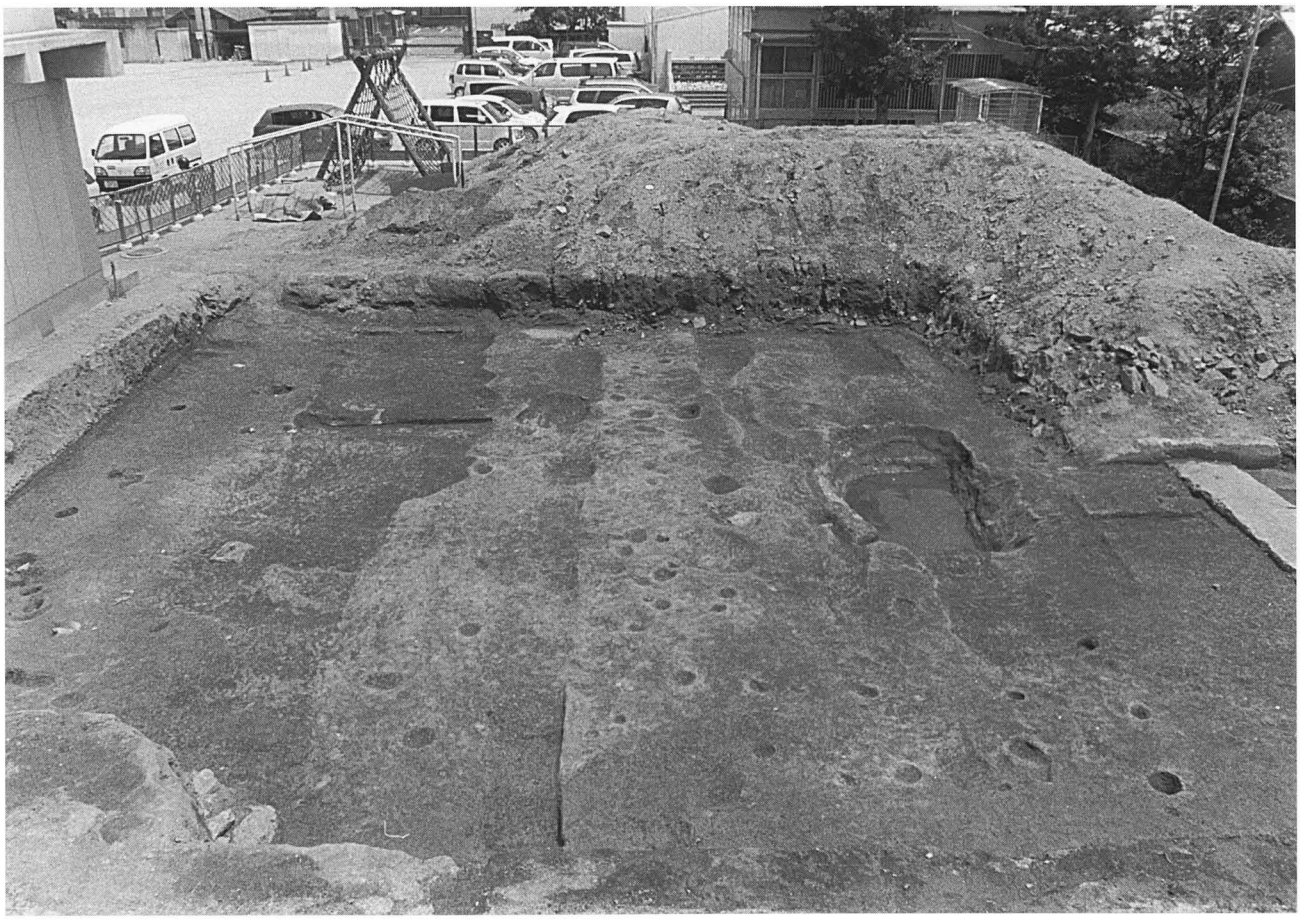
6　遺跡から西を望む

7　遺跡から南を望む

8　遺跡から北を望む

図版２

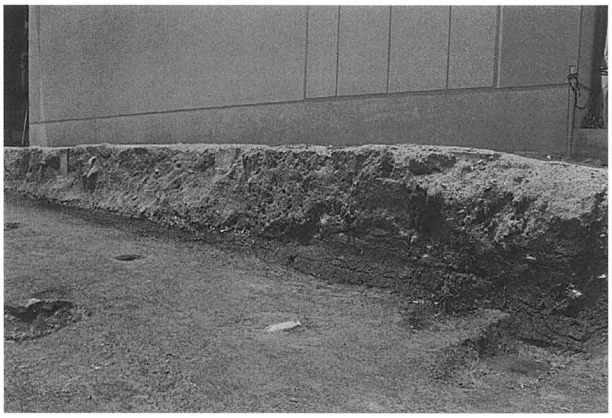
１　第１遺構面全景（西から）



２　第１遺構面全景（南から）

１　東壁面土層

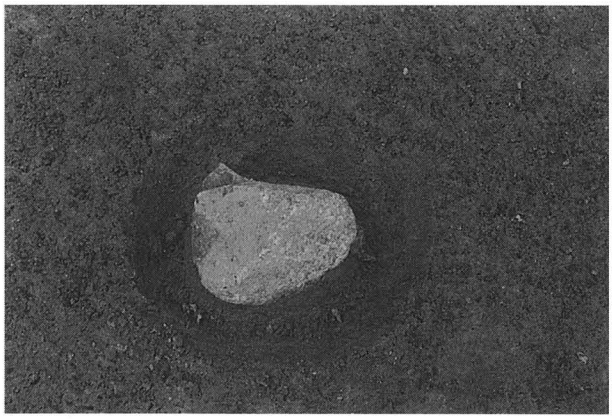
２　南壁面土層



３　西壁面土層

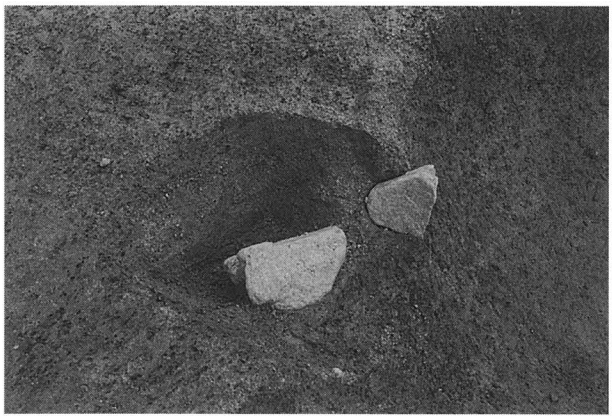
４　第１遺構面検出状況（北から）

５　第１遺構面西側遺物出土状況



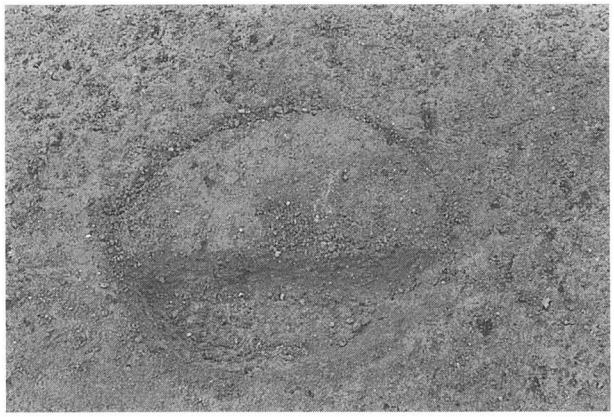
６　SP４完掘状況（東から）

７　SP６完掘状況（東から）

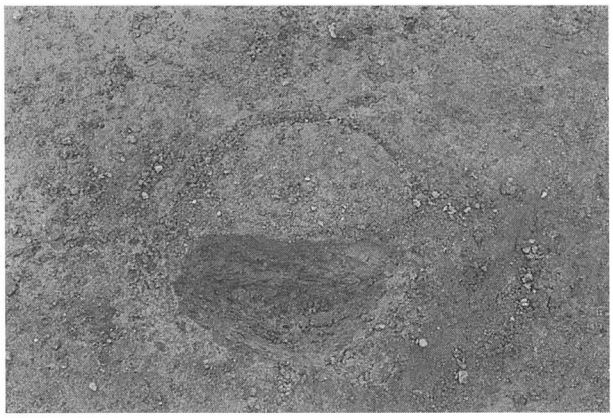


８　SP13完掘状況（南東から）

図版４



1　SP20 断面（北から）



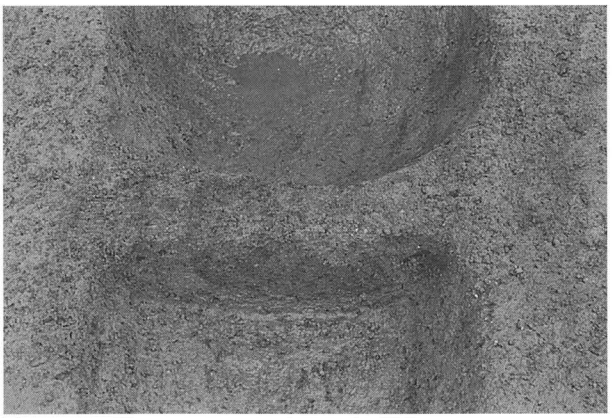
2　SP31断面（北から）

3　SD１完掘状況と柱穴群（南から）

4　SD１土層断面（南から）

5　SD２完掘状況（西から）

6　SD３完掘状況（西から）



7　SD５完掘状況（東から）

8　SK１完掘状況（北から）

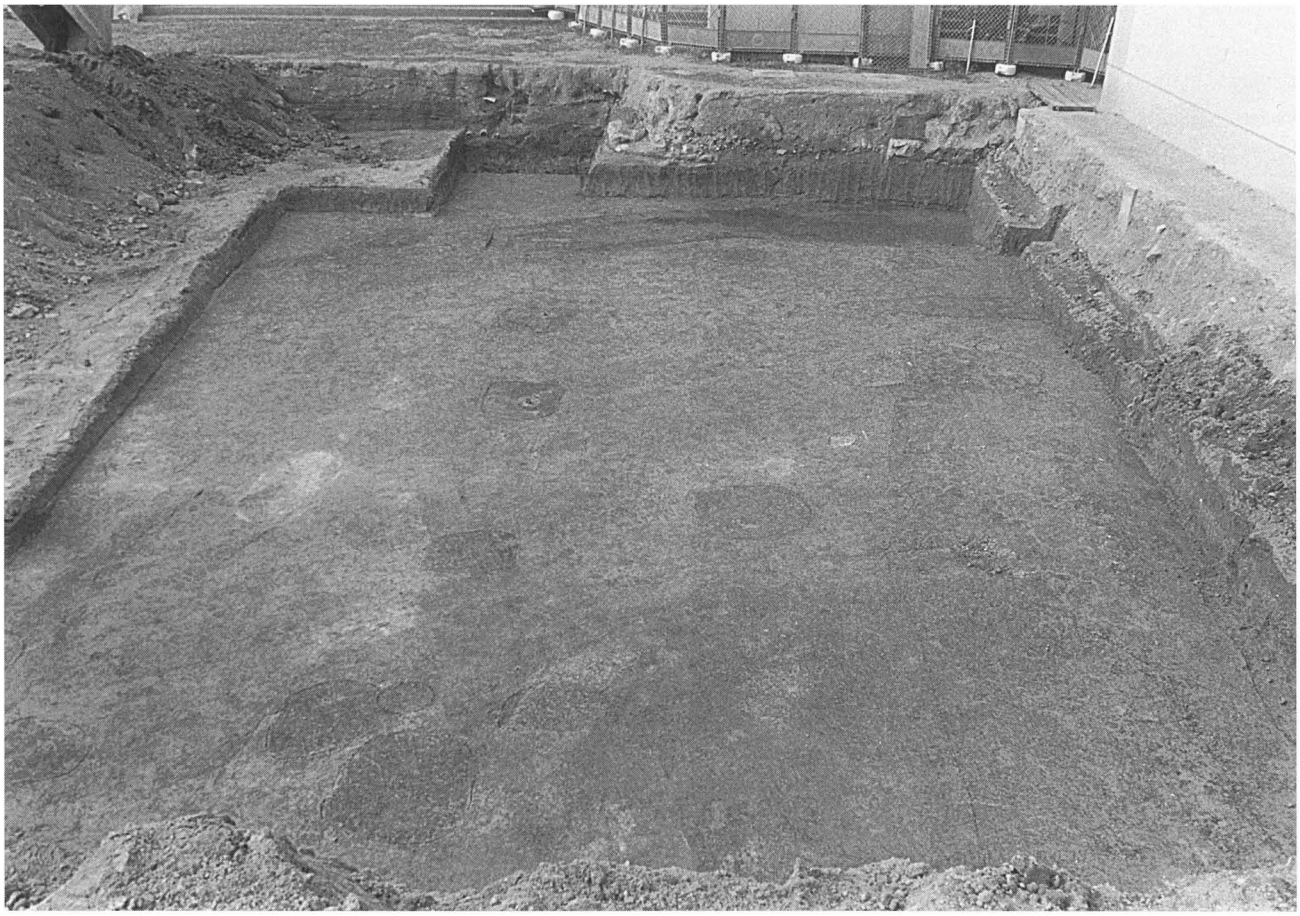
１　第２遺構面検出状況（南から）

２　第２遺構面完掘状況（南から）

図版６

１　第２遺構面検出状況（東から）

２　第２遺構面完掘状況（東から）



１　第２遺構面検出状況（北から）

２　第２遺構面完掘状況（北から）

図版８

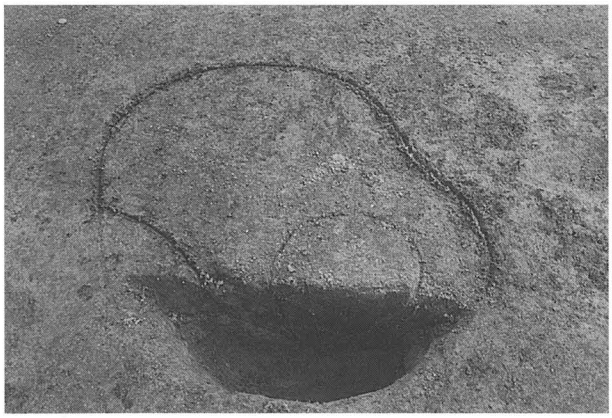
1　第２遺構面南壁面土層

2　第２遺構面西壁面土層

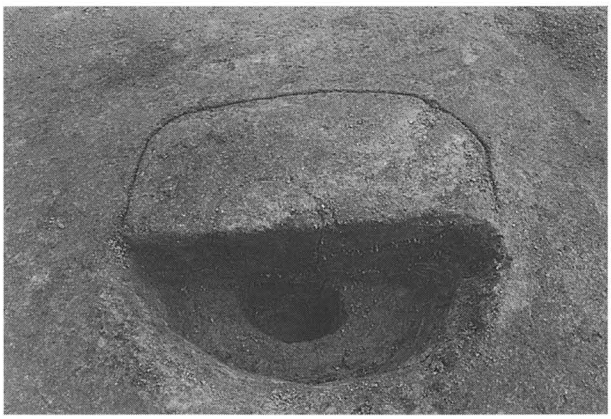
3　SB101・SD101検出状況（北から）

4　SB102検出状況（北から）

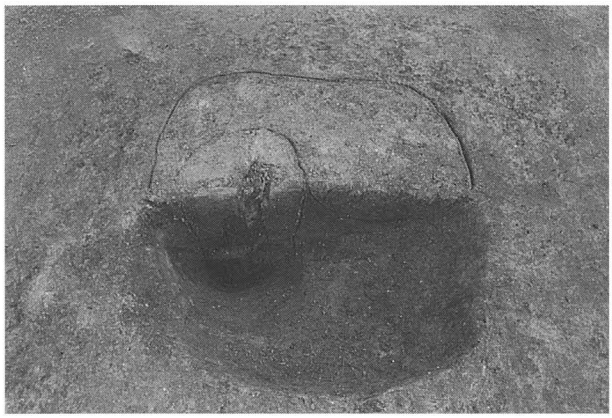
5　SB103検出状況（東から）



6　SB101－１上面検出状況および断面（南から）

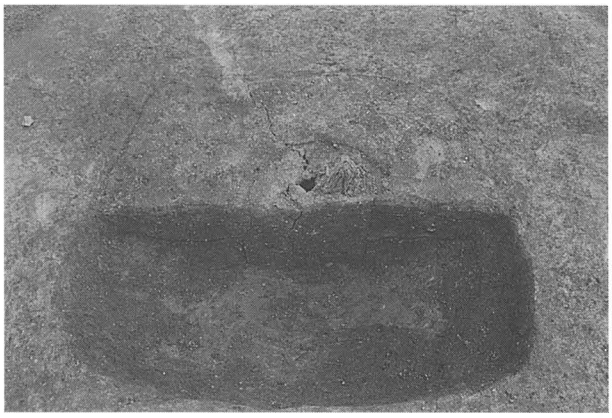


7　SB101－２ 上面検出状況および断面（南から）



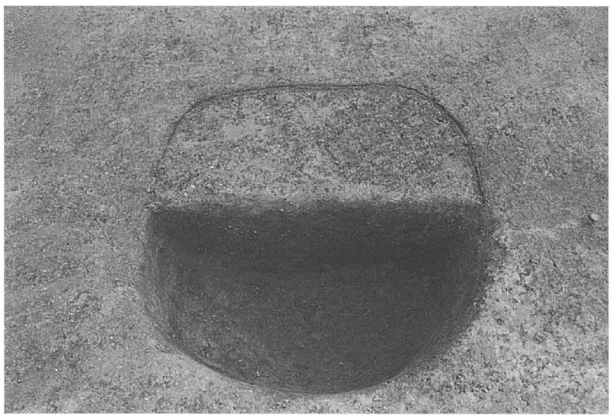
8　SB101－４上面検出状況および断面（東から）

1　SB101－４柱材検出状況（東から）



2　SB101－５上面検出状況および断面（東から）

3　SB101－５柱材検出状況（東から）

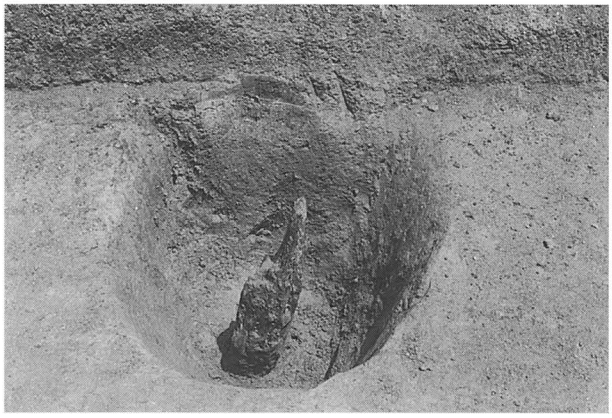


4　SB101－６上面検出状況および断面（東から）

5　SB101－７上面検出状況および断面（東から）

6　SB101－７柱材検出状況（東から）

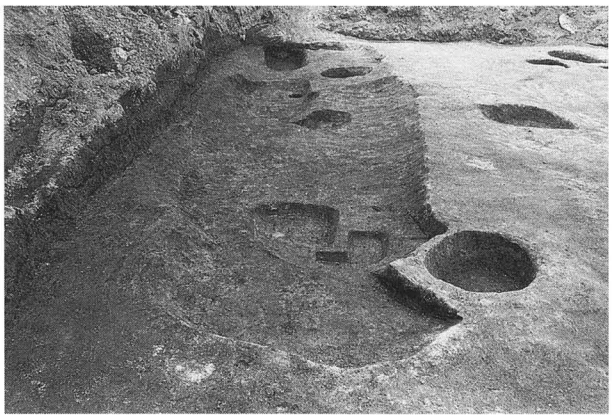
7　SB102－１上面検出状況および断面（西から）



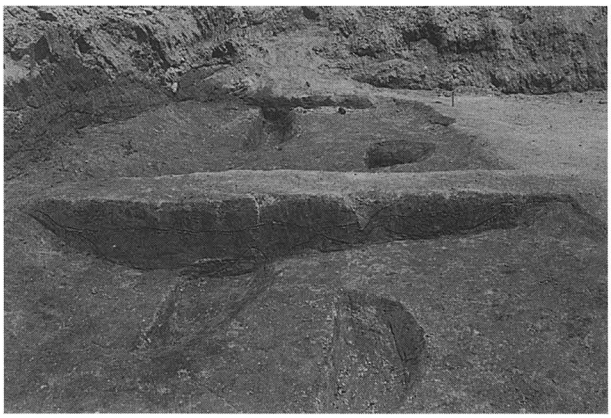
8　SB102－１柱材検出状況（西から）

1　SB102－２上面検出状況および断面（西から）

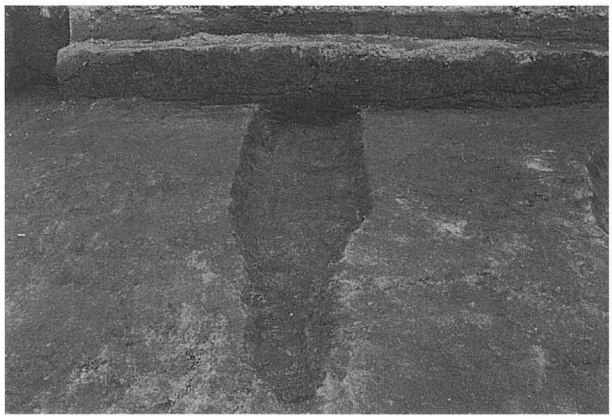
2　SB102－３上面検出状況および断面（西から）



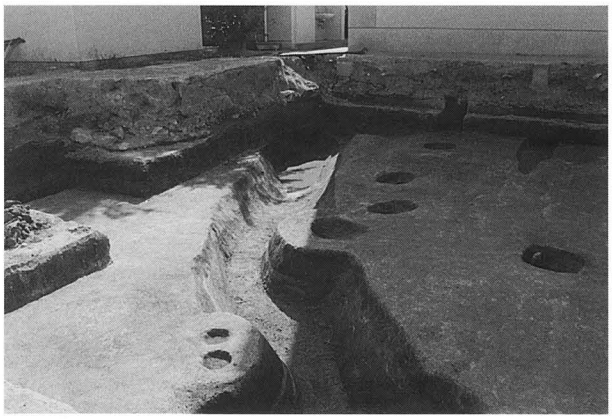
3　SD101完掘状況（南から）



4　SD101断面土層（南から）

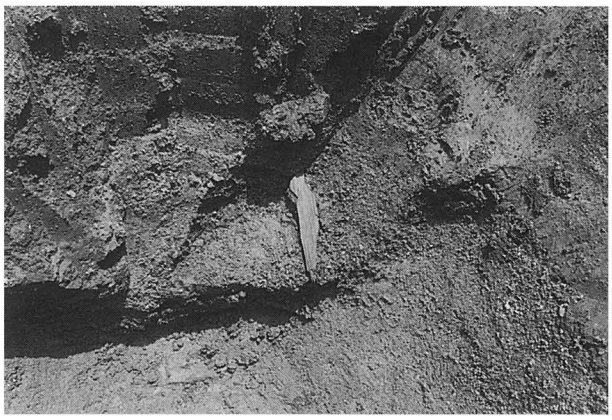


5　SD102完掘状況（東から）



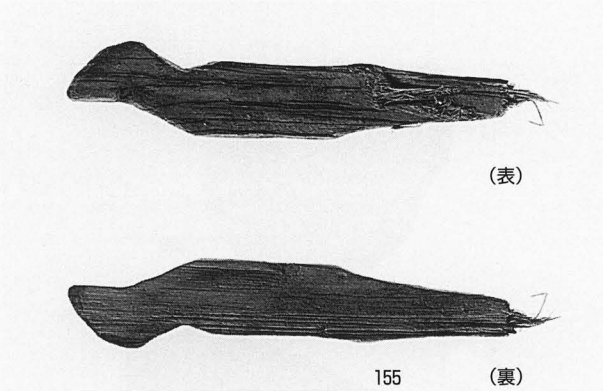
6　SD103完掘状況（東から）

7　SD103断面土層（西から）

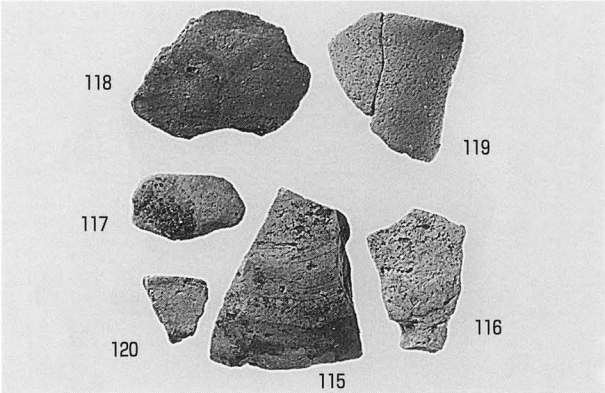


8　SD103鳥形木製品出土状況（西から）

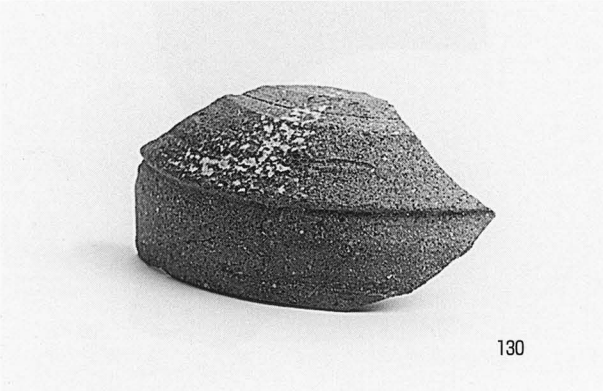
1　SB101－4・SB101－5・SB101－7 出土柱材



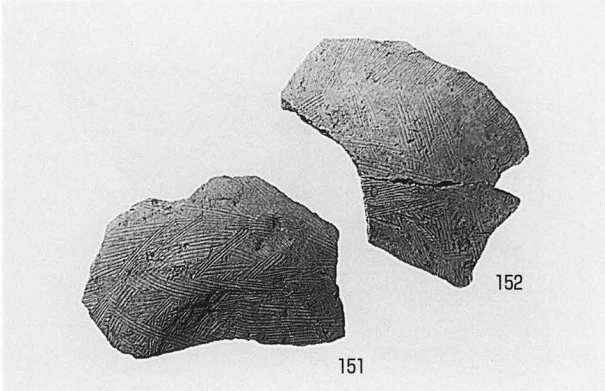
2　SD103出土鳥形木製品



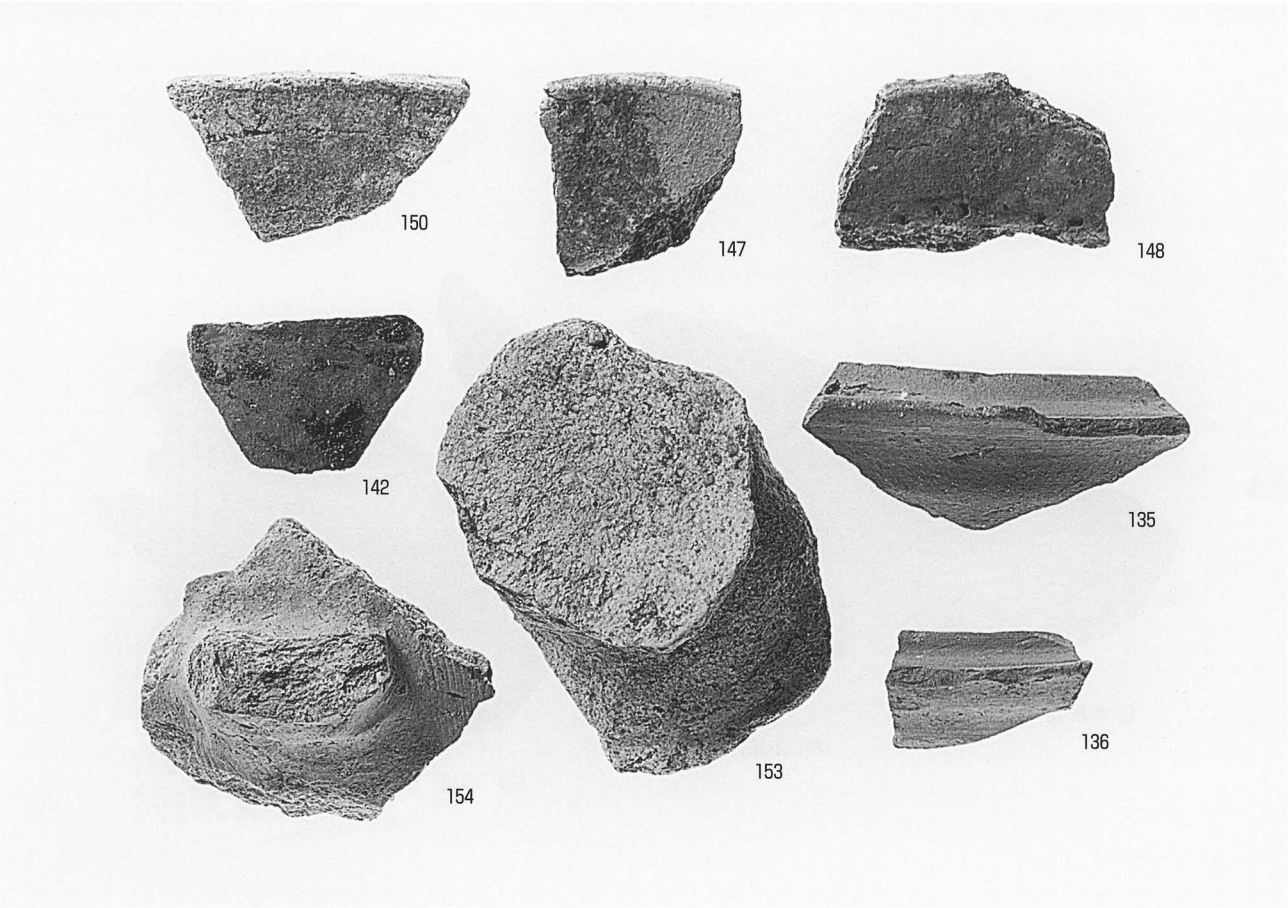
3　第２遺構面検出SB・SP出土遺物



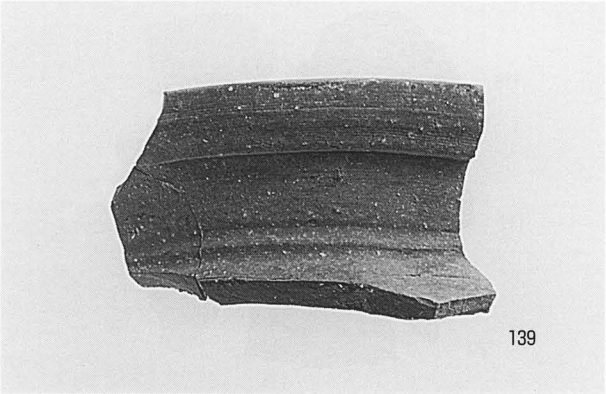
4　SD103出土遺物



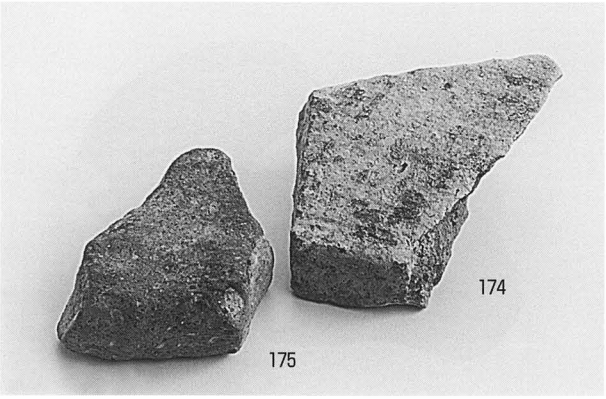
5　SD103出土遺物



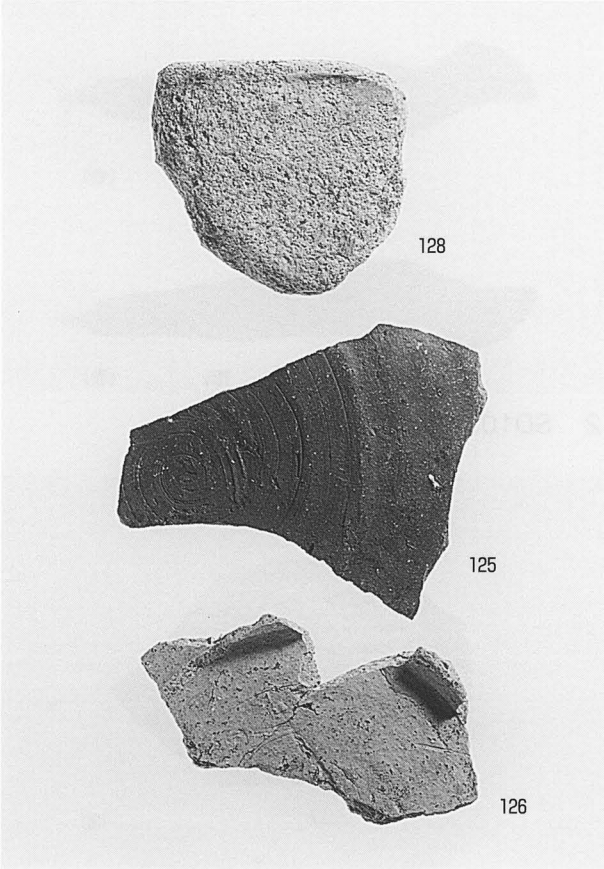
1　SD103出土遺物



2　SD103出土遺物



3　第２遺構面上部堆積層出土遺物

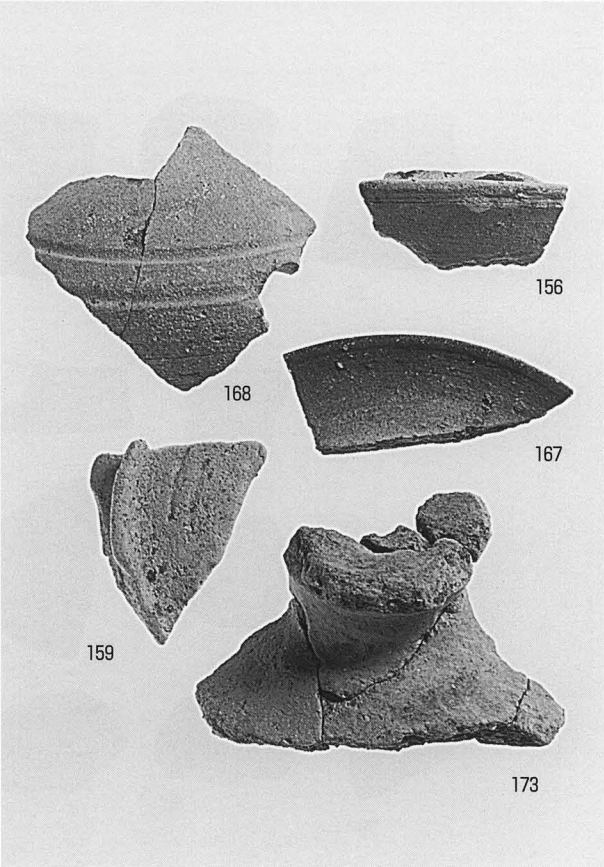


4　SD101出土遺物

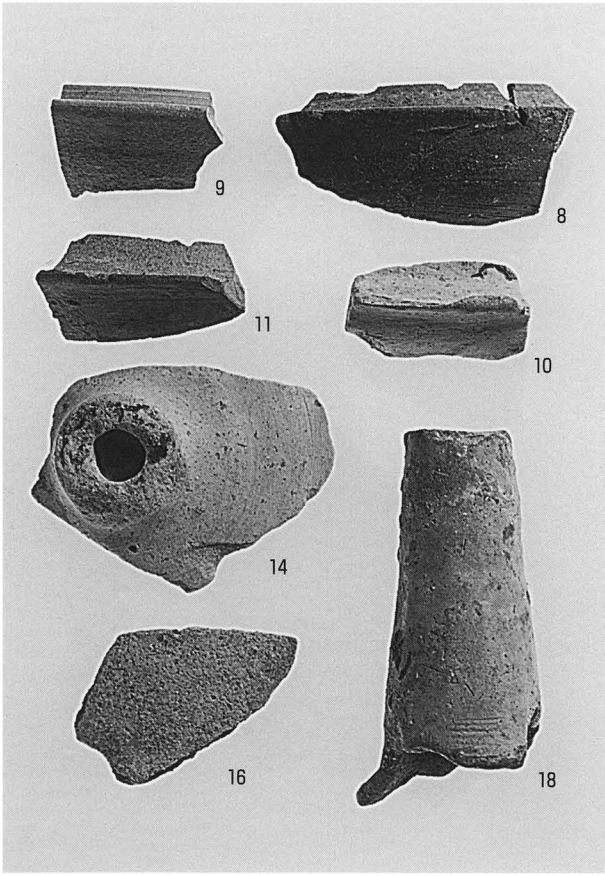
1　第２遺構面上部堆積層出土遺物

2　SD１出土遺物

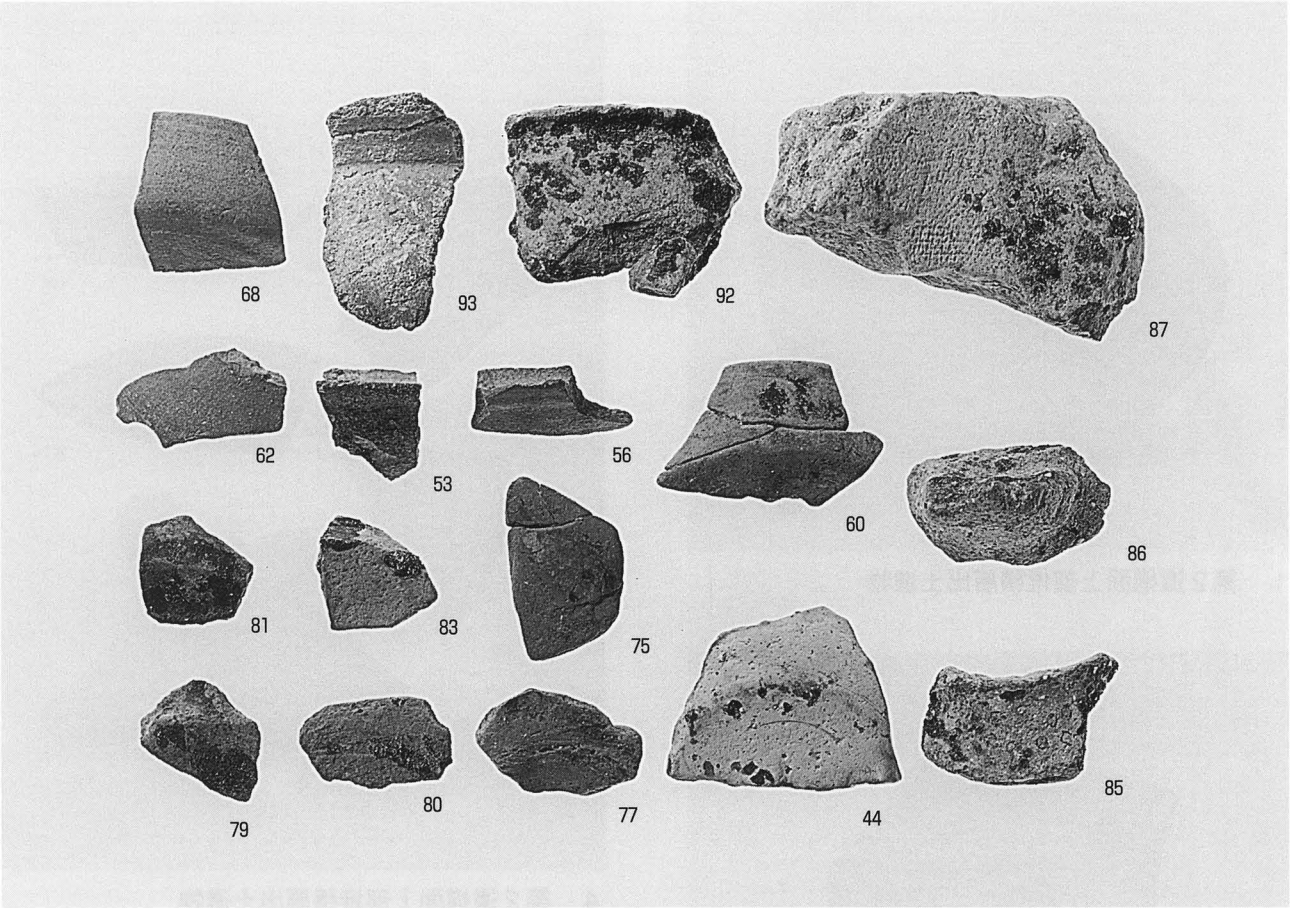
3　第１遺構面形成層上部出土遺物



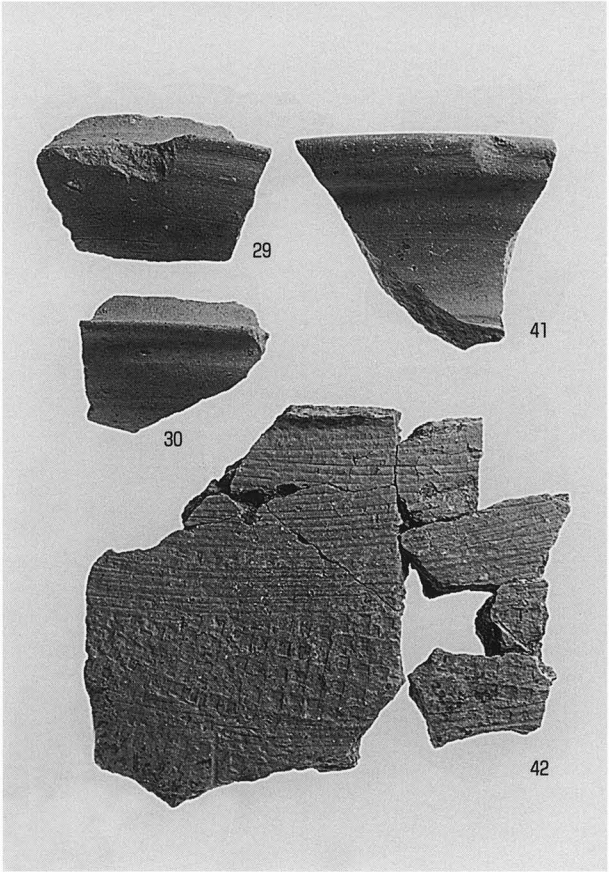
4　第２遺構面上部堆積層出土遺物



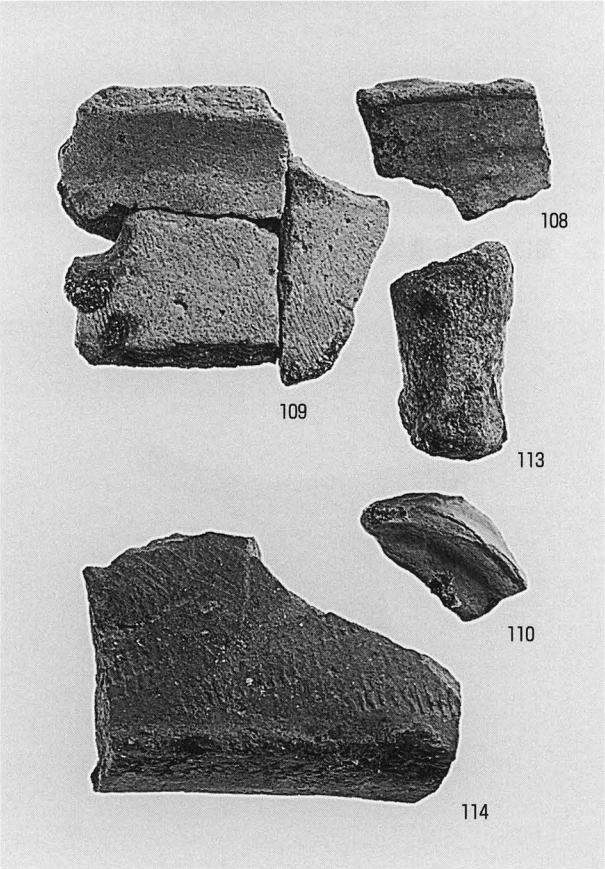
5　SD１出土遺物



1　第１遺構面形成層上部出土遺物



2　第１遺構面直上出土遺物



3　第１遺構面上層出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	にししたいせき
書　　名	西下遺跡
副 書 名	高松市立十河小学校校舎建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズNo.	第114集
編 集 者 名	山元 敏裕，中村 茂央
編 集 機 関	高松市教育委員会
所　在　地	〒760-8571　香川県高松市番町一丁目８番15号　TEL087(839)2660
発行年月日	平成20年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
西下遺跡（にししたいせき）	高松市（たかまつし） 十川西町（そがわにしまち）	37201		34°16′29″	134°6′10″	2007.6.4～2007.7.27	約221㎡	校舎増築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西下遺跡	集落	飛鳥・奈良	掘立柱建物跡 溝	須恵器 土師器 木製品	７世紀前半以降と考えられる大型掘立柱建物跡と鳥形木製品を確認した。
		中世	柱穴 溝	須恵器 土師器	

要　　約	西下遺跡は高松平野南部に所在する古代と中世の集落遺跡で，本調査では中世と古代の遺構面を検出した。特に古代の遺構面では，７世紀の高松平野では大型の掘立柱建物跡（SB101）や，条里地割と絡む遺構をいくつか検出している。また，７世紀初頭の溝（SD103）からは祭祀具である鳥形木製品が出土した。

西下遺跡

高松市立十河小学校校舎建設事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20年３月31日

編集・発行　高松市教育委員会
高松市番町一丁目８番15号
印刷　若葉プリント